第4章　スク時代（原史時代）

Ⅰ　遺跡の概況
Ⅱ　村建て伝承に関わる遺跡
Ⅲ　名蔵シタダル海底遺跡について
Ⅳ　八重山諸島の鉄器・鍛冶遺跡と伝承
Ⅴ　新川のビロースク（美良底）遺跡とその周辺
Ⅵ　フルスト原遺跡について
Ⅶ　八重山諸島出土の古陶磁（関口廣次氏共同報告）
Ⅷ　石垣島・仲筋村の古墓出土の緑釉水注について

Ⅰ　遺跡の概況

八重山諸島のスク時代の遺跡からは何万点という厖大な中国製の貿易陶磁器（舶載陶磁器）が出土している。中国製の貿易陶磁器は日本本土や沖縄本島とは比べものにならないほど多量に出土する。

これらは中国商人らとの交易によってもたらされたもので、白磁、青磁、褐釉陶器（南蛮陶器・八重山ではスビガミという）、染付などがある。この貿易陶磁器がスク時代の遺跡から多量に出土するということは、スク時代（一二世紀後半から一六世紀。沖縄ではグスク時代）には、八重山の島々と大陸との間で盛んに交易が行われたことを意味する。

八重山の歴史の中で一番華やかな時代が中国と大密貿易を行った「スク時代」である。八重山の全遺跡数の七～八割がスク時代の遺跡である。これらは島々の周囲を取り巻く裾礁（リーフ）の割れ目（船の出入りに利用された）が一望できる一帯に立地している。一帯の地名のほとんどが、「○○スク」と呼ばれ、「底」、或いは「城」の字が当てられているので、八重山では「スク時代」と呼んでいる。また、ブスヌヤシキ（武士の屋敷）、ブスヌヤー（武士の家）、ブスヌヤーヌイシガキ（武士の家の石垣）、ブスヌヤマ（武士の山）、大和墓（八島墓）、元○○村などとも呼ばれ、大部分が中世の村跡や墓地といわれるところである。

これらの遺跡においては、①立地場所、②飲料水（流水、湧水、降り井戸、掘抜井戸）、③共伴遺物、④遺跡の規模の大小、⑤伝承の有無、⑥文献の有無などに違いがある。こうした違いは、地形的な条件や時代的な変遷、さらには貿易先の相違などによるものと思われる。

八重山のスク文化は沖縄のグスク文化により同一文化圏に統合された結果生まれたものでグスク文化と同一の歩みをした。けれども沖縄のグスク文化が一四世紀後半頃からは中国の明との朝貢貿易（公貿易）に支えられていたのに比べ、八重山においては、民間の中国商人らと密貿易（私貿易）を頻繁に行って独自の文化を築いていた。八重山には中国製の陶磁器文化が定着していたと思われる。

一．スク時代の登場時期

ところで、八重山において古陶磁の研究は今ようやくその端緒についたばかりである。八重山において、スク文化（外来陶磁器文化）の登場時期を九世紀頃とみるか、一〇世紀前後とみるか、一一世紀末か、或いは沖縄本島同様に一一世紀末から一二世紀初頭とみるのか、いくつかのとらえ方がある。

六六三年、大和朝廷は白村江の戦いを契機に朝鮮半島から手を引くが、進んだ唐の大陸文化は積極的に受け入れた。ところが朝鮮半島の新羅国との関係が悪化したため、北路（朝鮮経由）では唐へ行けなくなる。そ

表１　八重山のスク時代の年表

時代			年代	経済	事項
先史時代	無土器時代	第二期	７１４年 9～10世紀頃 １０１０年（ＡＤ） １１世紀～ １２世紀頃	漁撈・狩猟	◎南島の島々の奄美・球美（久米島）・信覚（石垣島）など大和朝廷に入貢 ◎無土器時代の貝塚から銭貨「開元通寶」（唐の武徳四年〈621〉から、唐代末まで中国各地で鋳造され、広く東アジア一帯に宋・元・明時代まで通用）が発見されている。 西表島の仲間第一貝塚３枚採集・石垣島の崎枝赤崎貝塚群33枚出土 石垣島の嘉良嶽貝塚群１枚採集・石垣島の吹通川河口貝塚１枚採集 ※．９～10世紀頃から、中国商人らによって「絹」に加えて、「中国製の貿易陶磁器」などが貿易商品として東南アジア諸国へ輸出される。 ◎西表島の船浦貝塚（無土器時代の貝塚）Ⅱ層　1010年ＡＤ ※．11世紀から13世紀頃、徳之島の伊仙町伊仙のカムィヤキ古窯やヤナギダ古窯で南島の島々向けに、「類須恵器」が多量に生産される。 ◎波照間島の大泊浜貝塚（無土器時代の貝塚） 第四層から滑石製石鍋（長崎県の西彼杵半島産）・類須恵器（徳之島のカムィヤキ系陶器）・中国製の白磁玉縁碗・白磁端反り碗・褐釉陶器・鉄鑿などが出土した。
原史時代	スク時代	前期	１１８５年 １３世紀～ １３５０年（ＡＤ）	漁撈・狩猟・密貿易・農業	※．壇ノ浦の戦い後、平家の落武者が、南島の島々に渡来すると伝える。 ※．中国商人らが13世紀中葉から14・15世紀にかけて、香料（スパイス）や宝貝などを求めて、東南アジアの諸国へ渡来する。 ※．九州の武士や商人らが、中国製の貿易陶磁器を求めて、類須恵器・勾玉・丸玉などを携え、南島の島々や八重山の島々に渡来し、積極的に南島経営に乗りだす。 ◎八重山の海岸寄りの砂丘に住んでいた無土器の先住人は、外来文化と接触した際、離散、または逃避して内陸部の石灰岩の岩陰や洞窟（アブ）などに住み、消極的な交易を行う。 （石垣島の石底山遺跡・平得ペーギナー遺跡・宮良ヤドゥムレー遺跡等） ◎石垣島の山原貝塚　600±100ＢＰ
		後期	１３６８年 １３７２年 １３９０年 １４世紀～ １５世紀頃 １４０４年 １４２９年 15～16世紀頃 １４３６年 １４５２年 １４７１年 １４７７年 15～16世紀頃 １６世紀頃 １５００年		※．漢民族の国家「明」が興こり、招撫政策に応ずる諸国との冊封による朝貢貿易（公貿易）が行われる。民間貿易（私貿易）は、すべて禁止する。 ※．沖縄島の中山察度、はじめて「明」に進貢する。 ◎宮古、八重山、はじめて沖縄島の中山に入貢する。 ◎船が往来・停船できる海岸（リーフの口のあるところ）寄りに人々が定住する。遠見台（見晴らし台）を作り、積極的に中国海商らを迎える密貿易体制を整える。（石垣島の元平久保村遺跡、元桴海村遺跡等） ※．明の冊封使、はじめて沖縄島の中山に渡来する。 ※．日本では、足利義満による明との勘合貿易がはじまる。 ※．尚巴志が山南王を滅ぼし、三山（沖縄島）を統一する。 ◎八重山においては、15世紀から16世紀にかけて、中国海商らとの密貿易（私貿易）が行なわれ、中国製の貿易陶磁器（青磁、白磁、褐釉陶器、染付）などがもたらされた。 ※．沖縄（琉球王国）では、南方貿易が盛んになる。 ※．海禁政策違反で、琉球に赴き密貿易を行っていた中国商人らのジャンク船が中国沿岸で捕獲される。 ※．室町幕府、薩摩の島津氏に琉球渡航船の取締まりを命ず。 ◎朝鮮人３人、与那国島に漂着する。（与那国島の与那原遺跡） ◎琉球王国は、15世紀後半から16世紀前半に八重山において、密貿易（私貿易）の取締まりを強化していく。 ◎八重山においては、密貿易取締りの結果、スク時代の遺跡が、忽然と消えていく。（石垣島の中マンゲー遺跡・仲筋貝塚等） ◎八重山の歴史的な事件「オヤケアカハチ・ホンカワラの乱」が起こる。（新川ビロースク遺跡）
歴史時代	琉球王国時代		１５０８年 １５２４年	密貿易・農業	※．薩摩の島津氏、琉球王国に薩摩船の密貿易の取り締まりを要請する。 ◎西塘、竹富島にて蔵元を創設し八重山を統治する。

注）※は、沖縄本島及び周辺地域の歴史的事件とその年代（推定）を示す。
◎は、八重山関連の歴史的事件及びその推定年代を示す。

れに代わるルートとして開かれたのが南島路（南西諸島経由）である。この南島路で遣唐使船を唐へ渡航させた。『続日本紀』和銅七年（七一四）、一二月の条に、奄美・信覚（しがき）・球美などの島民五二名の来朝があったと記されており、一説に球美は久米島、信覚は石垣島ではないかといわれている。[1] 八重山では、七世紀から九世紀後半頃[2]の無土器時代の遺跡から唐代銭貨「開元通寶」（六二一年初鋳）や鉄器（船釘・鉄鑿など）が断片的に発見されている。それらのことから八世紀末頃までに、中国、日本と我が南島の島々の間に一定の交易関係があったと考えられる。当然、石垣島とそれらの国々や島々との交流も想定されるのである。この「開元通寶」は石垣島の崎枝赤崎貝塚[3]群の包含層から三三枚出土し、また、吹通川河口貝塚[4]、嘉良嶽貝塚[5]群から一枚ずつ、西表島の仲間第一貝塚からも三枚[6]採集された。鉄器は、多和田真淳氏によって仲間第一貝塚の厚さ七二センチメートルのオリジナルな包含層から角釘[7]（船釘）が一点採集され、西表島西部の船浦貝塚でもリチャード・ピアソン氏によって鉄鑿[8]が一点発見された。

八重山で発見される「開元通寶」や船釘・鉄鑿などは交易によってもたらされたものでなく、時化や台風などにより遣唐使船等が一時避難寄港の際偶然にもたらされたものと思われる。[9]

無土器時代の終末頃の海岸低地の砂丘の貝塚から、類須恵器（徳之島のカムィヤキ系陶器）、中国製の玉縁白磁碗片が断片的に発見される。この時代と相前後してスク時代の登場（開始）となる。今のところ、石垣島ジーバ川河口貝塚から類須恵器数片、船越貝塚から玉縁白磁一片、名蔵貝塚群から類須恵器と白磁玉縁碗が一片ずつ採集されている。

一九八三年、波照間島北西海岸の海岸低地の砂丘に立地している無土器時代の大泊浜貝塚を県教育庁文化課が発掘調査した。この調査で、第四層から長崎県西彼杵半島産の滑石製石鍋、類須恵器（徳之島のカムィヤキ系陶器）や鉄鑿、更に中国製の薄手の白磁端反り碗、白磁玉縁碗、褐釉陶器などが共伴して出土した。これらは一二世紀頃の遺物であると報告[10]されている。

このことから、スク時代の登場は、滑石製石鍋[11]（長崎県西彼杵半島産）、

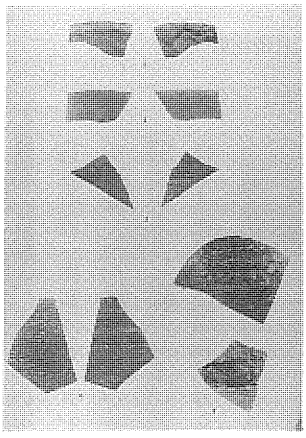


写真１　波照間島大泊浜貝塚出土の外来陶磁器（沖縄県教育委員会『波照間島下田原貝塚・大泊浜貝塚』1986年、注10より）

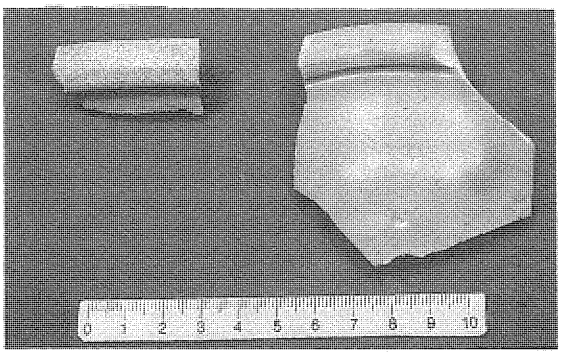
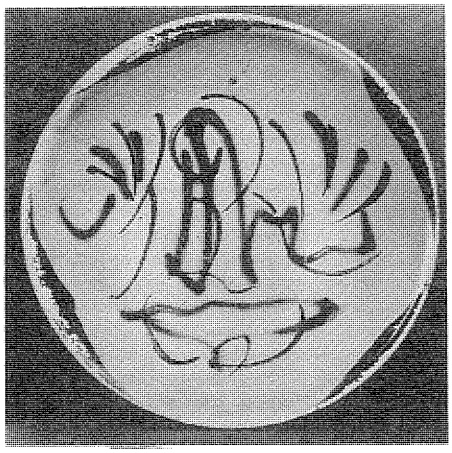
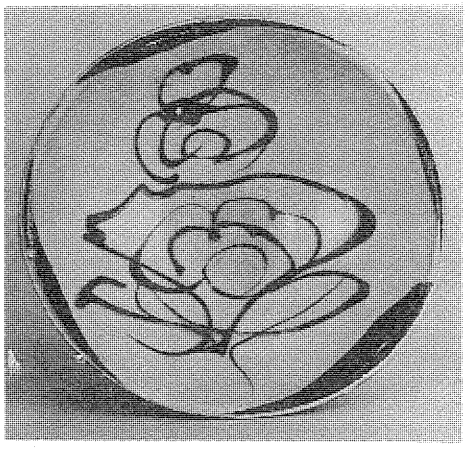


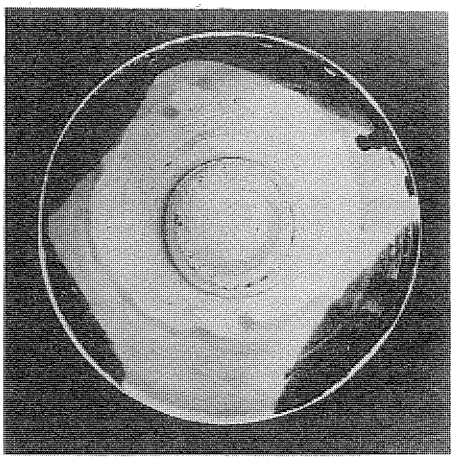
写真２　無土器時代採集の白磁玉縁碗（名蔵貝塚群左、船越貝塚が右）



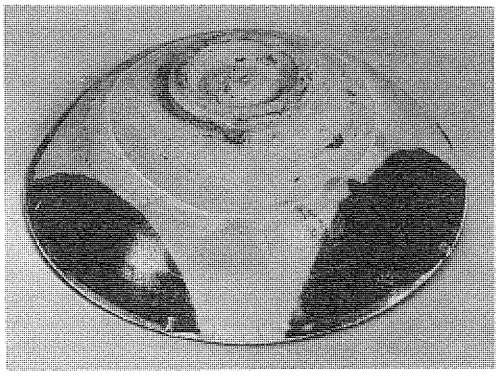
９世紀　口径14.3



９世紀　口径14.8



同上底部



同上底部

写真３　西表島古墓出土の黄釉緑褐彩碗（東京国立博物館所蔵）

（東京国立博物館編『日本出土の中国陶磁』1978年、注14より）

類須恵器[12]（徳之島のカムィヤキ系陶器）、鉄器（鉄鑿）、中国製の玉縁白磁碗、褐釉陶器（南蛮陶器＝スビガミ）などが南島一円へ流布していくのと密接な関連があると思われる。[13]この時代、一般には鉄器が普及しておらず、まだ無土器文化の石器時代である。外来文化と初めて接触した時期でもある。

この外来陶磁器文化の浸透や定着については沖縄本島と八重山では歴然とした違いがある。沖縄における陶磁器のいちばん古いものは、西表島で発見されたといわれる唐代の長沙窯黄釉緑褐彩碗二点[14]である。これは唐末の製品であるから、九世紀代に遡ることになる。しかしながら、筆者の管見によればこの例の他には九世紀から一〇世紀に遡るような陶磁器などが出土した例を聞かず、また筆者自身、一一世紀以前に遡るような陶磁器などがたくさん出土した例を確認していないのである。沖縄本島では、グスク時代前半（一一

世紀頃）の遺跡から類須恵器と共伴して古い中国製の鎬蓮弁文青磁・珠光青磁や玉縁白磁などが比較的に多く発見される。これらは八重山では、必ずといってよいほど一三・一四世紀頃や明時代（一五・六世紀）の陶磁器と共伴して出土する。従って、八重山のスク時代の陶磁器文化の定着を沖縄本島と同時期に位置づけることには疑問がある。

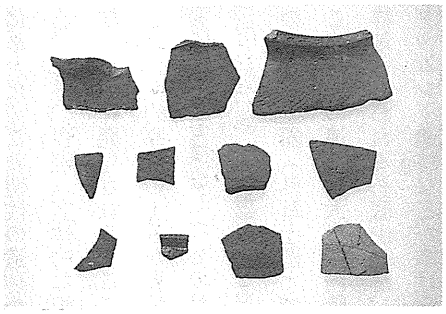


写真４　大田原遺跡採集の類須恵器、青磁、褐釉陶器

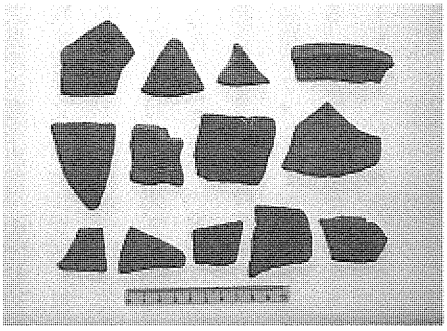


写真５　平地原遺跡採集の類須恵器

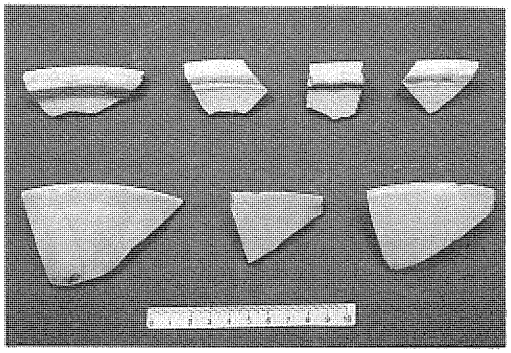


写真６　スク時代遺跡採集の玉縁白磁碗、鎬蓮弁文青磁

八重山における古い陶磁器の出土量は沖縄本島より少ないのである。わずかに石垣島の川平貝塚から玉縁白磁一片、元平久保村遺跡から玉縁白磁一片、宮良チビスク遺跡で玉縁白磁一片、山原貝塚[15]から滑石製石鍋一片、類須恵器・玉縁白磁一片ずつ、新川ビロースク（美良底）遺跡[16]からは類須恵器・玉縁白磁・口禿白磁一片ずつ、川花第二遺跡から玉縁白磁一片、仲筋貝塚[17]から鎬蓮弁文青磁・青釉（孔雀釉、翡翠釉）一片ずつ、西表島三離村遺跡から鎬蓮弁文青磁一片、小浜島コーキ湾（ウティスク山遺跡）で黄釉鉄絵一片などが見つかっているばかりである。

八重山においては、一二世紀はじめから一二世紀後半の玉縁白磁、鎬蓮弁文青磁、珠光青磁などの出土が少ないことから、それらに基づいて遺跡の年代を決定することは危険である。陶磁器は伝世品も比較的多く、また長期に渡る使用や生産によって年代にかなりの幅があることも考慮しなければならない。

一三世紀から一四世紀前半にかけての琉球石灰岩丘陵、洞穴などの小規模な遺跡から徳之島産の類須恵器片（カムィヤキ系陶器）、中国製の白磁片、青磁片（劃花文碗や幅広い蓮弁文碗、無文碗）などが比較的に多く発見される。

河川流域や海岸寄りの砂丘に住んでいた無土器文化系の在来人は、この頃初めてスク文化をもたらした北方の人々に接することになる。当初は新来の人々と何らかの摩擦があったりして、山の手の琉球石灰岩地帯のアブ（岩陰、洞穴）などに住み着き始めたのかもしれない。彼らの生業は漁撈採集であり、若干の農業を営むが生活は未だ貝塚時代の延長上

にあった。この時代の遺跡からは徳之島産の類須恵器、中国製の褐釉陶器、白磁、青磁（立体的な線区画を残す蓮弁文碗や劃花文碗・無文碗）などが数片発見される。ここで初めてテンパー（混和剤）に石英を混入した比較的厚手の土器が登場する。この土器は、褐釉陶器に触発されて「鉄の鍋」[18]を模造したものだと考えられているが、一説には九州産の「滑石製石鍋」[19]が祖型であるという意見もある。外耳の把手のつく鍋形の煮沸用土器（外耳土器）であり、独特のフォルム（形態）をしている。この時代の遺跡は大半が内陸部にある。代表的な遺跡には、四ヵ村の発祥地といわれる石底山遺跡[20]、平得ペーギナー（ピーラ池）遺跡[21]、宮良ヤドゥムレー遺跡[22]などが挙げられる。

スク時代の住民が接触をもった集団には、北方文化集団（日本、朝鮮）と中国文化集団がある。主として日本（九州）からの北方文化集団のもたらした初期の遺物は、滑石製石鍋（長崎県西彼杵半島産）や類須恵器（徳之島のカムィヤキ系陶器）や中国製の玉縁白磁、褐釉陶器で、後に勾玉[24]（ガーラ玉）、丸玉[25]（ガラス玉）も持ち込まれた。一二世紀後半から一三世紀前半頃にかけて中国文化集団（中国商人）と接触を開始し、一五～一六世紀頃には中国製の数多くの白磁、青磁、褐釉陶器（南蛮陶器＝スビガミ）、染付などがもたらされた。

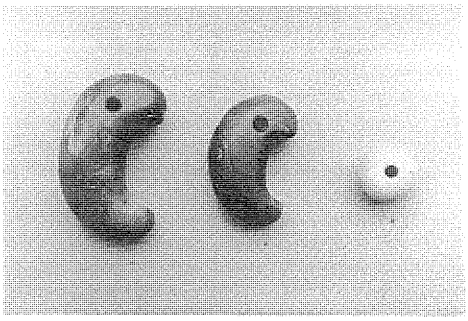


写真7　与那国島の与那原遺跡出土の勾玉と丸玉
（与那国町教育委員会『与那原遺跡』1988年、注23より）

二．スク時代登場の歴史的背景

今のところ、中近世においては、台湾、フィリピンなどとの関連は薄いと考えられる。そこで、スク時代の文化の宮古、八重山への登場について、その歴史的経緯を考えてみたいと思う。

日本の弥生時代から古墳時代にかけて、南島に棲息している貴重な貝類（ゴホウラ、イモガイ、スイジガイ）などを求めて九州島の住民が南島（奄美・沖縄諸島）の島々に渡来する。これが大和と沖縄の交流の最初の隆盛期である[26]。また、七世紀後半から八世紀のはじめにかけて遣唐使による南島経由での中国（唐）への渡航[27]があり、大和朝廷と南島の島々との朝貢という形態での交流があった。この南島の島々からは大和朝廷へ貢物として赤木やヤコウガイなどが献上[28]されたといわれている。

一二世紀後半、一一八五年の壇の浦の合戦後、平家の落人たちが南島の島々へ渡来して来た[29]といわれている。さらに室町時代、一四世紀以降は、高価な中国製の貿易陶磁器などに欲望を掻き立てられた九州の商人や武士たちが、小集団を組んで中国製の貿易陶磁器などを求めて南島の島々に盛んに渡来してくる。中世末期から近世初頭にかけて日本では茶道の普及とともに武士や商人らが富や権力の象徴として、また実用の器として中国製陶磁器を珍重していたのである[30]。当時は室町幕府が貿易の利潤を独占していたが、九州の商人や武士たちは密貿易の利潤を求めて

滑石製石鍋（長崎県西彼杵半島産）、類須恵器（徳之島のカムィヤキ系陶器）、鉄器[31]などを、後には勾玉、丸玉なども携えて交易のため南下した。その舞台こそ南島の先島の島々だったのではないか、というのが現在の筆者の仮説である。

この頃、沖縄本島では、群雄割拠していた各地の按司が山北・中山・山南の三つの王統にまとめられた。一三七二年には、中山王察度が中国の「明」に入貢した。また、一三九〇年には宮古・八重山が始めて中山に入貢し、一四二九年には第一尚氏王朝の尚巴志によって三山統一が成し遂げられた。一四七七年には朝鮮人三名の与那国島漂着事件があった。その後、一五世紀後半頃までには中山王尚真による強大な中央集権的統一国家[32]ができていく。

他方中国では、既に九世紀から商人らが中国製の貿易陶磁器や宝貝をもって遠くインドや東アフリカまで出かけて貿易を行っていた。一二世紀に入ると、福建・広東地域では日本や東南アジア向けの中国製の貿易陶磁器が多量に生産された[33]。また、一三世紀から一四世紀にかけて、中国商人らは東南アジア諸国へ香料[34]（スパイス）や宝貝、夜光貝、真珠貝などを求めて渡来したといわれている[35]。これらはアジア一円で稀少なものとして流通していたのである。一三六八年には、蒙古民族の国家「元」が滅び、漢民族の国家「明」が起こり、招撫政策に応ずる諸国との間で個別冊封による明朝公認の朝貢貿易[36]が行われた。民間貿易は密貿易（私貿易）としてすべて禁止された。しかし、福建沿岸の、主として漳州、泉州出身の商人らが海禁を犯して、南海（東南アジア）ばかりでなく琉球にも進出したことが知られている。

佐久間重男氏の論文「明代の琉球と中国の関係―交易路を中心として―」によれば『太祖実録』（『明実録』）の景泰三年（一四五二年）六月辛己の条には「命刑部、出傍禁約福建沿海居民、母得収販中国貨物、置造軍器、駕海船交通琉球国、招引為寇」とあり、海禁政策下にあっても福建沿岸の人々が母国中国から物資を購入して琉球（琉球王国）に赴き、密貿易をしていたことが述べられている[37]。そのことから、琉球王国においても表街道の朝貢貿易だけでなく裏街道的な密貿易（私貿易）が行なわれていたことがわかる。

かって外来文化と接触して、離散、逃避し、山手（内陸部）のアブ（岩陰、洞穴）などに隠れ住んだ在地の人々は、北方から来た密貿易集団と交易を行なうために、見晴らしの良い丘陵や船の停船に適した裾礁（リーフ）の裂け目で海岸寄りの場所に定住したり、また、中国商人の好む海産物の豊富な島々に移住し、そこで中国商人らと密貿易（交換貿易）を行なった。因みに八重山のスク時代の遺跡は、島の周囲をとりまいている裾礁（リーフ）の割れ目が一望できる琉球石灰岩の丘陵や洪積台地、古砂丘の上、或いは平地、岩陰、洞穴などに立地している。石垣島のフルスト原遺跡、川平貝塚、仲筋貝塚、元桴海村遺跡、元平久保村遺跡など、ほとんどの遺跡がそうである。

一三世紀から一七世紀前半頃、中国商人らは海禁を犯して遠路はるばる宮古・八重山の島々へと一獲千金を夢みてジャンク船（交易船）で密貿易にやって来たと考えられる。

三、交易物産について

中国の商人らは八重山の島々で豊富に産出する確実に儲かる何かを求めて往来したのである。中国製の陶磁器の見返りとなる魅力ある交易物産が何であったのかは興味ある問題である。

『大明会典』には、琉球王国から中国への進貢物として、馬匹、螺殻（ヤコウガイ）、海巴（タカラガイ）、生熟夏布、牛皮、硫黄、磨刀石などが挙げられている。[38] またフィリピンと中国との交易関係について青柳洋治氏は『南海貿易とフィリピン－サンタ・アナ遺跡出土の中国陶磁』（一九七九年）という論文の中で「『諸蕃志』という中国の史料によれば（中略）麻逸の産物は、黄蝋、吉貝、真珠、纈纈、玳瑁、薬檳榔、干達布である。商人は磁器、金貨、鉄の鼎、鳥鉛、五色のガラス珠、鉄針等を以って交換した」[39]と、述べている。

こうした南海諸地域との交易物産のなかで、あえて遠路の沖縄本島地域と密貿易をしなくても、宮古や八重山の島々で充足できるものは何かについて考えてみたい。

八重山諸島は、熱帯性海域に属し、珊瑚礁が発達し、有用貝類が多棲する好条件に恵まれている。八重山の島々の裾礁（リーフ＝方言ではピー）には、キイロダカラ、ハナビラダカラ、ハナマルユキ（宝貝）などが数多く棲息し、付近には夜光貝、真珠貝、ジュゴン、フカ、ナマコなども豊富である。

沖縄本島や八重山では、宝貝をスビとかシピと呼んでいる。中国では海巴と呼ばれていて、一四～一七世紀の琉球王国から明朝・清朝への貢物の一つに数えられていた。古代中国では貨幣として流通していた。また、時として装飾品や呪物、喪葬具として珍重されていた。中国製の貿易陶磁器と宝貝（南島産）は、インド商人らの手を経てアフリカに送られたという。平得の宇部御嶽遺跡からは褐釉陶器（南蛮陶器＝スビガミ）片に「宝貝（スビガイ）」のスタンプの刻印されたものが採集されている。この遺物は当時の密貿易などを解明していくうえで注目すべき史料である。[40]

中国では伝統工芸の螺鈿漆器に使われる夜光貝（方言ではヤフンガイ、中国では螺殻）や真珠貝なども珍重されたと思われる。また、ジュゴン（儒艮、方言ザン）の骨は無土器時代の貝塚からが多く発見されているが、スク時代の遺跡からは意外に少ない。少ない理由として次のことが考えられる。琉球王国時代には新城（パナリ）島からの貢納品になっていたジュゴンは、不老長寿の薬として、また祝いのときや安産を願う縁起物の料理として珍重されていた。そのことからスク時代にもジュゴンは中国商人との密貿易の交換物として重要な役割を果たしていたことが想定できる。さらに、玳瑁（たいまい）もべっ甲細工として珍

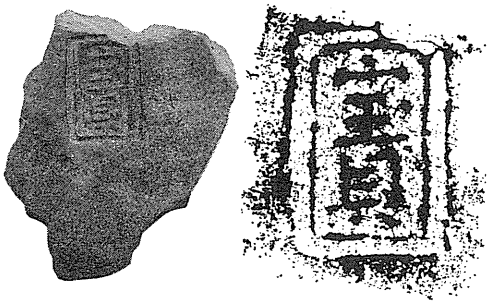


写真8　宝貝の字印
（石垣島平得宇部御嶽遺跡採集）

重されていた。中華料理の宴席料理に欠かすことのできないフカのひれ（中国名・魚翅）やナマコ（中国名・海参）なども挙げられる。

スク時代の遺跡（中・近世の集落跡）からは、遺跡の規模の大小を問わず、牛の臼歯が比較的多く発見される。これらの遺跡一帯は牧場に最適な立地をしている。また、各地に牛喰いイーザー（牛を食べる洞穴）などの話が残っており、牛の御嶽と称する御嶽も多い。元宮良頭永將（一六二四年から一六四二年の八重山キリシタン事件の首謀者）にまつわる伝承には牧場を管理し南蛮貿易を行なったという内容の部分があり、[41]当時の人々の生活は牧畜や貿易と関連が深かったことが窺える。

また、一四七七年に与那国島に漂着し救助された三人の朝鮮人が八重山での見聞を語った『成宗実録』の記録には、苧を織って布となすと記されている。[42]中国人の嗜好品として生熟夏布、干達布などがある。染付にも芭蕉文が描かれており、芭蕉布などが中国人の必需品であったことが窺われる。宮古の中・近世集落跡（元島）からは土製の紡錘車が採集されている。多分八重山でも生熟夏布が織られたことであろう。

八重山諸島には熱帯から温帯の多種多様な植物が繁茂する。「薬草の宝庫」であり、それらは古くから自然な形で暮らしのなかに取り入れられてきた。[43]島中どこにでも自生しているピパーツ（香料、和名ヒハツモドキ）なども香辛料として利用されていた可能性がある。このような薬草や香辛料にも商品価値があったに違いない。

中国商人らは、中国製貿易陶磁器の白磁、青磁、褐釉陶器（南蛮陶器＝スビガミ）染付などの見返りとして、八重山の島々で豊富に産出する宝貝（スビガイ）、夜光貝、真珠貝、ナマコ（海参）、フカのひれ（魚翅）、ジュゴン（儒艮＝ザン）、タイマイ（ベッコウガメ）、牛皮、麻織物（上布・芭蕉布）、薬草などを求めたと考えられる。[44]

当時の中国商人らの交易の様子は、中国史料『諸蕃志』に記されている。青柳洋治氏は、前出『南海貿易とフィリピン―サンタ・アナ遺跡出土の中国陶磁』のなかで次のように述べている。「（中略）蕃商（外国商人）は集落に至るも敢えて陸に上がろうとせず、先ず船を中流に駐めて鼓をならして蛮商を招く。彼らは我先にと小舟に棹さして吉貝・黄蠟・蕃布・椰子の箪等を持って来て貿易した。もし価の協議が決しないときは、賈豪（商人の頭）自ら説諭に行き、絹傘、磁器、藤篭等を与え、一、二の人質を取って上陸し、互に交易をなし、終わればその人質を返し、停船して易をなし、終わればその人質を返し、停船してから、三、四日ならずして他の集落に行く。交易には磁器・黒綾絹・纈纈絹・五色のガラス珠・鉛錫・白錫等を博く貨幣として使用した」[45]と、報告している。これは一二世紀後半頃、中国商人らがフィリピンで交易をしたときの様子である。八重山の島々においても密貿易（私貿易）を行なう中国商人と土着の、或いは日本からの交易者たちとの間で同様の光景が繰り広げられたに違いない。

四．野面積み石垣屋敷遺構「武士の家」の隆盛と衰退

八重山のスク時代の遺跡の中でも、竹富島、黒島、上地島、下地島、波照間島、鳩間島、石垣島には多くの野面積遺構（野面積み石垣）があ

り、それらは、「武士の山」、「武士の屋敷」、「武士の家」、「武士の家石垣」などと呼ばれている。[46] これは群雄割拠時代の屋敷跡であり、中国製の青磁の口縁にヘラ彫りで崩れた雷文帯碗や線刻細蓮弁文碗などが夥しく発見されることから一五世紀後半から一六世紀前半の遺構だと考えられる。交易者たちはしっかりと島に根を下ろしていたのであろう。

地理的にも中国南部の福建に近い八重山の方が、琉球王国よりも密貿易（私貿易）を有利に展開していったのではないか。中国商人らにとっては、八重山の島々は一獲千金を得るための魅力ある島々だったのであろう。一五〇〇年の「オヤケアカハチ・ホンカワラの乱」の平定前後、八重山の島々では庶民の日常生活に雑器として中国製の白磁・青磁・染付などの皿や碗が、また、貯蔵用や運搬用として褐釉陶器などが使用された。中国商人らとの密貿易を通して商業活動も活発であったようである。

そこで思うのは、オヤケアカハチ・ホンカワラの乱の背景を、従来の「貢租税説」や「祭祀禁止説」などでとらえるのは誤りではないかということである。[47] 中国商人らとの密貿易が拡大していく状況で、アカハチを中心とする八重山勢力が組する大和の密貿易集団と、琉球王国（王国の息のかかった宮古の仲宗根豊見頭一族なども含む）との間の利害の衝突が八重山征伐（オヤケアカハチ・ホンカワラの乱）の直接原因だったのではないかというのが筆者の想定である。それに加えて、一四七七年の朝鮮漂流民のみならず、また中国の明太祖から琉球王国へ倭寇（密貿易）取締まりなどの要望があり、それらがオヤケアカハチ・ホンカワラの乱＝八重山征伐に大きく影響を及ぼしていたのではないか。琉球王国が交易の富を独占したいがために日本の交易集団の取締まりを強化していくなかで起こった事件ではなかったのか、と考えるのである。

一方、八重山の北に隣接する宮古諸島は考古学上、八重山諸島と同じ琉球南部圏（先島文化圏）に位置づけられ、スク時代においても共伴遺物や遺跡の立地状況などの様相に類似点がある。

八重山と宮古との相違点は、宮古のスク時代の遺跡の大部分が拝所遺跡であり、先住者を奉る御嶽（オン、沖縄本島ではウタキと呼んでいる）を中心にして集落が形成されていることである。また、近世（一七～一八世紀頃）まで集落が存続する。宮古の拝所遺跡からは、中国製の貿易陶磁器や日本本土の有田焼、沖縄本島の湧田焼、荒焼などの陶磁器が出土する。[48]

しかし、石垣島においては、スク時代の拝所遺跡（御嶽）は数カ所だけに限られ、御嶽の大部分からはスク時代の中国製の貿易陶磁器などの遺物が全く発見されない。また、かつてのスク時代の集落の大部分が、一六世紀頃に忽然と消えている。

石垣島の川平貝塚、仲筋貝塚、中マンゲー遺跡、フルスト原遺跡、山原貝塚、ビロースク（美良底）遺跡などは、スク時代の代表的な遺跡である。集落が忽然と消えたのは、琉球王国が密貿易（私貿易）の取り締まりを強化していくなかで、強制移住等により居住地の変更を余儀なくされたからではないかと考えられる。「オヤケアカハチ・ホンカワラの乱」はその代表的な例と考えられる。八重山の島々に残る野面（のづら）積石垣屋敷遺構（野面積み石垣）などは、オヤケアカハチ・ホンカワラ

の乱の前後（一六世紀前半頃）に激減したようである。

これらの野面積石垣屋敷遺構や集落が文献や記録に残らないのは、「オヤケアカハチ・ホンカワラの乱」が琉球王国への政治的な意図によって謀叛・反逆者として位置づけられたことや、また、琉球王国が一七四五年に『球陽』を作成する段階で薩摩への気がねや政治的な意図により王国にとって不都合な事実をことごとく記録から抹消したことによるのではなかろうか。ただ、各地の民間伝承に美辞賞賛的に、「武士の屋敷」、「武士の家」、「武士の家の石垣」、「武士の山」、「大和墓」（八島墓）などの名が残っているばかりである。

ところで琉球王国に組し、いわば官軍であった宮古島では、『宮古島記事仕次』（一七四八年）に見るように、仲宗根豊見親による統一過程で骨肉相争う戦乱の世が繰り広げられたことが描かれている。[49] ところが、八重山にはほのぼのとした伝承は残っていても乱世の存在を伝えるものはない。[50] そこに両者の置かれた歴史的状況の違いが映し出されているのかもしれない。これについて例えば、オヤケアカハチ・ホンカワラの征討後、琉球王国の支配下になった八重山では土着の支配者を讃えることが禁じられたのに対し、仲宗根豊見親のような土着の酋長を擁する宮古ではその権威を高めるために戦乱の世を平定したというような勇ましい英雄像を創り出す必要があり、そのためにこうした物語を創作したというような解釈もできるのではないだろうか。もちろん作者には室町期の応仁の乱（一四六七～七八）や中国の戦国時代のような争乱の世に関する知識が伝わっていたに違いない。

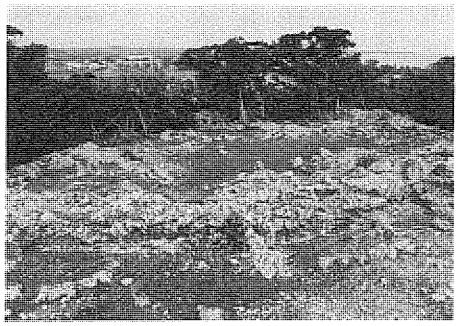


写真 9　武士の家又は武士の山と呼ばれる野積石垣遺構

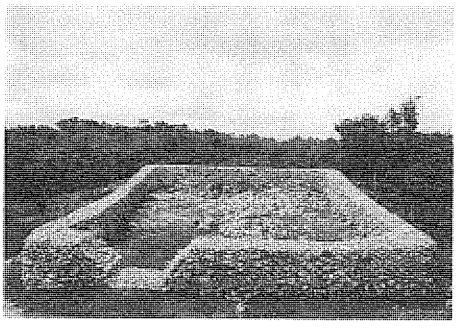


写真10　フルスト原遺跡の第15号
復元後（撮影：島袋綾野）

スク時代には長期間にわたった無土器時代（石器を使用し、石蒸焼料理や漁撈、狩猟を基本とする採集経済）が終わり、婦女子は勾玉（ガーラタマ）や丸玉を装飾品として身につけ、鉄製品、土鍋（外耳土器）、中国製貿易陶磁器の白磁・青磁や染付、そして褐釉陶器（南蛮陶器＝スビガミ）などを日常雑器として使用し、牧畜、農業を基礎とする生産経済が始まった。これは大きな変革であった。そして人々は中国南部の商人らと自由奔放な密貿易（私貿易）を行なっていたと考えられる。

けれども栄光の時代はやがて終わりを告げる。先に述べた如く、八重山の歴史的事件、オヤケアカハチ・ホンカワラの乱（一五〇〇年）以後、スク時代の集落は衰退し、八重山の交易者集団は急速に衰えて行くのである。[51]

Ⅱ　村建て伝承に関わる遺跡

無土器時代の終末期（一二世紀頃）に河川流域や海岸低地の砂丘一帯に住んでいた在来の人々は、北からの渡来者と接触することによって何らかの摩擦があったりして山手（内陸部）の岩山や洞窟、崖下などに離散した。これがスク時代の始まりである。一四世紀頃から一六世記頃に中国との密貿易（私貿易）が頻繁に行われるようになると、島の周囲を取り巻く裾礁（リーフ）の割れ目（船の出入れに利用された）が一望できるところや中国製の貿易陶磁器などへの見返りの海産物が豊富な島々に移動する。これらの場所は海岸寄りの琉球石灰岩・洪積世・古砂丘などの丘陵や平地上等に立地している。

現在石垣島の四ヵ村の周辺地域は、琉球石灰岩地帯のために畑の耕土の深さはわりに浅いが常に乾燥し、麦や粟の畑作には好適な土地である。そのためスク時代になって交易が行われ農耕が営まれると、この地域の開拓も随分すすみ、人々の定住域も広がっていった。これまでの遺跡の分布調査の結果によると石垣島だけでも六九ヵ所の遺跡が確認されている。これらの遺跡は、表面の採集調査の所見によれば、中国製貿易陶磁器の白磁・青磁・褐釉陶器（南蛮陶器＝スビガミ）・染付や土着の外耳土器などが数多く発見されていることからいわゆるスク時代の集落遺跡であるといえる。遺跡付近一帯の土地は、現在でも村人たちの間に「元ムラ跡」として伝承されていて、そこには古い降り井戸や御嶽（拝所）などが残っている。八重山の島々にあっては、伝承に登場する地名は考古学上の遺跡として知られているところが多く興味深いことである。

ところで、八重山の人々の歴史が確かな証拠として文献（『八重山島年来記[1]』・『八重山島由来記[2]』）に残されるようになるのは漸く一七～一八世紀頃になってからである。したがって、それ以前の先人たちの足跡を追うにはどうしても遺跡の考古学的な発掘調査の研究に負わなければならなくなる。このようなことからも土地に結び付いたこれらの歴史的な文化遺産を大切に保存し、後世に残していく必要がある。これらの村建て伝承に関わる遺跡[3]について素描する。

一．四ヵ村の発祥に関わる遺跡

石垣島四ヵ村（登野城・大川・石垣・新川）の発祥については『八重山島由来記[4]』や伝承によると「昔、石スク山の大岩山に姉マタネマシス、長男ナタハツ、次男平川カワラの三人の兄弟が住んでいた。ある日、神様が〈お前たちは人を愛し神を敬っているから、宮鳥山に住みなさい。この世から守ってやろう。〉と、お告げがあった。お告げの通り宮鳥山に移り住み農作物を作ると、年々豊作になった。これをみて人々が集まり、今の石垣村や登野城村ができた」と、言われている。四ヵ村の周辺

1. 石垣貝塚
2. 石底山遺跡
3. ビロースク遺跡
4. 川花第一遺跡
5. 川花第二遺跡
6. 川花第三遺跡
7. カニヌティーハカ遺跡
8. 竿若東遺跡
9. カフムリィ遺跡
10. 平川貝塚
11. 大石垣御嶽遺跡
12. 山原貝塚
13. ベーギナー遺跡
14. アラスク村遺跡
15. ウイスズ村遺跡
16. 仲本村遺跡
17. 宇部御嶽遺跡
18. バイナーカー遺跡
19. ウフスク村遺跡
20. フルスト原遺跡
21. 崎原御嶽遺跡
22. ガヤシキバマ遺跡
23. 南大浜村遺跡
24. ヤドゥムレー遺跡
25. ダンダ山遺跡
26. マシクナー遺物散布地
27. ウイズ遺跡
28. チビスク遺跡
29. クバントゥ遺跡
30. 下ヌ家敷遺跡
31. ムニンヤーバマ遺跡
32. 白保遺跡
33. 真謝井戸周辺遺跡
34. 白保上ヌ村遺跡
35. 盛山村遺跡
36. カラ岳遺跡
37. 桃里村遺跡
38. ベーフ山遺跡
39. ブーマンゲー山遺跡
40. 中マンゲー遺跡
41. 仲与銘村遺跡
42. 半嵩村遺跡
43. 船越貝塚
44. 船越村遺跡
45. 元伊原間村遺跡
46. 水浜遺跡
47. 久志真村遺跡
48. 嘉良遺跡
49. カーラマタ岩窟遺跡
50. 花城村遺跡
51. ジーバ川河口貝塚
52. 平久保御嶽遺跡
53. 元平久保村遺跡
54. 安良村遺跡
55. 安良崎西方の岩山遺跡
56. 舟蔵遺跡
57. 舟路川河口遺跡
58. 皆野宿岡遺跡
59. ミンナ岡遺跡
60. 名蔵シタダル海底遺跡
61. クード一貝塚
62. 名蔵貝塚群
63. 浦田原遺跡
64. 名蔵村遺跡
65. 平地原遺跡
66. 大田原遺跡
67. 元名蔵村遺跡
68. シーラ原遺跡
69. 屋良部村遺跡
70. 元崎枝村遺跡
71. 崎枝御嶽遺跡
72. 崎枝カサザキィ遺跡
73. 川平貝塚
74. 川平火番岡遺跡
75. 底地深道遺跡
76. ザンドウ原洞穴遺跡
77. ハコーザキィ遺跡
78. 仲筋貝塚
79. 仲筋村遺跡
80. 元仲筋村遺跡
81. ヤマバレー村遺跡
82. 元桴海村遺跡
83. 桴海村遺跡
84. 野底村遺跡
85. 野底崎遺跡
86. 野底石崎遺跡

地図1．村建て伝承に関する遺跡分布図

にはスク時代の遺跡が点在している。かつて字石垣の平川パカから字新川の喜田盛パカにかけての海岸寄りの道路から二〇数点の磨製石斧[5]を拾った。石斧の製作技法などから、この一帯は無土器時代（四ヵ村内遺跡）の遺跡であることがわかった。一二世紀頃に北からの渡来者と接した際に無土器時代の在来の人々は石底山や、平得のピーラ池等の内陸部一帯に拡散したと思われる。そして一四～一六世紀頃には中国商人らと頻繁に密貿易（私貿易）を行なうために海岸寄りに移住してきた。これらの遺跡には北側にカフムリィ遺跡、西側から、竿若東遺跡[6]、川花第三遺跡（一九〇四年、先学者鳥居龍蔵博士が調査した四ヶ村の西端の遺跡[7]）、川花第二遺跡[8]、川花第一遺跡、ビロースク遺跡[9]。中央にカニヌティーハカ遺跡[10]、大石垣御嶽遺跡[11]、東側には山原貝塚[12]などがある。スク時代の終末期の一五〇〇年のオヤケアカハチ・ホンカワラの乱後は、点在していた小村が新川ビロースク遺跡、カニヌティーハカ遺跡、大石垣御嶽遺跡の前一帯に統合された。さらに、「八重山のキリシタン事件」（一六二四～四二年）前後、津口（港）を求めて、海岸寄りの新開地登野城村の岸若一帯[13]に移動している。

2．石底山遺跡（石底住居跡[14]、石城山遺跡[15]・石スク山遺跡[16]）

かつて四ヵ字郊外の北方三キロメートルのバンナ山の南ふもとに、四ヵ村の発祥地と伝えられている新生代古第三紀始新世石灰岩（宮良層）からなる標高七九メートルの石底山という岩山があった。岩山にはスク時代の住居として使用されたと見られる洞窟があり、この岩山の全体の裂け目や頂上に貝塚が形成されていた。

一九六〇年八月一五日、字大川在住長間正吉氏の案内で筆者を中心とするW・I・O考古学研究グループが頂上付近の試掘調査[17]を行なった。また郷土史家宮良賢貞氏を団長とする石底洞窟調査団により、一九六二年一月二五日に第一次調査[18]、二月三日に第二次調査[19]が行なわれた。その際には岩山中腹の洞窟や頂上で厚い包含層が確認され、数多くの土器と数片の中国製の白磁、青磁や褐釉陶器などが出土した。また、南側の山裾にはドルメン形式のハンナー主の墓（一九八八年一月一九日「石垣市の史跡[20]」に指定）があり、頂上からは眼下に四ヵ字を見渡すことができた。かつて（一九四五年以前）は避難所や要塞として使用され、戦後の一九六三年頃からは採石のために破壊され一部を残して無惨な姿になっている。

写真1　ハンナー主の墓
（撮影：リチャード・ピアソン氏）

一九七七年九月五日より一三日まで県教育庁文化課によって緊急発掘調査が行なわれ、その後一〇月、一一月、一二月、翌年の三月と、それぞれ断片的な観察調査が行なわれた。調査の結果、洪積世に属する鹿化石骨を中心とする動物化石群とスク時代に関連する石器（石斧・敲石）、骨器、土器、中国製の褐釉陶器、青磁などが出土[21]した。

「石底山残丘部」については一九八八年二月一六日、石垣市の「史跡」[22]に指定された。

以下に『石城山―緊急発掘調査概報―』（沖縄県教育委員会・一九七八年三月）から出土遺物の部分を紹介する。

――『石城山―緊急発掘調査概報』より――

2　出土遺物

出土遺物は大別すると、洪積世に属するとみられる鹿化石骨を中心とする動物化石群と、中世後半の石城山遺跡に関する土器、陶磁器、石器、貝殻等とに分けられる。

洪積世遺物については、別項を設けて、長谷川善和博士が報告するので、ここでは石城山遺跡の出土品に限って紹介したい。なお、石城山遺跡出土品は、㋐今回の調査に於ける採集品、㋑一九六〇年、一九六二年の前述した小調査に於けるものの二通りがあるので、両者項を別にして扱うこととする。㋐については本項であり、㋑については大濱永亘（Ⅳ）の項である。

写真２　発掘現場を見学する高校生

①　自然遺物

小動物の骨片、貝殻等が得られた。小動物骨片については、長谷川善和博士が別項で若干触れているが、それによると、両棲類、鳥類等が含まれているようである。

貝の種類は次の通りである。アラスジケマンガイが比較的多量であった。

アラスジケマンガイ　　ソメワケグリ
ヒメジャコ　　フネガイ科エガイの一種
スダレハマグリ　　オキナワヤマタニシ
カワラガイ　　ヤンバルマイマイ（？）
カンギク　　オキナワウスカワマイマイ
リュウキュウシラトリガイ　　リュウキュウキセルモドキ

（県立那覇高校教諭　知念盛俊氏の同定による）

②　人工遺物

骨器（図11の８）

動物の骨を素材にして加工したもので、錐状を呈し、装着部と頭部とに分かれる。頭部は円錐形をなしており、装着部とは明瞭な段差をもって区切られる。装着部は欠落しているが、残存部から頭部より若干細く削り出されていることが窺える。全体の表面に、加工時の小刻みの工具痕（刃物による削り痕）がみられる。第３地点の出土である。

石器（図11の5・6・7、写真9のC）

標品1（図11の5、写真9のCの3）。表面採集品である。石斧の上半部にあたるとみられ、下半部（刃面）が欠損し、また上半部の片面および頭部も剥離している。残存部断面でみると、略隋円形をなし、上半部から下半部へ向けて若干厚くなっていくものとみられる。敲打によって表面が調整されており、さらに側面についてはいくらか研磨が加えられている。石質は緑色片岩である。

標品2（図11の6、写真9のCの2）。表面採集品である。石斧の下半部（刃面）にあたるもので、上半部は欠損している。この石斧は胴部が斜方向に割れた後、再び別の石器として加工転用されているので、一次石器と二次石器とに分けて述べる。

一次石器は長軸が推定一〇センチメートル前後、幅は中央部がやや大きく、刃部へゆるやかに狭くなる。比較的均整のとれた両刃で、全面よく研磨されている。側面は研磨面を形成し、表裏面との境界に比較的明瞭な稜線（角）をつくっている。いわゆる定角式である。刃部は使用によるものとみられる磨耗部がある。刃面に平行に研磨されているようなので、あるいはその一部については、二次石器の段階における加工も含まれているとも考えられる。

二次石器は、一次石器の欠損による下半残存部を再加工したもので、掲げた標品はそれ自体で完形品である。一次石器の胴部が、斜方向に割ってできた隋円状の破面に再び研磨を施し、一次石器面との境界も丸みをもたせて研磨してある。破面は若干の弱い凹凸があるので、凸部が研磨をうけている形になっている。

一次石器の刃面の一角に、敲打による抉入部がつくられている。緊縛のための抉入部であろうか、あるいは握斧として指かけにするためのものであろうか。いまのところこの二次石器の器種（用途）は判然としないが、形態的には一次石器の破損面と、表面との境界が鋭角になる部分が、あたかも刃状を呈し、破面全体が刃部、一次石器の刃部が頭部にあたるのではないかという印象をもつ。

二次石器のみかけ上の刃部は、小刻みの損耗面をつくっている。石質は輝緑岩である。

標品3（図11の7、写真9のCの1）。この標品は野原朝秀氏の採集によるもので、石城山遺跡の前道路上発見とのことである。比較的重量感のある石斧で、全面よく研磨されている。

両側面には略中央の位置に敲打面が部分的にみられ、それぞれ二つの敲打点を有し、対応する位置にある。緊縛又は挿入の必要からつくられたものであろうか。

頭部および刃面、刃部とも欠損している。両欠損部共敲打による損耗がみられるので、この石斧はある段階から「敲打」的な用法に転化しているのではないかと考えられる。石質は輝石玢岩である。

土器（図11の1～3、写真9のAの1～6、Bの1～3）

いわゆる八重山式土器の範疇に属するものである。胎土に比較的多量の貝殻細粒が混入されている。焼成は良好である。表面はアバ

タ状に貝殻等の脱落痕がみられる。器面調整によるものとみられる浅い無数の条痕がある。条痕の方向は基本的に横又は斜であるが、特に一定しているわけではない。

器形は全形を窺えないが、これまでの他遺跡出土例を参考にすると、口縁は直口で（図11の2、写真9のBの2）、胴部は垂直に底部に達し、底部角がやや丸みを帯びた平底（図11の3、写真9のBの3）のいわゆる隅丸横コの字型の土器になるものと考えられる。

口縁から数センチメートル下の外面上半部には、水平方向の把手（外耳）がつけられている。

籾の圧痕を有する土器片

写真9のDに示す土器片の外表面に籾の圧痕とみられるものがある。

陶器

灰釉陶器胴部細片で、従来南蛮と称されてきた外国製陶器である。黄褐色の釉が表面にかけられ、内面は無釉である。胎土は赤茶色を呈し、石英の微粒が混入している。

青磁（図11の4、写真9のBの4）

碗の高台である。高台の畳付部は内縁、外縁とも角をなし、高台内部は中央部の釉が除去されている。釉は淡青で、見込には全面かけられている。胎土は微少な気泡がみられる。一般に明代に属するとされるものに相当する。

〔石スク山遺跡の試掘調査[23]（一九六〇・一九六二年の小調査概要）〕

はじめに

今回報告する出土遺物は、一九六〇年八月一五日に筆者らを中心としたW・I・O考古学研究グループにより石スク山の頂上に二×二メートルの試掘調査用ピットより出土したもの[24]と、八重山毎日新聞社主催で宮良賢貞氏を団長とする石底洞窟調査団による一九六二年一月二五日の第一次調査[25]、さらに同年二月三日の第二次調査[26]の際に表面採集されたスク時代の磨石一点、多数の厚手の土器、類須恵器一片（徳之島のカムィヤキ系陶器）、数片の中国製の青磁、南蛮陶器（スビガミ・褐釉陶器）と近世の琉球の荒焼などである。

試掘調査したときの層序は、第Ⅰ層が表土の撹乱層、第Ⅱ層が黒色の遺物包含層である。地表面下約四〇センチメートルの深さに達すると基盤石灰岩となる。

以下これらの遺物について述べる。

1　遺物

①　石器（磨石）。（図10の3、写真8のB）

花崗岩の丸い自然礫を利用した磨石である。半分は欠失しているが、ほぼ卵形を呈しているものと考えられる。磨石の面には擦りへり痕跡がある。

② 土器

試掘調査によって検出された土器及び表面採集で得た土器は、表2の通りである。すべて厚手無紋の小破片で原形を窺えるものはない。製作手法は、回転台を使用せずに手捏ねによって巻き上げか、又は輪積みで製作を行なっている。口縁部の形態や底部から器形を窺ってみると、鉢形土器と壺形土器に分類される。

A. 鉢形土器

この種の器形をなすものが本資料の大部分を占めている。

イ. 外耳の付いていないもの（図1の1〜10）

土器は胎土に小粒の貝を少量混入し、器厚を薄くし、焼成は良好である。土器の口縁には直立するものと内彎するものとがある。図1の1（写真6のAの1）は、外面に刷毛目、内面は指で撫でて土器面を調整している。同図の4（写真6のAの4）は、土器の口縁部は指撫で、肩部を篦撫でしている。また胴部にかけては、テンパーが引きずられた荒い擦痕跡が見られることから篦削りで調整していることが判る。色調は赤褐色を呈している。図1の1・4は、土器面に煤の付着しているものが見られ、煮沸器（土鍋）としての機能をもったものと思われる。

ロ. 外耳の付いているもの（図1の11・12・13、図2の1〜6）（写真6のAの9・10・13・14、Bの1〜5、Fの3・4・5）

外耳の把手は、形状不明の破片を合わせて三七片出土している。口縁部が残っているものが一〇片である。口縁部の二〜四センチメートル下に横位置に梯形や半月形をした把手が付いている。所謂外耳把手である。胎土は一般的に大粒の貝殻を多量に含み、厚手で雑な仕上げのものが大部分である。色調は有機物が付着しているため黒褐色を呈し、煮沸用に使用されたと考えられる。外耳の把手は土器を持ち運びや竈に据えつける「ささえ」の機能があったと考えられる。

図1の12（写真6のAの10）は口径約一五センチメートル、高さ約一一・五センチメートルの浅鉢形の土器で、口縁が直立し土器の口唇部は薄く胴部は厚くなっていて、胴部の肩部のところに貼付した把手がとれた痕跡が見られる。口縁部から胴部にかけて指撫でて土器表面の調整がなされている。底部は篦状工具によって削りとられており、篦調整のときのテンパーが引きずられてできた凹凸の荒い擦痕跡がみられる。

図2の1は、口径約二八センチメートル、口縁部の器面を指撫での雑な仕上げを行ない、土器の表面を調整した後にややゆるやかなくぼみの肩部のところに把手を貼付している。胴部や底部がないために器形の全体を窺えないが、山原貝塚では、深さ約一一・五センチメートルの平底の浅鉢形の土器の報告があり、これに類するものと考えられる。[27] 胎土は貝殻や砂粒（直形二〜三ミリメートル）を混入しており、断面に継ぎ目がみられ、色調は茶褐色を

呈している。

これらの外耳状把手の形状を大きく分類すると、Ⅰ．梯形を呈するもの一二片、図2の4（写真6のBの2）、Ⅱ．半月形を呈するもの二五片、図3の2（写真6のBの4）に分けられる。また、断面形を大きく分けると、Ⅰ．釣鐘状を呈するもの二四片、図3の1（写真6のBの3）、Ⅱ．舌状形を呈するもの一三片、図1の13（写真6のAの13）に分けられる。外耳状把手の添付手法は、棒状の粘土粒を肩部に口縁部と平行するようにして貼付して、指撫でで形を整えていく手法である。

B．壷形土器（図6の1～3（写真6のFの1・2・6）

壷形土器は、鉢形土器に比して非常に少なく三片だけである。また、土器の厚さは薄く焼成は良好である。これらは小破片のために完形を窺えないが、中国製の南蛮陶器（スビガミ）などからみて口縁はラッパ状で緩やかに外反し胴部の強く張った形の平底の壷と考えられる。

図6の1（写真6のFの1）は、口径約二一センチメートル、口唇部が平坦で口縁が外反し、外面は篦削りの手法によって器面調整されている。胎土には少量の貝殻の粉末を含み色調は黒褐色を呈している。同図の2（写真6Fの2）は、口径約一四・五センチメートルで口唇部が舌状を呈し口縁が緩やかに外反し、指撫でによって器面調整をしている。胎土には少量の粉末や砂粒、石英などを混入している。色調は赤褐色を呈している。

C．土器の底部（図4の1～6・図5の1～20）

これらの鉢形土器や壷形土器もすべてが平底である。平底の底部から胴部にかけての断面は丸味のあるものが大部分であるが、若干角ばったもの、図4の2（写真6のBの7）もある。

図4の2では「くびれの部分に継ぎ目が見られ、粘土で円形の平盤を作って、その上に粘土を輪積みにするが、又は巻き上げしていく製作手法が窺える」[28]と考察されたものと同一手法によっている。底径はおよそ二三センチメートル程度のものが多い。厚さは〇・五～一センチメートル以内二八片、一センチメートル以上が一五片である。土器表面の色調は有機物が付着しているためかほとんどが黒茶褐色を呈し外耳土器の用途を示しているものと思われる。

これらの土器の胎土には大粒三～五ミリメートルの貝殻を多量に混入しているものが大部分である。土器の表面は雑な仕上げでザラザラしており、テンパーが露出している。土器の内面は良く整形されている。底部の角は篦で削りとったり篦や指撫でして整形している。

D．条痕を有する土器（図7の1・2）

図7の1では、土器の表面に縦位に細い溝が幾つも平行状をな

し、条痕となっている。内面には横位の条痕がある。胎土には貝殻を少量に混入している。色調は土器表面が茶褐色で、内面は黒色である。焼成は堅固で良好である。同図の2では、土器の表面には条痕がある。胎土は少量の小石や石英などを混入し、色調は茶褐色である。

条痕を有する土器は、制作過程において、貝殻や篦状工具によって、土器の表面を掻き取りや削り取りが行なわれたことを示すと考えられる。

③　陶磁器

地元の土器と比べて陶磁器類は非常に少ない。スク時代の類須恵器（カムィヤキ系陶器）や中国製の青磁、南蛮陶器（スビガミ＝褐釉陶器）と近世の荒焼などが主な遺物である。

A.　類須恵器（徳之島のカムィヤキ系陶器）

類須恵器の胴部破片が一片出土した。図8の1（写真7のAの1）は、青灰色の色調を呈していて陶質で器厚は六ミリメートルで外面に平行線の押型が施され、また内面には格子目押型が見られる。沖縄本島のグスク時代の遺跡などから出土する類須恵器[29]の範疇に属するものと考える。

八重山においては、大浜のフルスト原遺跡、大浜のウフスク村遺跡、新川のビロースク遺跡、山原貝塚[30]、西表島の仲間第二貝塚（赤色土器時代・スク時代・近世集落跡）、波照間島のブリブチ遺跡などからも採集されている。

B.　中国製の青磁（図8の2・3、写真7のAの2・3）

青磁の口縁部一片と底部一片が出土した。図8の2（写真7のAの2）は、口径約一六センチメートルの碗である。無紋で口縁が外反している。胎土は白色を呈し、ガラス質である。釉色は淡緑色である。図8の3（写真7のAの3）は、底部の破片である。底径は約五・五センチメートルで胎土は灰色でコンクリート状を呈し、ところどころに気泡がある。釉色は青緑色で見込み部分は露胎である。貫入が大きく走っている。

C.　中国製の南蛮陶器（褐釉陶器・方言ではスビガミ）

南蛮陶器のほとんどが破片で、口縁部が三片と胴部一一片、そして底部五片が出土した。

図9の4（写真7のBの2）、図9の1は、玉縁状の口縁を呈する有耳壷である。胎土には石英や砂粒などを混入している。また、釉はまだら状にかかっている。これらの南蛮陶器の色調は、黄褐色や茶褐色、そして黒色などを呈している。底部は平底であり、ほとんどの陶器の厚さは薄く焼成温度は一二〇〇度位と思われ、巻き上げ後に轆轤で整形をしている。

図9の2は、外耳の孔で貫通していて肩部に水平方向に貼付し

ている。外耳には両端を指で押さえつけた跡がみられる。肩部には刻印されているが、摩耗などにより字体が不明瞭で解読不可能である。

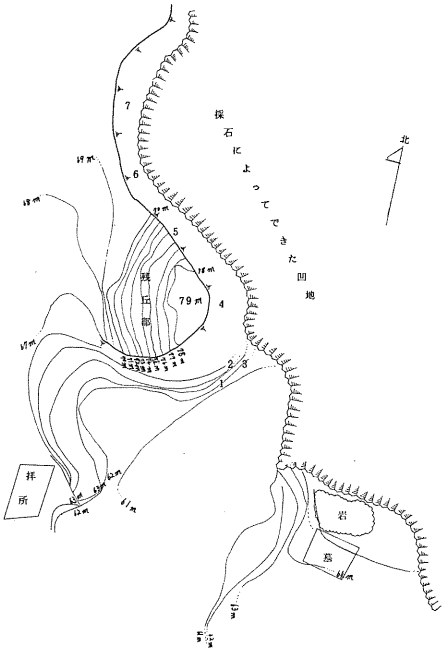
D．荒焼（図10の1・2、写真7のBの1、写真8のA）

いわゆる琉球南蛮である。無釉の陶器質で固く焼き締められている。胎土には混入物がなく、鉄分のために赤褐色を呈している。巻き上げ整形後、轆轤で整形を行っている。図10の1（写真7のBの1）は、肩部に「十」の記がある。図10の2（写真8のA）は、肥厚口縁の甕である。肩部の一・七センチメートルの間に横に右巻きの渦の如き模様と、葉脈の如き模様が相互に規則的に手で描かれている。これらの荒焼は、石底山が四ヵ村の発祥地で古今を通じて信仰の対称としての神聖な祭祀の場所であるために後世に持ち込まれたものか、それとも乾隆三六（一七七一）後の大津波を恐れ避難した場所にあったものか、或いは、戦時中の要塞にあったものか定かではないが、スク時代の地元の石器・土器、徳之島産の類須恵器、中国製の青磁・南蛮陶器（スビガミ）などとは時代を異にする近世の遺物と考えられる。

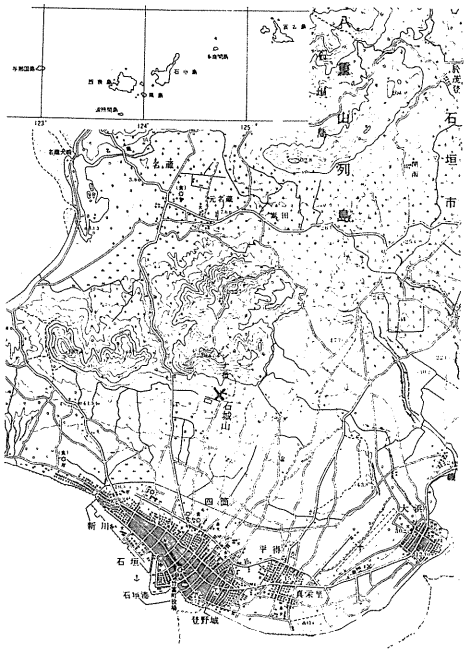
まとめ

八重山では一二世紀から一二世紀後半頃にかけて外来の陶磁器文化の受容が始まる。渡来者との接触の際に海岸低地の河川流域や砂丘に住んでいた無土器時代の先住の人々が戸惑いを感じながら拡散し、やや内陸部の石灰岩地帯のアブ（洞窟、岩陰）などに住んだというような状況が想定されている。石底山遺跡もスク時代の初期の拡散された際に形成された遺跡である。また、中世の集落地と伝承されている「元ムラ跡」などと呼ばれるところからはかなりの量の中国製の貿易陶磁器（白磁、青磁、南蛮陶器、染付）などが地元の外耳土器といっしょに採集される。石底山遺跡から出土する土着の土器と外来陶磁器などとを比較すると、土着の土器が八九パーセント、外来陶磁器などはわずか一一パーセントで、他の遺跡と異なる状況を呈している。明末期時代の染付も出土していないことから、比較的古い時代に放棄された遺跡だと思われる。石底山遺跡も四ヵ村の発祥地という伝承を裏付けている。

外来の貿易陶磁器などの詳細な研究を待たなければならないが、遺跡の立地や土器の比率が外来陶磁器を上まわることなどからして、筆者は、一三世前半から一四世紀頃にかけてのスク時代の前期の遺跡である可能性が強いと考える。



地図３　石城山西端残丘地区地形現況



地図２　石垣島と石城山の位置

区　　分		土　器	類須恵器	青　磁	南　蛮　陶　器	荒　焼
口縁部（器形）	鉢　形	23(外耳10)	0	1		1
	壷　形	3			3	1
底　部（平底）	丸　形	36	0	1		
	角　形	7			5	
外　　耳		27				
胴　　部		104	1		13	
合　　計		200	1	2	21	2

表１　土器，陶磁器集計表
（沖縄県教育委員会『石城山－緊急発掘調査概報』1978年，注15より）

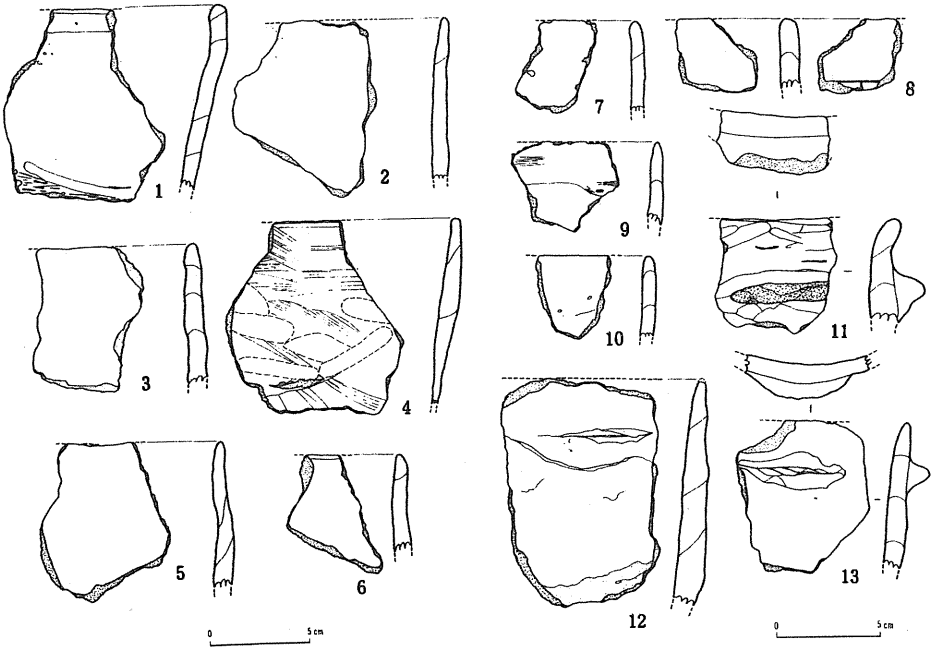


図1　石スク山遺跡出土の鉢形土器

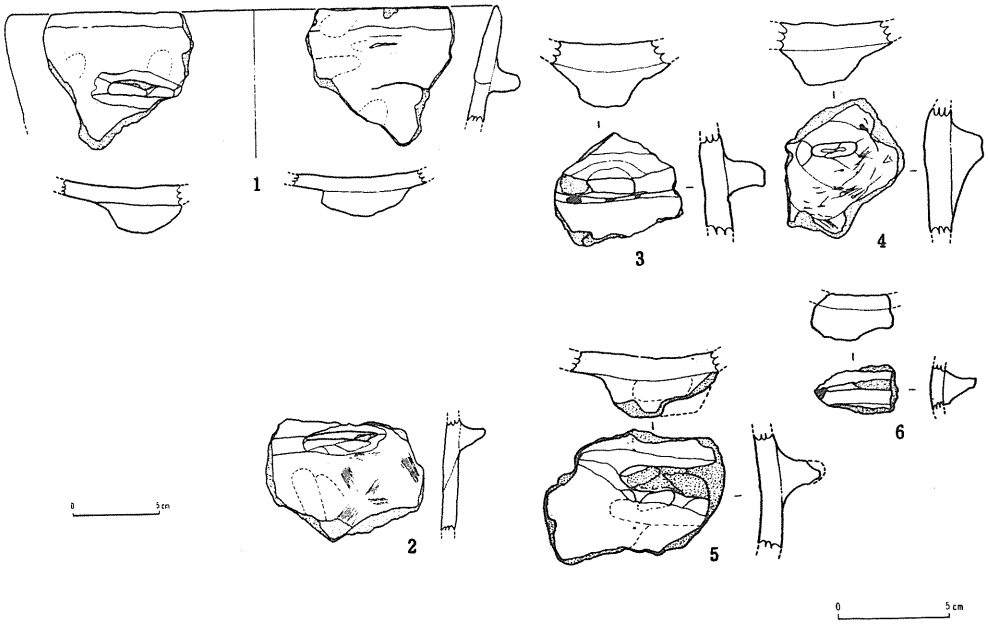


図2　石スク山遺跡出土の鉢形土器で外耳の付いているもの
（沖縄県教育委員会『石城山－緊急発掘調査概報』1978年，注15より）

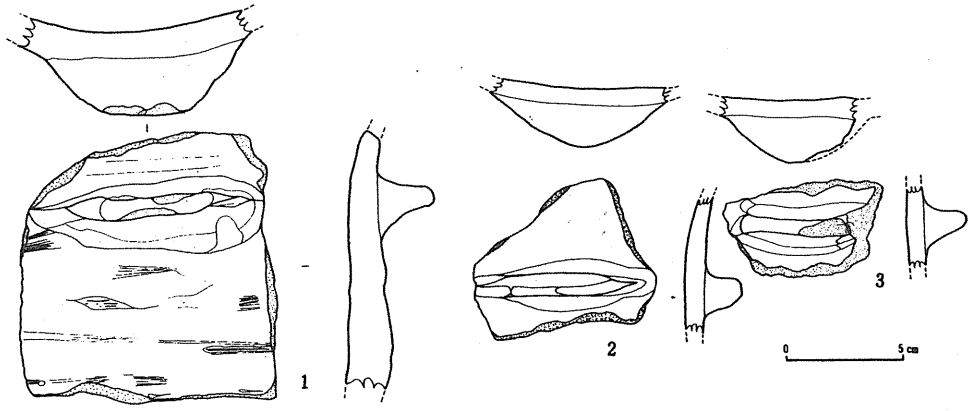


図３　石スク山遺跡出土の鉢形土器で外耳の付いているもの

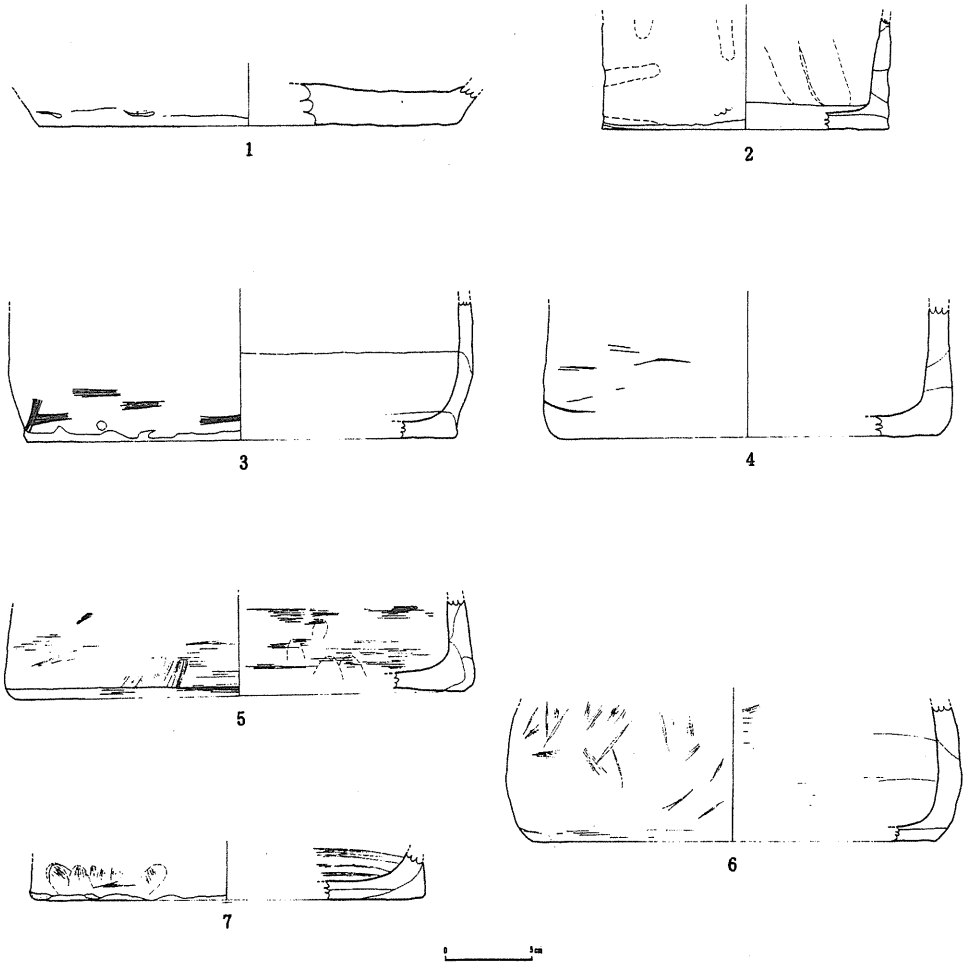


図４　石スク山遺跡出土の土器底部
（沖縄県教育委員会『石城山－緊急発掘調査概報』1978年，注15より）

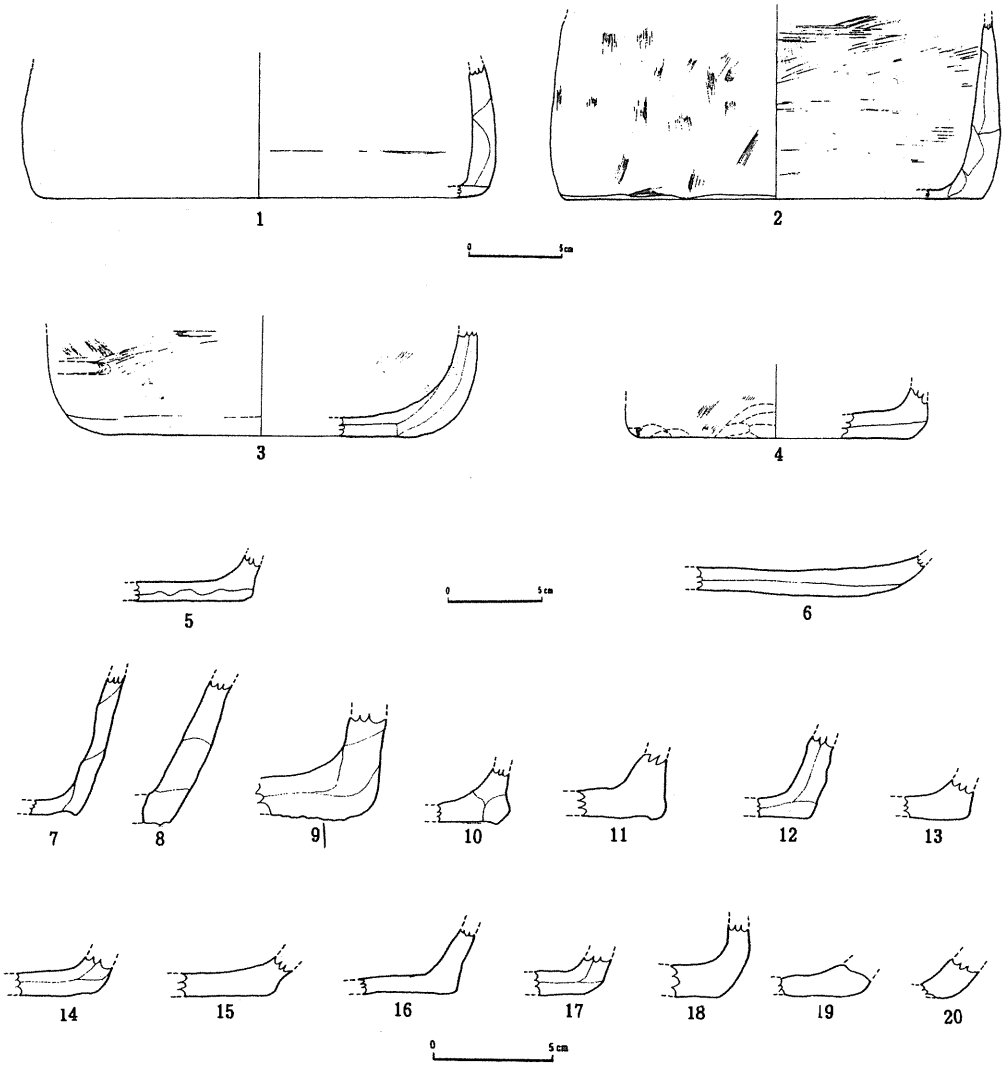


図5　石スク山遺跡出土の土器底部

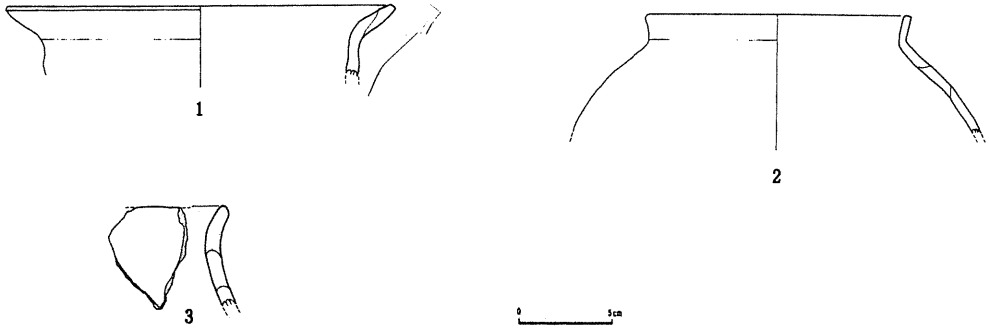


図6　石スク山遺跡出土の壺形土器

（沖縄県教育委員会『石城山－緊急発掘調査概報』1978年，注15より）

図７　石スク山遺跡出土の条痕を有する土器

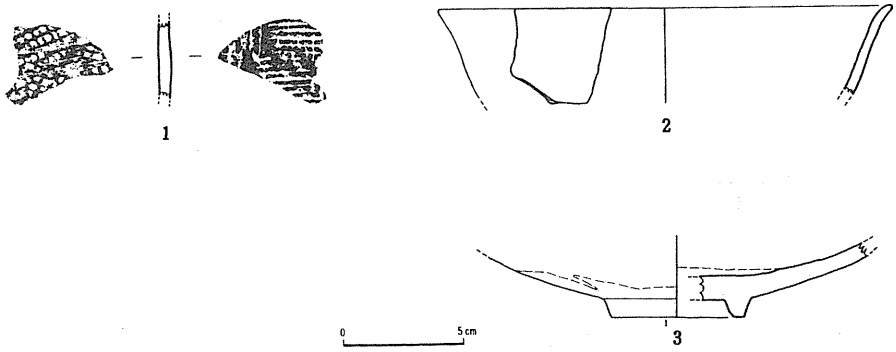


図８　石スク山遺跡出土の類須恵器・中国製の青磁

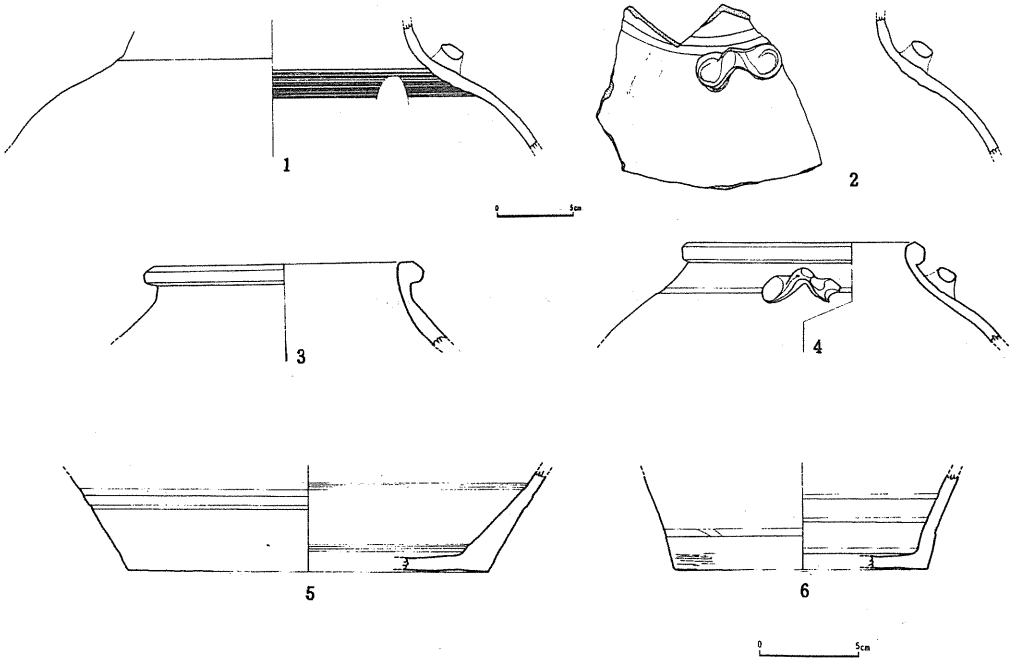


図９　石スク山遺跡出土の南蛮陶器の口縁、底部
（沖縄県教育委員会『石城山－緊急発掘調査概報』1978年，注15より）

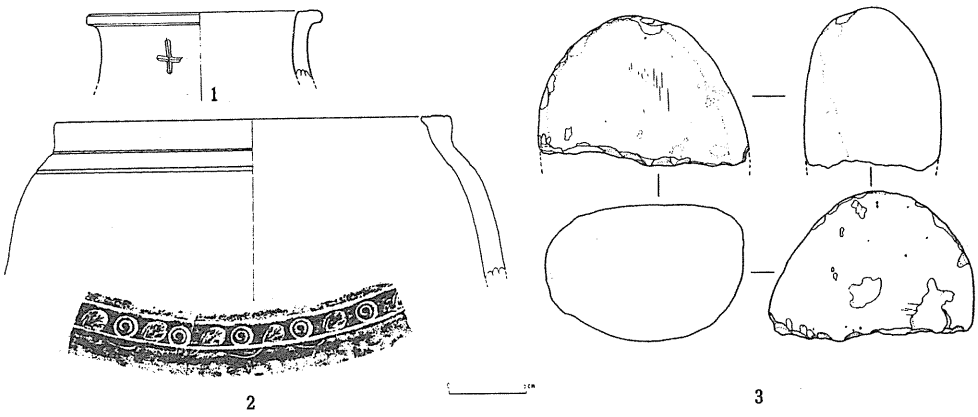


図10　石スク山遺跡採集の荒焼・磨石

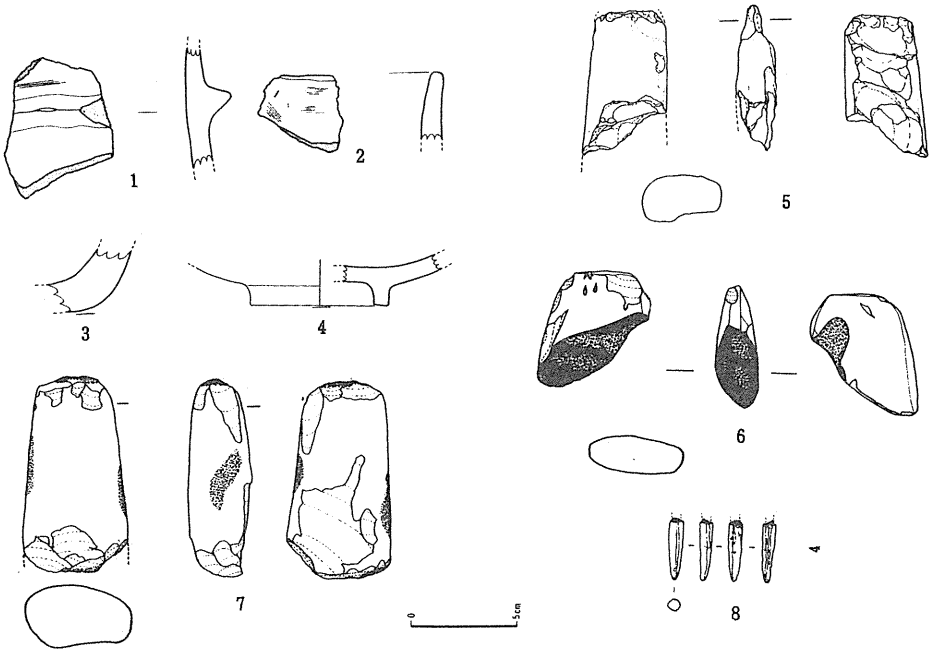
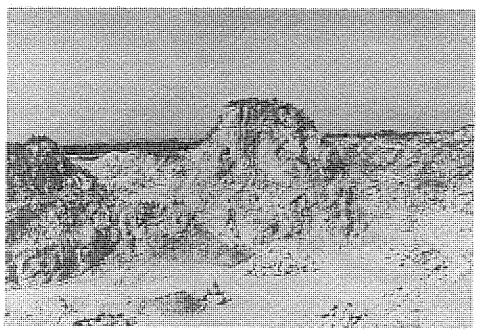


図11　石スク山遺跡出土の土器、青磁、石器、骨器

A



B

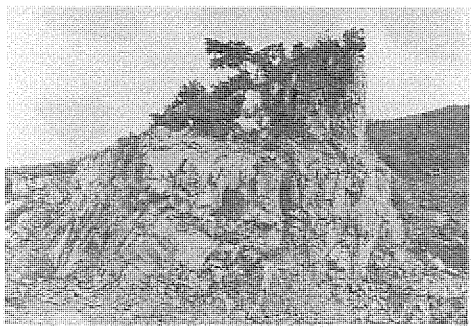


写真3　石スク山の残丘

（沖縄県教育委員会『石城山－緊急発掘調査概報』1978年，注15より）

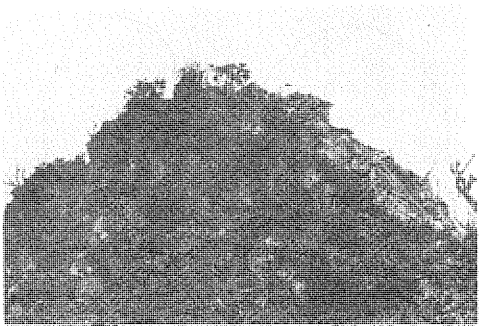


写真４　石スク山の全景

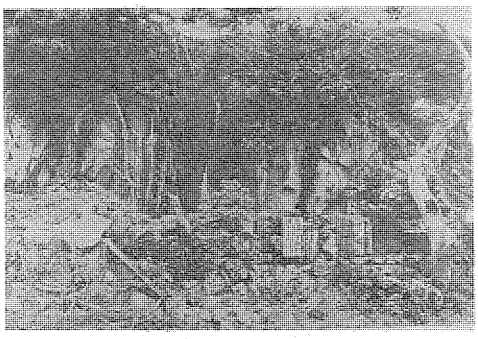


写真５　ハンナー主の墓

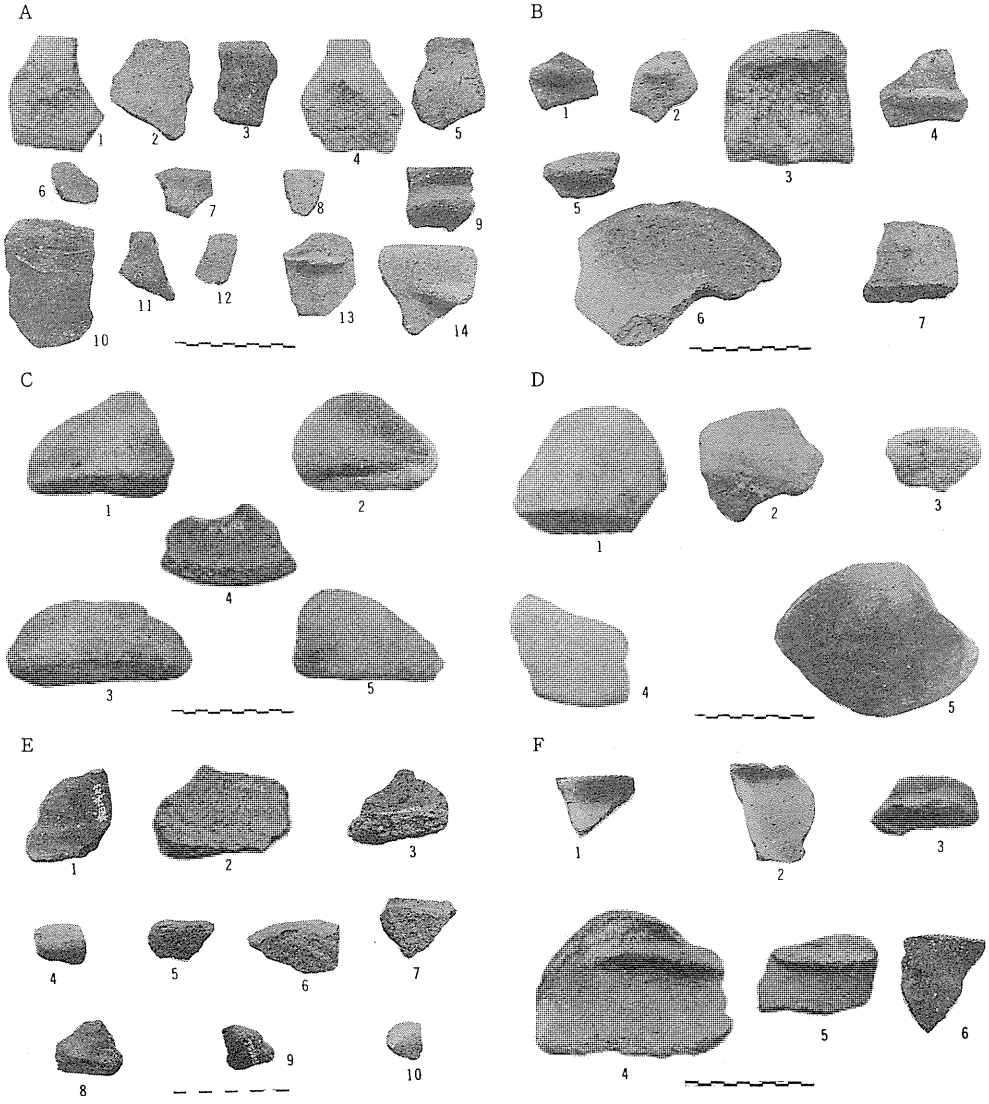


写真６　石スク山遺跡出土の土器
（沖縄県教育委員会『石城山－緊急発掘調査概報』1978年，注15より）

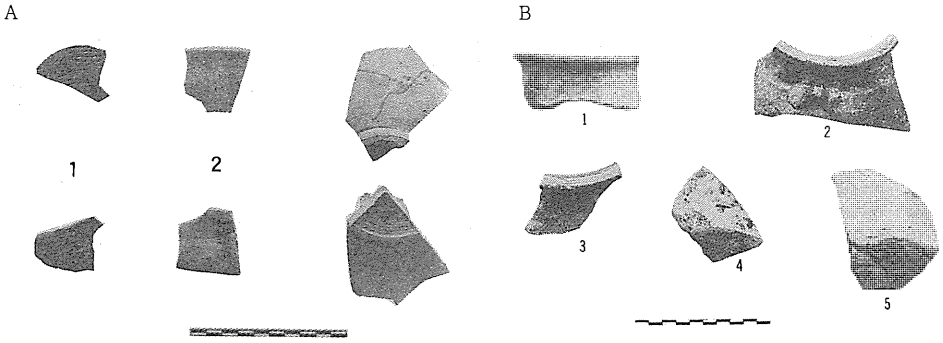


写真７　石スク山遺跡出土の類須恵器、荒焼、中国製の青磁・南蛮陶器

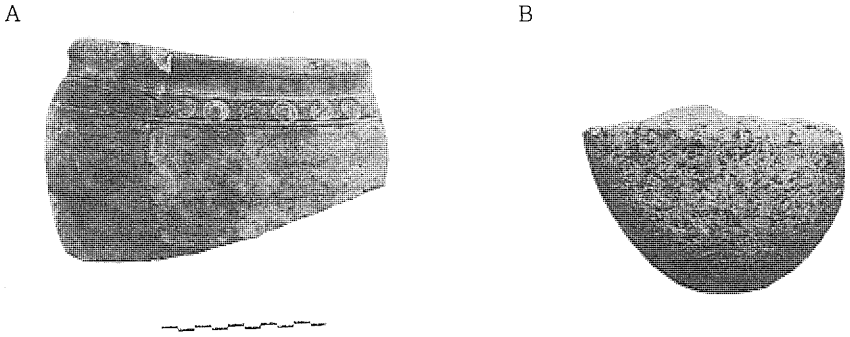


写真８　石スク山遺跡採集の荒焼、磨石

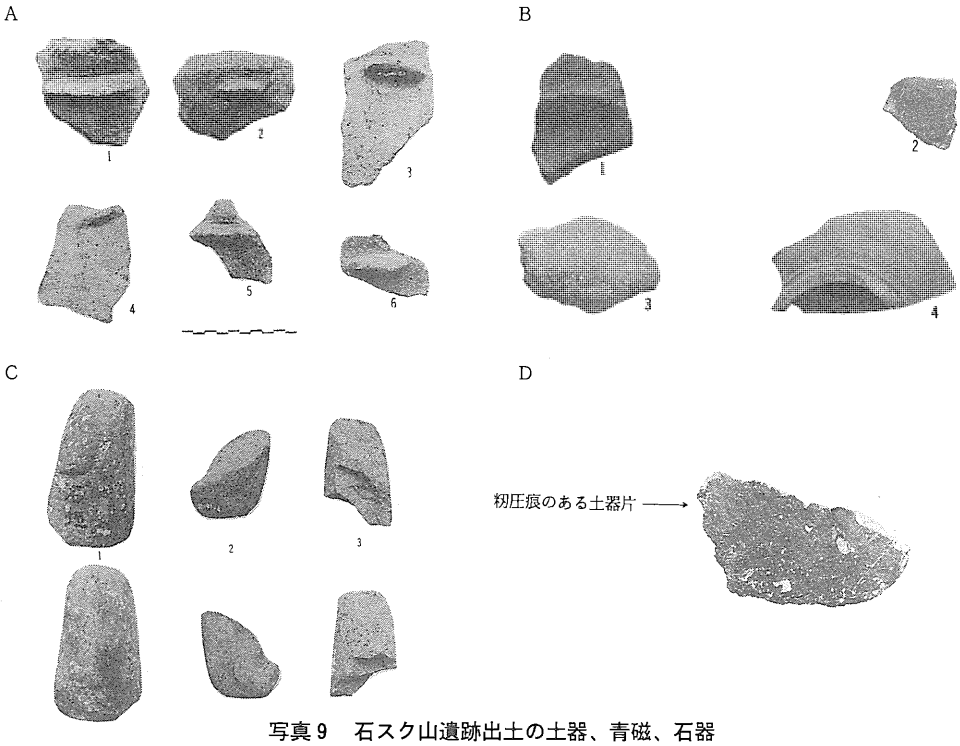


写真９　石スク山遺跡出土の土器、青磁、石器
（沖縄県教育委員会『石城山－緊急発掘調査概報』1978年，注15より）

3．新川ビロースク遺跡[31]（美良底村[32]〈ミラスクムラ〉、アコウスク貝塚〈ニラスク貝塚[33]〉）

石垣中学校北方産業道路の南の標高一〇メートルの琉球石灰岩の丘陵をビロースク森と呼ぶ。ビロースク遺跡は、その森の丘陵と南側の崖下に形成されている。この森の頂上には小さい単郭の野面積みの石垣跡がある。西と北の崖下は外葬墓で「マジャムンノオオセ（幽霊が会合する場所）」と呼ばれて村人に怖がられていた。この遺跡は宮良賢貞氏の指導を受け、筆者を中心としたW・I・O考古学研究グループによって一九五九年に南側が調査された。石斧、敲石、貝錘、骨針、骨ヘラ、数多くの中国製の白磁（内、玉縁口縁碗一片）、青磁（内、櫛掻き文一片）や褐釉陶器、地元の土器などが出土した[34]。また、類須恵器（徳之島のカムィヤキ系陶器）、シャコガイ製貝斧（未完製品）なども採集された。

一九八一年七月一三日～八月二二日、翌年六月二六日～八月六日の二度にわたって奈良国立文化財研究所、県教育庁文化課の指導のもとに石垣市教育委員会が主体となり緊急の発掘調査が行なわれた。

調査の結果、主な遺構として円形状平地住居跡、台形状掘立柱建物遺構、長方形状平地住居跡、炉跡、便所のような遺構、石垣遺構、埋葬人骨、排水溝や炭化麦・米などが検出された。

また、土器（浅鉢形の鍋形土器・壺形土器一点）、石器が一四点（局部磨製石斧六点・すり石四点・凹み石二点・砥石一点）、骨製品一七点（骨製利器九点・骨製尖頭器七点、骨製装飾品一点）、貝製品（クロチョウガイ製貝包丁八点・ヤコウガイの貝匙一点・イモガイ製垂飾品三点・シャコガイの貝錘一点・その他）、玉類（勾玉四点・ガラス製玉五点）、波状沈線文のある壺形の須恵器の小破片が四八片、中国製の白磁一二八片（内、玉縁口縁碗三片・口禿碗一片・他）、青磁一九四片（内、櫛掻き文＝珠光青磁一片・口折れ皿一片・刻花文五六片・鎬蓮弁文五片・他）、茶入れ、天目茶碗、黒褐釉洗、褐釉陶器などが出土した。また、中国銭貨「開元通寶」（六二一年初鋳）二枚、「淳化元寶」（九九〇年初鋳）一枚、「祥符元寶」（一〇〇九年初鋳）一枚、「天聖元寶」（一〇二三年初鋳）一枚、「皇宋通寶」（一〇三八年初鋳）二枚、「熙寧元寶」（一〇六八年初鋳）二枚、「元豊通寶」（一〇七八年初鋳）一枚、「元祐通寶」（一〇八六年初鋳）一枚、「元符通寶」（一〇九八年初鋳）一枚などが出土した[35]。

6．川花第三遺跡[36]（四ヶ村の西端の遺跡[37]）

ビロースク遺跡から西方へ三一〇メートル行ったところにアラピケカーラ（川）があり、本遺跡はその川の東方に立地している。二号線と産業道路に狭まれた琉球石灰岩の海岸段丘一帯は墓地になっており、かつてその西側を屋敷拡張の際に岩を削り取った断面に三〇～四〇センチメートルのアラスジケマンガイを主とした二枚貝の包含層があった。丘陵の西側や、頂上、東側から鉄鍋片、徳之島産の類須恵器三片、中国製の貿易陶磁器の白磁、青磁、褐釉陶器やクチバシ形の局部磨製石斧、敲石、土器などが採集された。現在でも西側の岩を削り取った頂上付近の断面に包含層が露出している。また、二号線の南側のスクマ・ムリ（唐真家の

御嶽）は、大正一〇年来島した柳田國男によって「スクマ・ムリ、新川村はづれに在り。貝塚あとと云い、土器破片あり」と報告されている。

12. 山原貝塚[38]

字登野城村の東方、国家公務員住宅の西南、標高一〇メートルの琉球石灰岩の平地上に立地している。一九五九年八月に早稲田大学八重山学術調査団（代表滝口宏・西村正衛・玉口時雄・大川清・浜名厚）によって発掘調査が行われた。調査の結果、石組遺構の検出や土器の胎土中に籾の混入しているのが発見された。骨角器（尖頭器・骨針・骨角製ヘラ）、オトメイモガイ製の円形垂飾具一点、磨製石斧、砥石、平底の土器（壷形土器・鉢形土器）、須恵質土器、鉄製品（鉄鍋片・扁平な破片・鉄釘状のもの）、陶磁器類（青磁・安南系統と思われる有耳壷）などと共に宋銭貨の「景祐元寶」（一〇三四年初鋳）が出土したことが報告されている。[39]

また、一九五九年から一九六三年にかけて、筆者を中心としたW・I・O考古学研究グループによって何回もの地表調査が行われ、その際に、石斧、敲石、磨石、土器、イモガイ製装飾品、徳之島産の類須恵器、中国産の白磁、青磁、褐釉陶器などを採集した。

琉球大学歴史研究会編「八重山―調査報告」（一九六七年）のなかにも、土器（鉢形土器）、須恵器、銭貨「聖宋元寶」（一一〇一年初鋳）一枚、貝製品（オトメイモガイの円形垂飾具一点）、陶器、磁器、方角石斧一点などの採集報告がされている。[40]

一九八二年から八三年の両年度にわたり石垣市教育委員会によって発掘調査が行なわれた。調査の結果[41]、石列遺構と溝状遺構が検出された。地元の土器（外耳）や石器（叩石二点・砥石二点）、石製品（長崎県西彼杵半島産の滑石製石鍋片・円盤状石製品一片ずつ）、須恵器（徳之島のカムイヤキ系陶器）一二八片、青磁二二二片（劃花文碗・雷文帯碗・圏線文の碗・鎬蓮弁文碗・無文碗）、白磁六二片（内、口禿碗二片・玉縁肥厚の口縁碗一片）、染付三片、褐釉陶器、ヤス状骨製品八点、鉄製品（刀子・角釘・鉄鍋片）一二片、玉類（勾玉三点、丸玉五点、小玉二点）、ヒメジャコを用いた貝錘四点、北宋銭貨（四枚）の「太平通寶」（九七六年初鋳）、「至道元寶」（九九五年初鋳）、「嘉祐通寶」（一〇五六年初鋳）、「元祐通寶」（一〇八六年初鋳）などが出土した。近年、貝塚の側まで住宅が建ち始め、また、道路の拡張工事のためにほとんどが破壊されてしまった。

リチャード・ピアソン氏のカーボン測定では六百年前頃の遺跡[42]である。・六〇〇±一〇〇年BP（一三五〇±一〇〇年AD）

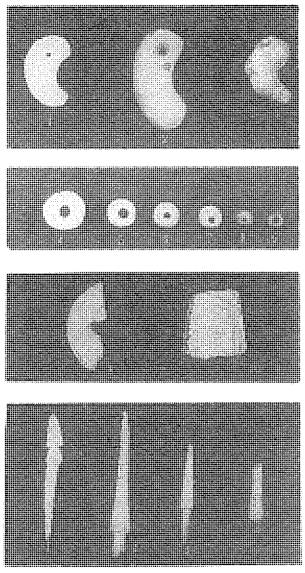


写真10　山原貝塚出土の勾玉、丸玉、石製品（紡錘車？・滑石製石鍋片）、ヤス状骨製品

（石垣市教育委員会『山原貝塚』1984年、注12より）

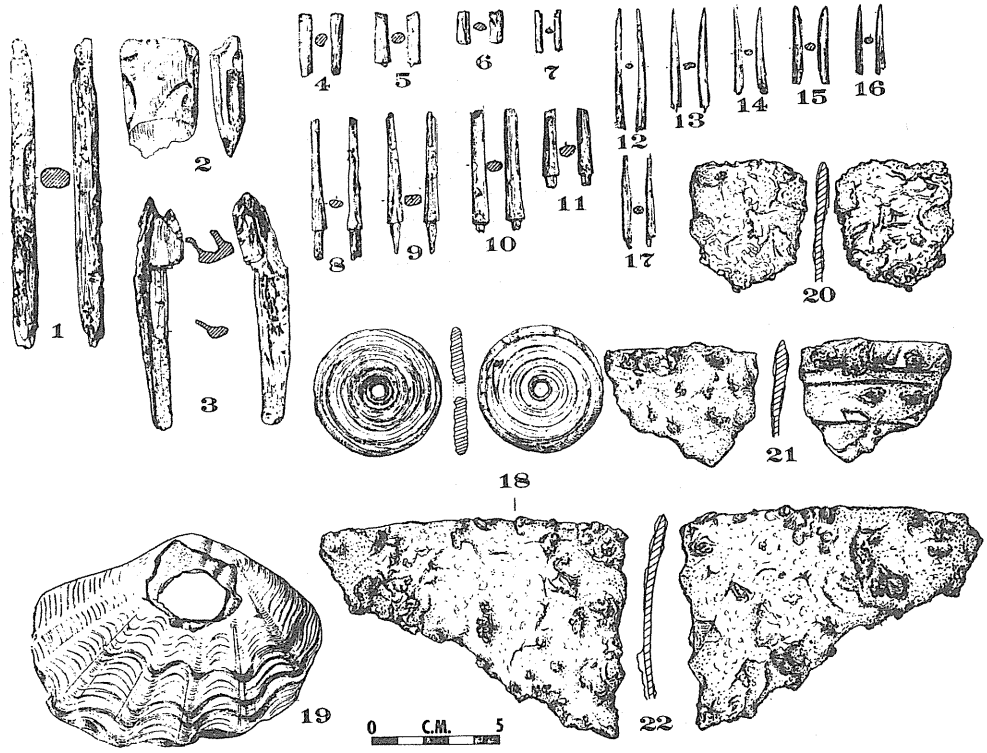


図12　山原貝塚出土の石器・骨角器・貝製品・鉄製品
（早稲田大学八重山学術調査団『沖縄・八重山』1960年，注５より）

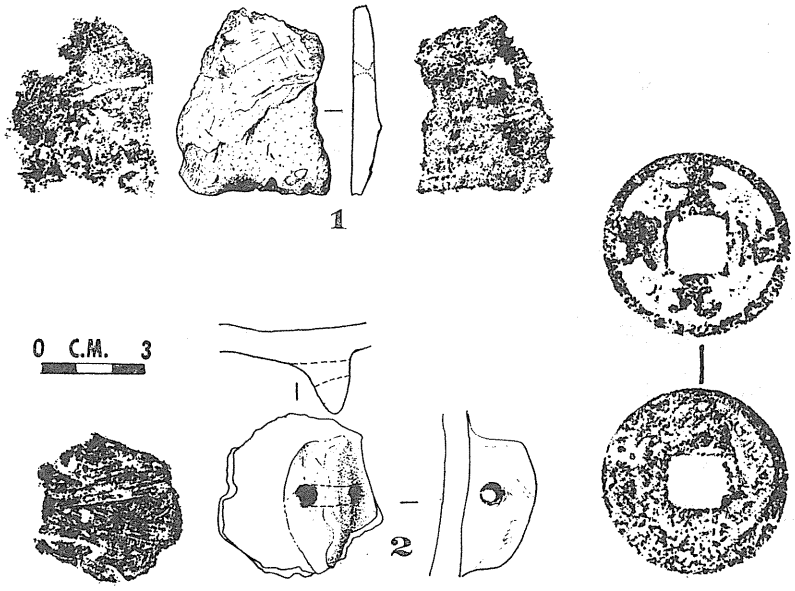


図13　1　土器片（小円孔あり）　2　壺形土器把手　　図17　景祐元寶の拓影

（早稲田大学八重山学術調査団『沖縄・八重山』1960年、注５より）

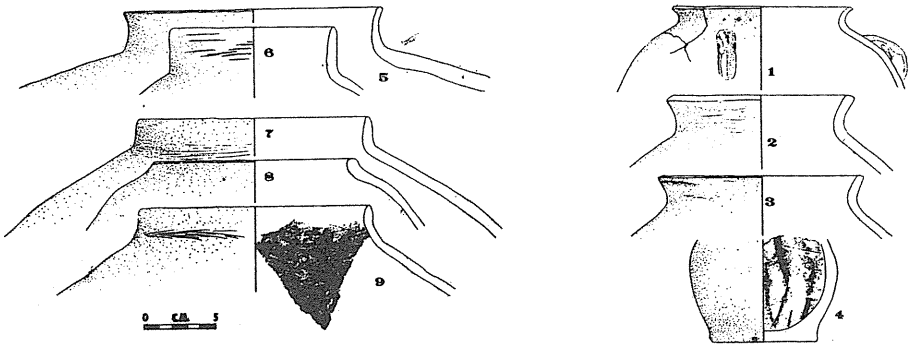


図14　山原貝塚出土の壺形土器

図15　山原貝塚出土の鉢形土器

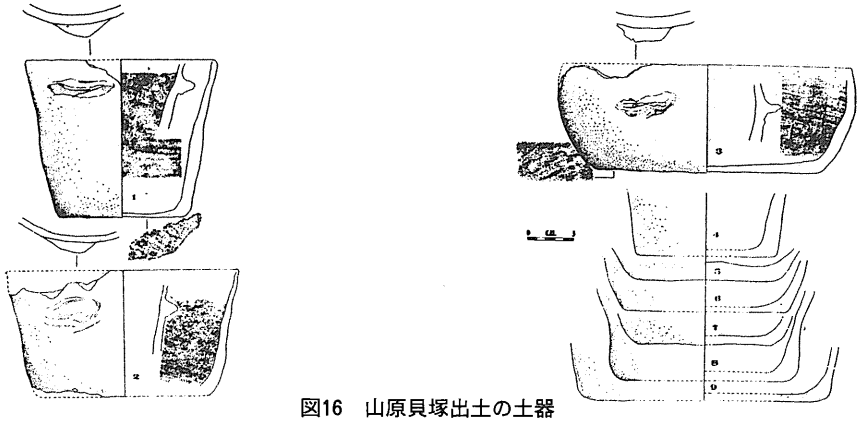


図16　山原貝塚出土の土器

A

B

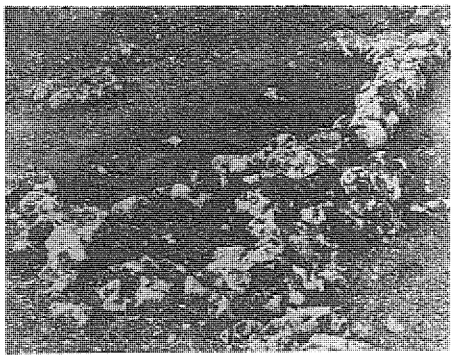
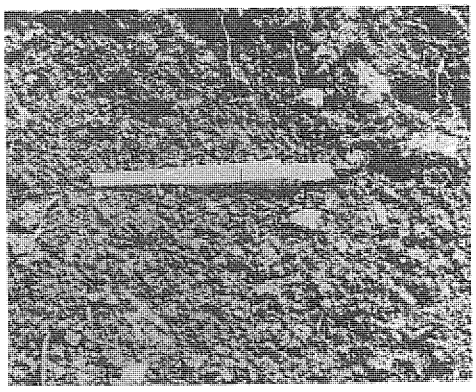


写真11　石組遺構
（早稲田大学八重山学術調査団『沖縄・八重山』1960年、注５より）

写真12

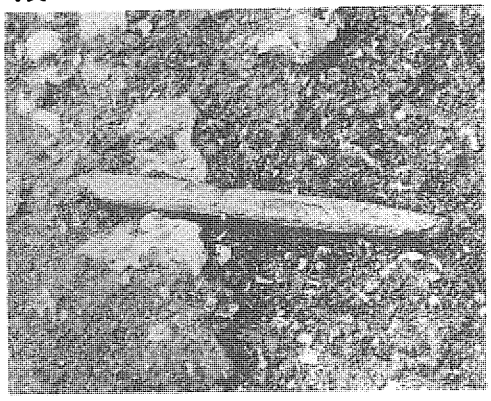
A　骨製品



B　骨製品

（早稲田大学八重山学術調査団『沖縄・八重山』1960年、注５より）

写真13

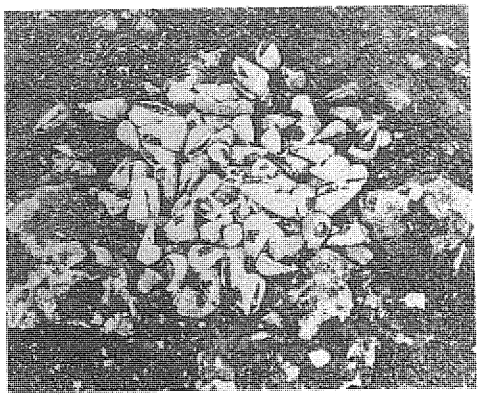


A　骨製品

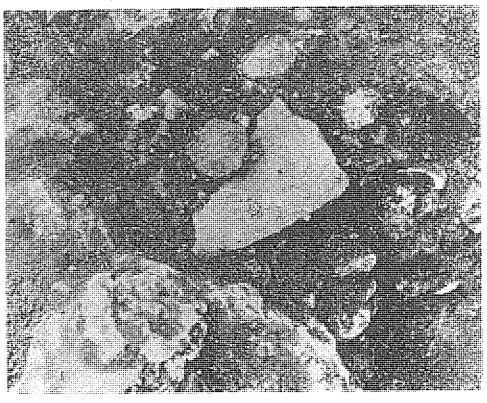
B　貝製垂飾具

（早稲田大学八重山学術調査団『沖縄・八重山』1960年、注５より）

写真14



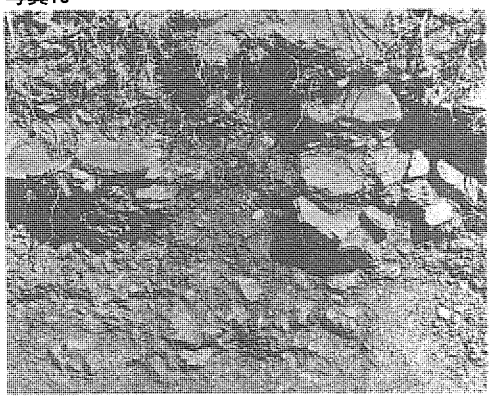
A　石組遺構のなかにあつめられているオトメイモ貝



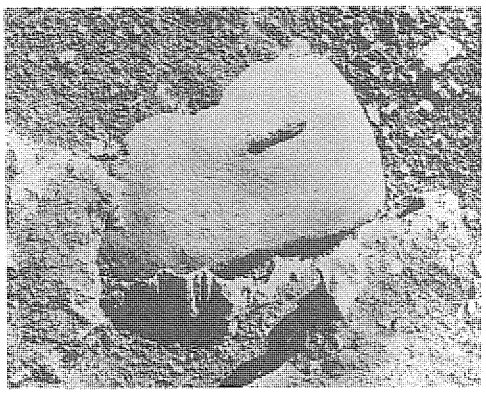
B　鉄なべの破片

（早稲田大学八重山学術調査団『沖縄・八重山』1960年、注５より）

写真15



A　貝　層



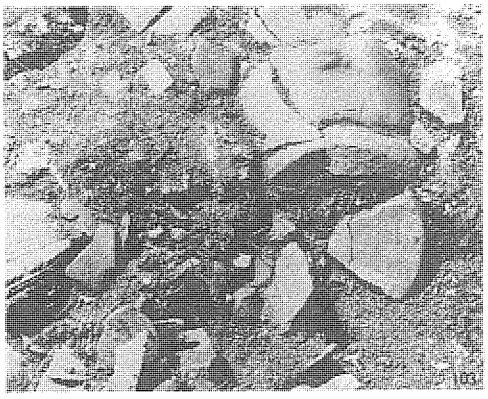
B　土器（外耳土器）の出土状態

（早稲田大学八重山学術調査団『沖縄・八重山』1960年、注５より）

写真16

A　ヤス状骨製品の出土状態

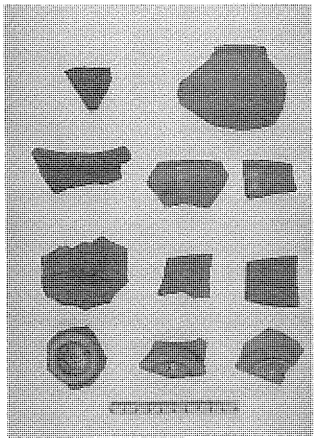
（石垣市教育委員会『山原貝塚』1983年、注12より）



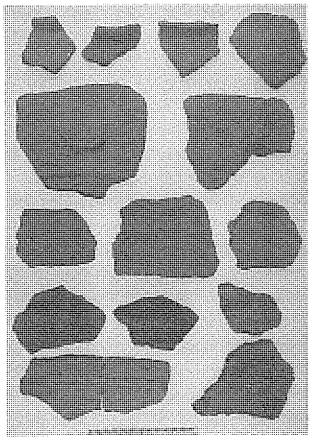
B　土器（外耳土器）の出土状態

（早稲田大学八重山学術調査団『沖縄・八重山』1960年、注５より）

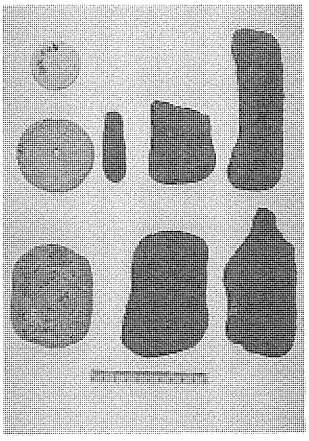
写真17　山原貝塚採集の類須恵器、中国製貿易陶磁器、土器、石斧、磨石、敲石、貝製装飾品



A　類須恵器、中国製の白磁、青磁、褐釉陶器



B　土　器



C　イモガイ製装飾品、敲石、磨石、磨製石斧

二．平得村の発祥に関わる遺跡

平得村の移動について宮良安彦氏は「石垣島・平得、真栄里両村の村落移動と諸御嶽の来歴」のなかで「最初は、①パイノーラ（石垣島北東海岸）から、②ペーギナー（チソコバル）へ、そして③新城村（チソコバルのアラスクバル）を経て④カジャフチムラ（ウイバル）へ。さらに南の⑤仲本村（ヒラエタバル）に移り、そこから現在地（宇部御嶽一帯）に来て⑤平得村と改称して現在に至っている[43]」と、報告している。その内、最初のパイノーラについては、平得村の新本家の先祖がその付近で綿花を栽培していたといわれているのを宮良氏が勘違いしたものと思われる。また、④のカジャフチムラ跡は平得村の北のウイスズ村遺跡と同一と思われる。

13．ペーギナー遺跡（平喜名遺跡[44]）

国際農林水産業研究センター沖縄支所から川原集落へ向かう農道を行くと宮良川中流の平慶名橋がある。この橋の手前を北へ川沿いに行くと自然の溜池で平得村の名称の由来として知られているピーラ池がある。本遺跡はピーラ池の西側一帯の標高二〇メートル前後の琉球石灰岩の河岸段丘上や崖下に形成されている。一九六〇年頃には、道路舗装用の石粉の採石の際に一帯から中国製の陶磁器や土着の外耳土器などが採集された。その当時、この一帯にある洞穴が郷土史家宮良賢貞氏によって調査され蛤刃の磨製石斧が発見されたことが新聞紙上で発表されている。[45]

14．平得アラスク村遺跡（伝アラスク村跡遺跡[46]）

地底御嶽の南方の新城原という標高五二メートルの琉球石灰岩の平地上に立地している。そこには新城原井戸（降り井戸）や野面（のづら）積み石垣の屋敷跡があり、地元の人々は「ブスヌヤーイシガキ」（武の家石垣）、または「ブスヌヤー」（武士の家）とも呼んでいる。戦時中、この地域は避難地域になっていて遺跡の一部が破壊された。現在はキビ畑と牧場になっているが、中国製の貿易陶磁器（白磁・青磁・褐釉陶器）、外耳土器、石斧一点などが採集されている。一九七九年の上原地区圃場整備事業などにより破壊の危機に直面した。一九八四年八月一日より九月三日まで、上原地区畑灌事業のスプリンクラー設置工事に伴う緊急発掘調査を県教育庁文化課が行なった。調査の結果、土器、石器（敲打器・磨石・石皿）、勾玉、ガラス製玉、中国製の青磁、白磁、染付、褐釉陶器、沖縄製陶器（擂鉢）などが出土した。[47]

一九八一年八月一三日に、平得アラスク村遺跡として沖縄県の「史跡[48]」に指定された。

15．ウイスズ村遺跡[49]（ウイヌスズ遺跡[50]）

平得の後方に村の共同墓地群があり、地名をウイスズ（通称マフタ）と言い、標高三五メートルの琉球石灰岩海岸段丘の一角に立地している。ウイスズ井戸や屋敷跡の野面積み石垣遺構がある。この一帯から数多くの鉄滓や土器、中国製の白磁、青磁、褐釉陶器、外耳土器、石斧などが採集された。近年、墓地建設などで破壊されつつある遺跡である。

一九八四年九月四日より一〇月九日まで県教育庁文化課によって、緊急発掘調査が行なわれた。調査の結果、土器、中国製の青磁、白磁、染付、天目茶碗、褐釉陶器、埋葬人骨などが出土した[51]。

16．仲本村遺跡[52]（平得仲本御嶽遺跡[53]・伝仲本村跡遺跡群[54]）

平得集落の後方パイヌフツィ御嶽からニシィヌフツィ御嶽にかけての琉球石灰岩平地上に形成されている。本遺跡は、平得の人々によって「仲本村跡[55]」として古くから知られている。一九七五年七月三〇日から八月一七日の三週間にわたって県教育庁文化課によって緊急発掘調査が行なわれ、遺跡の名称を平得仲本御嶽遺跡とした。

調査の結果、石敷遺構が検出され、数多くの土器や中国製の白磁、青磁、青白磁、灰白磁、灰青釉、青釉、飴釉、染付、南蛮陶器（スビガミ・褐釉陶器）や玉、骨製品、角ノミ状石斧、磨石、鉄製品（刀子）などが出土した[56]。遺跡の年代は陶磁器などから推察して一五世紀から一六世紀のスク時代の集落跡であることが判明した。この遺跡から出土した多数の中国製の貿易陶磁器などから海外貿易の一端が窺われる。

17．平得宇部御嶽遺跡[57]（平得仲本御嶽遺跡[58]・伝仲本村跡遺跡群[59]）

字平得の北側に、平得村の創建に関わる宇部御嶽があり、そこを中心とした平地の琉球石灰岩上に位置する。平得村はウーリヤーの七人の兄弟によって創建されたといわれ、その兄弟の屋敷が宇部御嶽である。御嶽西側には掘り抜き井戸（チィナーカー）の新本井戸（アラムティミカー）があり、その付近から数多くの外耳土器、中国製の白磁、青磁、天目茶碗、染付、褐釉陶器、勾玉など[60]が採集されている。また、御嶽の境内から鉄滓が筆者によって採集された。鍛冶屋の屋敷跡である。鍛冶神を奉っていると思われる。『八重山島由来記』には、「ヲホ御嶽、神名、中尾盛照月・御イベ名、月ノマンカワラ[61]」と、記載されている。近年、付近に住宅が建ち始め破壊されつつある。

18．パイナーカー遺跡[62]

字平得の東の島端、かつての平得村の馬場の南側をナカムラと呼び、一帯の標高一三メートルの琉球石灰岩を握り込んだ井戸を中心に形成されている。井戸の呼称からは「南方井戸」、或いは「張り縄井戸」と表記される。琉球石灰岩の岩盤を掘り抜いていて斜道の長さが約二一メートルあり三四～三五の階段がある。この井戸は平得（ピサイ）村最初の共同の降り井戸である。一九七五年前までは節祭などに井戸浚いをして掃き清め、感謝の祈願を行なっていた。この遺跡周辺からは鉄滓などが多数採集される。現在はこの遺跡のすぐそば

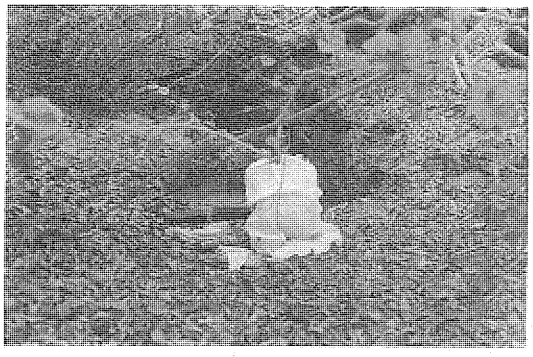


写真18　パイナーカーでの司による祈願（1970年頃）

まで住宅が建ち、うっそうと繁っていたガジマルの大木が切り倒され、井戸の降り口近くまでブロック塀が積まれていて無惨な姿になっている。（一九八〇年一〇月一三日、石垣市の「史跡[63]」の指定を受けた。）

三．大浜村の発祥に関わる遺跡

大浜村には、かつて（一七七一年以前）大城（ウフスク）村、フルスト村、崎原村、黒石村、南大浜村等の村があった。一七七一年の大津波後に村再建のために現在地の黒石村に吸収合併されたといわれている。[64]

19．ウフスク（大城）村遺跡[65]（フナスク貝塚[66]・カンドウ原遺跡[67]）

大浜集落の北東約三百メートルの大底御嶽と潤水御嶽（をのみち御嶽）のある一帯の地名をカンドウ原と呼び、標高二～五メートルの砂丘（カニク）の平坦地に位置する。現在は葉タバコやキビ畑となっている。北側にはウーニンガーと呼ばれる浅い降り井戸があり、本遺跡西側のフルスト原と呼ばれている海岸段丘の崖下にそって、ウラバルカーラ（ウラバル川）がガヤシキパマ（浜）へ流れている。その入り江を俗称、「船着」といい、そのガヤシキ浜一帯にかけては中国製の貿易陶磁器の白磁、青磁、染付、褐釉陶器や琉球南蛮（荒焼）などが散乱している。

本遺跡は先史時代の終末期から歴史時代にかけて形成された複合遺跡である。遺跡からはシャコガイ製貝斧[68]や偏平片刃石斧、凹石、磨石、敲石などが表面採集されている。

一九七六年、宮良川磯辺地区県営圃場整備事業などで、遺跡は破壊寸前にあった。そこで、石垣市教育委員会が県教育庁文化課の指導のもとに六月二〇日から七月二〇日の約一ヵ月間にわたって遺跡の範囲確認の緊急の発掘調査を行なった。調査の結果[69]、石敷建物遺構が発見され、この遺構が石敷住居として一八世紀中葉まで存続していたことがわかった。短期間の発掘ではあったが、銭貨、勾玉、中国製の白磁、青磁、染付（青花）、南蛮陶器（方言でスビガミ・褐釉陶器）や沖縄産南蛮陶器の擂鉢、壺、赤色瓦、壷屋の白色陶器、鉄製品、銅製品や地元で造られた土器（甕形土器・壷形土器・鉢形土器）など、数千点余の遺物が出土し、八重山における先史時代から原史・歴史時代にかけての変遷を知るうえで予想以上の成果をおさめた。

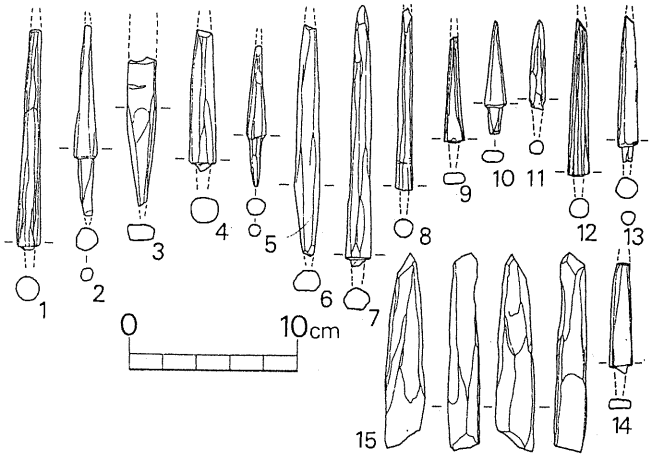


図17　ウフスク（大城）村遺跡出土の骨製品
（沖縄県教育委員会「カンドウ原遺跡緊急発掘調査ニュース」1977年，注67より）

調査の結果に基づき、当地区における圃場整備事業区域内の文化財の取扱について、沖縄県農林水産部部長と石垣市教育委員会の教育長との

間に次の事項が了解[70]された。

一．別紙図面朱線内については、現状変更はさけ、やむをえない場合は盛土をなすこと。

二．当該事業の実施に当たって、市教育委員会担当職員の立会のうえで行なうこと。

しかし、この協議内容が遵守されず、遺憾ながら重機による岩石や樹木等の除去作業で薄い包含層は破壊されてしまった。いったん破壊され失われた埋蔵文化財は再現することはできない。今後の宮良川圃場整備事業などにおける埋蔵文化財に対する保護行政のあり方が問われる。

また、一九七七年は、大城（ウフスク）村の西側（フルスト原遺跡の東側崖下）の排水溝建設に際して、県教育庁文化課による緊急発掘調査が行なわれた。調査の結果、石組遺構、礎石遺構などが検出された。石製品類（磨石・敲石・石錘・玉）、外耳土器（黒色土器）、赤瓦、外来陶磁器（青磁・白磁・南蛮陶器・染付・三彩の水注等）、中国古銭、鉄製品、（斧・手斧・矛・種子ハサミ・ヘラ・鎌・刀子等）、青銅製の煙管、円形銅板製品、陶製の煙管、骨製品（尖頭器）一六点、貝製品は貝錘のタカラガイ製品（ハナマルユキ・ハナビダカラ・ホシダカラ・ヤクシマダカラ・カイモンダカラ・フシダカキイロダカラ）や二枚貝有孔製品（ヒメジャコ・リュウキュウサルボウ・シラナミ・リュウキュウシラトリ）、ホラガイ匙状製品、タカラガイ有孔製品（ムナクモダカラ）などが出土した[71]。

一九八三年にも、石垣市教育委員会の協力を得て県教育庁文化課により、排水管工事に係わる緊急発掘調査が行われた。調査の結果、地元の土器（鉢形土器・壷形土器・碗形土器）、須恵器（徳之島のカムィヤキ系陶器）一点、中国製の南蛮陶器、沖縄製陶器（壷・甕・火舎・香炉・擂鉢・皿・急須・碗）、中国製の青磁（細い蓮弁文・蓮弁くずれで線彫りに変わったもの・雷文帯のもの・細線を一周するもの・内面見込部には菊花文の印花文のスタンプや動物を描いたもの・吉祥文字の刻印あるもの）、白磁、染付、石器（石製品六点・小型の有孔石製品三点・石斧未製品二点・局部磨製石斧一点・半磨製石斧二点・磨石二点・砥石三点・たたき石三点・凹石二点・他不明一二点の合計三六点）、貝製品のイモガイ科のアンボンクロザメを素材にし扁平で全面を円板状に研磨した有孔製品一点、骨製品三点（有茎の尖頭状製品）、有孔製土製品、キセルの雁首、ガラス製丸玉二点、勾玉二点、鉄製品（釘・小型ナイフ・包丁・板状の鉄片・突起状の鉄片）、鉄滓、青銅製品（カンザシ・キセル）、銭貨「皇宋通宝」（一〇三八年初鋳）一枚などが出土した[72]。

20．フルスト原遺跡[73]（大浜フルスト原貝塚[74]）

大浜集落の北側、南北に走る標高約二三メートルの琉球石灰岩海岸段丘の一帯に形成される。本遺跡には北側の絶壁を天然の障壁に利用しながら断崖上に沿って野面積みの囲い石垣を張りめぐらした数基の石積遺構がある。地元の古老の話では、この数基の石積遺構のことを「ブスヌヤー（武士の家）」とか、また一帯を「ブスヌヤマ（武士の山[75]）」と呼び、破壊前には高さ二〜三メートル以上の石垣があったとのことだが、

今は所々に根石のようなものが残っている。

本遺跡内には、フルスト村、元大石御嶽などに加えて石積遺構内に円形や方形等の積石墓やテーブルサンゴを逆さにかぶせた覆石墓などの古墓群と、また、東西二か所に鍾乳洞などがある。段丘の中腹には岩陰洞穴が多く、そのほとんどが外葬墓や住居として利用されたと見られ、その一帯から数多くの土器、中国製の白磁、青磁、褐釉陶器や類須恵器（徳之島のカムィヤキ系陶器）などが採集された。崖下にはウラバルカーラが流れ、その砂丘の一角には発掘で確認された「大城村」がある。また、南の海岸一帯を「船着」と呼んでいる。湾内には大浜の海垣がある。戦時中、この遺跡は日本軍が基地建設に利用したため石垣のほとんどが破壊された。

また戦後、バラス採石によって丘陵の一部が削り取られ、破壊の危機に直面した。一九七三年六月一七日に石垣市文化財審議委員会を中心に八重山文化研究会、大浜老人クラブなどの協力を得て遺跡の範囲確認調査を行なった。その際に一・五メートル×三メートルのピットを設定して試掘調査を行なった。中国製の青磁、褐釉陶器、丸玉（一点）、鉄釘（一点）などが出土し、地山まで五〇センチメートルの層が確認された。[76]

また、八重山文化研究会（牧野清会長）をはじめ、沖縄県歴史教育者協議会八重山支部（仲山忠亨支部長）、沖縄県高等学校教職員組合八重山支部などの研究団体や一般市民で遺跡保存の要請を行なった結果、一九七六年一〇月に国指定に向けての調査が行なわれた。[77]調査の結果は、南島の島々や中国との密貿易（私貿易）の解明、中・近世期の集落構造、墓制、祭祀形態を知る貴重な手がかりを有する遺跡として、一九七八年三月三日、国の「史跡」[78]に指定を受けた。

以下は、『フルスト原遺跡』（石垣市教育委員会・一九七七年）からの引用である。

〔フルスト原遺跡の試掘調査〕

一九七三年六月一七日、既に採石によってえぐり取られた部分に遺物が露出していて、風雨などによる遺物の流失が目立ち、遺跡の自然崩壊が進行していた。早速、遺物の資料収集のために、遺物の露出している琉球石灰岩海岸段丘上に一・五×三メートルのピットを設定し試掘調査を行なった。この際にたくさんの中国製の青磁、白磁、褐釉陶器（方言でスビガミ＝南蛮陶器）、地元の土器や丸玉（ガラス製玉）、鉄釘などが出土した。出土した遺物は市立博物館の施設を提供してもらい、水洗いをし一応博物館にて保管することにした。[79]

（1）層序

層序は二層からなっている。第Ⅰ層は現代の陶磁器や戦時中の遺品等が混入する攪乱層でほぼ二〇センチメートルの厚さを示していた。第Ⅱ層は黒色土層で遺物包含層である。地表面下約五〇センチメートルの深さで基盤石灰岩の地山に達した。

（2）遺物

出土遺物には、人工遺物と自然遺物がある。人工遺物には地元の土器、中国製の青磁、白磁、褐釉陶器、丸玉（ガラス玉）、鉄釘などがあり、自然遺物には貝殻と獣骨（牛の臼歯）がある。

①　土器（図18の1～3、写真19のBの1～4）

今回の試掘調査で得た土器は全て小破片で、いずれも口縁部か胴部の破片で復元できるものはなく、器形全体を知ることはできない。大半の土器のほとんどが珊瑚石灰岩の粉末を多量に含み、小石粒を混入している。製作の手法は、巻き上げか輪積みで、轆轤の使用は認められないようである。土器の整形には櫛状工具を使用している。器形は鉢形土器と壷形土器である。

図18の1（写真19のBの1）は、外耳のついた土器片で胎土にサンゴの小粒子を多量に含んでいる。土器色は赤茶色を呈す。土器の表面に耳を横状に貼付してから、轆轤を使用せずに櫛状工具で整形している。同図の2（写真19のBの2）も外耳土器片で茶黒色を呈している。外耳の厚さは二センチメートル弱で、耳より上部は荒く整形されている。

図18の3は、土器の口縁部破片で胎土に小石粒や砂を含んでいる。焼成は普通で色調は橙褐色を呈している。口縁下に凹線が横に走っている。

②　中国製の貿易陶磁器

中国製の貿易陶磁器には、青磁、白磁、褐釉陶器などがある。

イ．青磁（図18の4～8、写真19のAの1～4）

第Ⅰ層の地表面から基盤石灰岩の地山直上まで出土し、その量は比較的多い。完形又は全形を窺えるものはなく、すべて口縁部、底部などの破片である。青磁の大部分は碗であり、盤と思われるのが一例ある。

図18の7（写真19のAの3）は、青磁の盤である。胎土は灰白色を呈しガラス質である。釉色は輝きのある暗緑色である。底部は左回転ヘラ削りである。同図の5は青磁の碗の口縁部破片で胎土は白色でガラス質である。釉色は淡緑色で非常に薄い。同図の4も青磁の碗で口縁部破片である。胎土は灰色を呈し細かな気泡がある。釉色は淡青緑色で外面に簡単なヘラ削り蓮弁文様がつけられている。

図18の6・8（写真19のAの2・4）は青磁の碗の底部破片である。同図の6（写真19のAの4）は胎土が灰色でややコンクリート状である。釉色は淡青緑色で透明性があり気泡が多い。底部の見込にはスタンプで梵字がある。同図の8（写真19のAの2）は胎土が灰色を呈し、

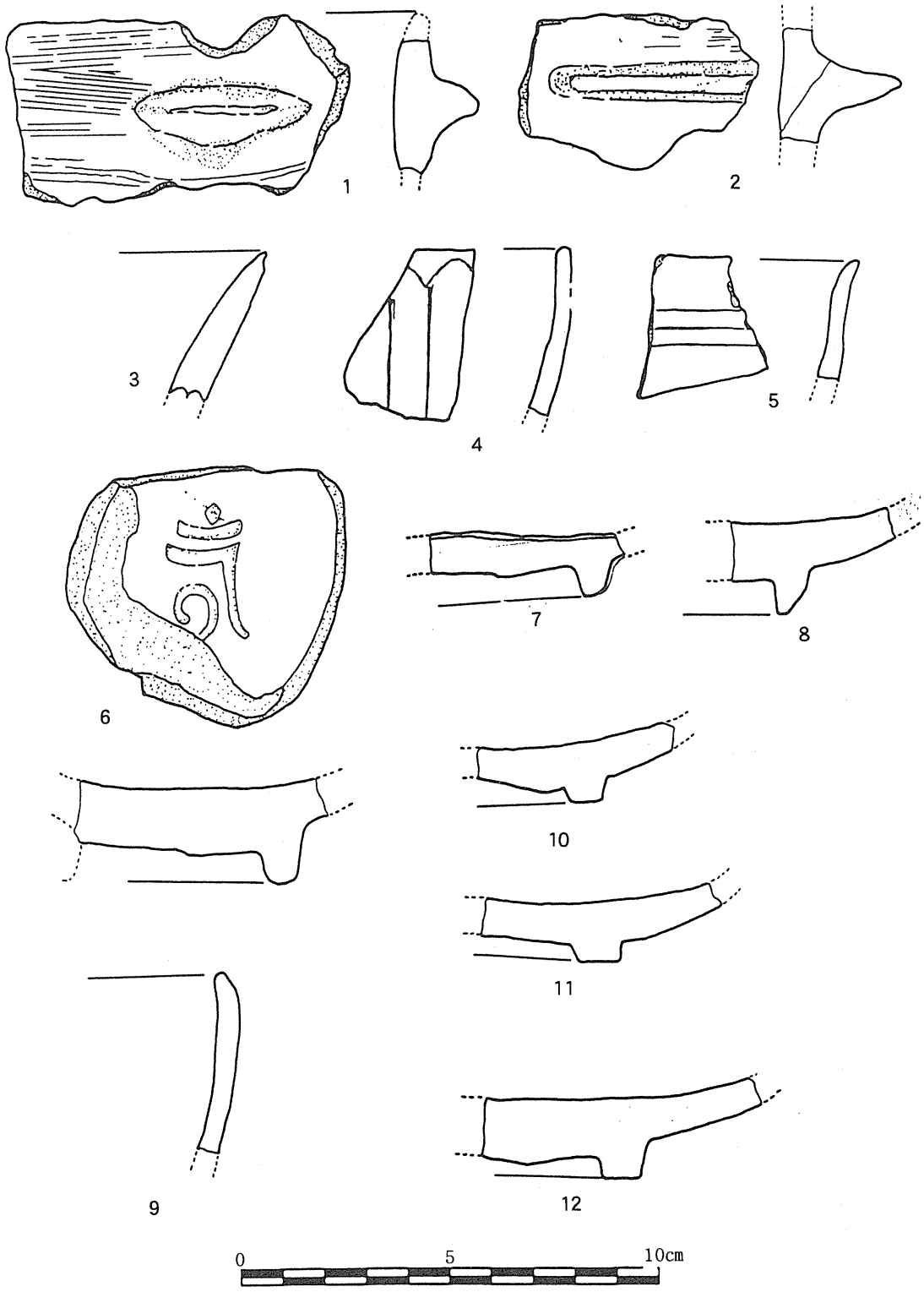


図18　フルスト原遺跡出土の土器、中国製の青磁・白磁
（石垣市教育委員会『フルスト原遺跡』1977年、注73より）

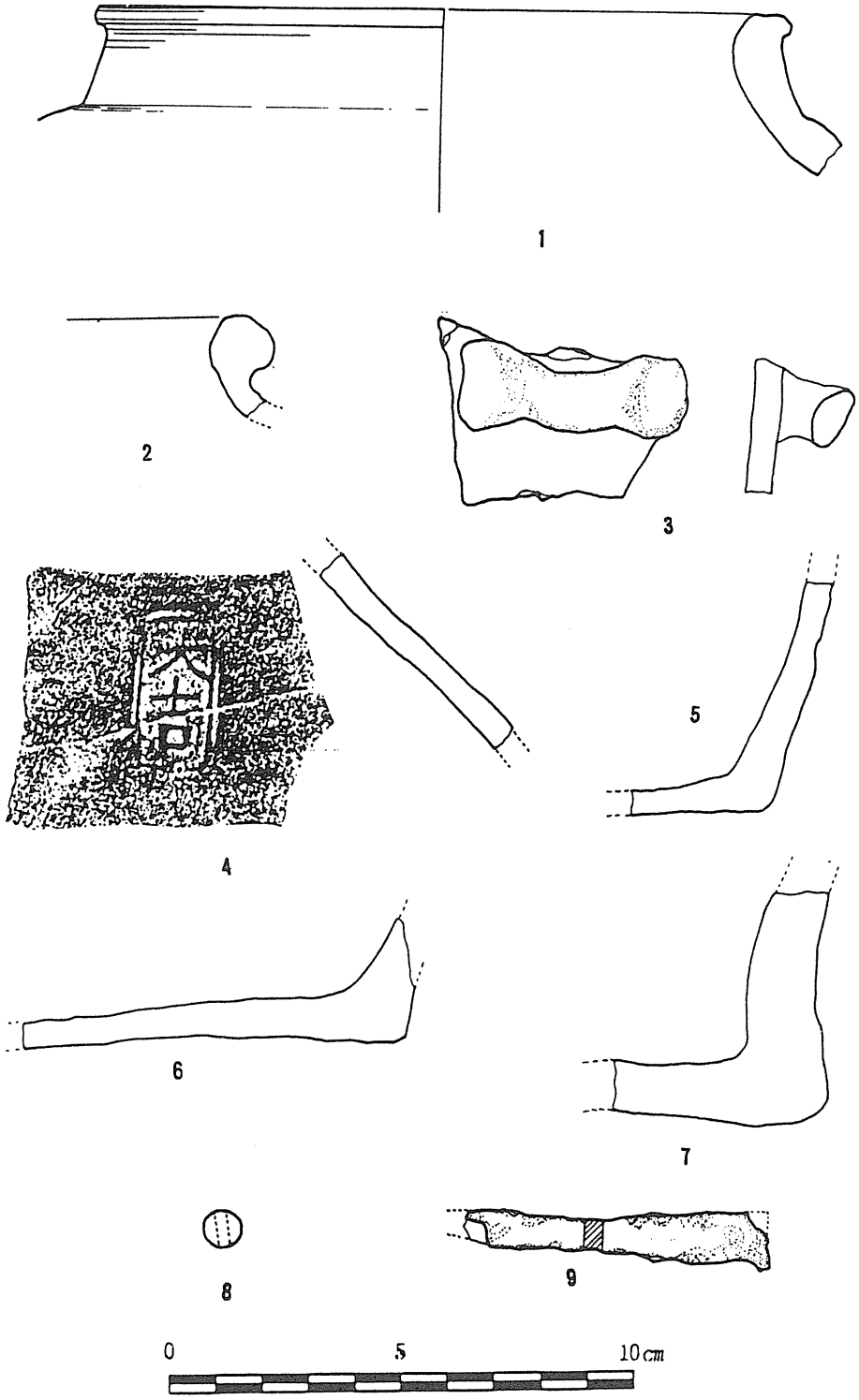


図19　フルスト原遺跡出土の中国製の褐釉陶器（口縁・胴部・底部）と丸玉、鉄釘
（石垣市教育委員会『フルスト原遺跡』1977年、注73より）

徴粒砂を混入している。釉色は緑青色の湧いた感があり、底部や見込も無釉である。生掛けと思われる。

ロ．白磁（図18の9～12、写真19のDの1～4）

白磁の碗とみられる口縁部片一点、底部片三点が出土した。

図18の10～12（写真19のDの2～4）は白磁碗の底部破片である。同図の10（写真19のDの2）の底部破片は胎土が白色でわずかに灰色味を帯びている。底部は左回転ヘラ削りで仕上げられている。同図12（写真19のDの4）の胎土は同図の10に類似する。同図の11（写真19のDの3）は胎土黄味を帯びた白色でやや気泡が多い。釉色はやや黄味のある淡灰青色で不透明である。高台の削りは荒く、けば立ちが目立つ。同図の9（写真19のDの1）は白磁の口縁部破片で胎土白地、焼成良好である。釉色は灰白色で透明、貫入が大きく入る。

ハ．褐釉陶器（図19の1～7、写真19のCの1～4・写真19のEの1・写真19のFの1～3）

褐釉陶器のほとんどが大型の甕や中・小型の壺などである。口縁や胴部、底部などの破片が比較的に多量に出土した。

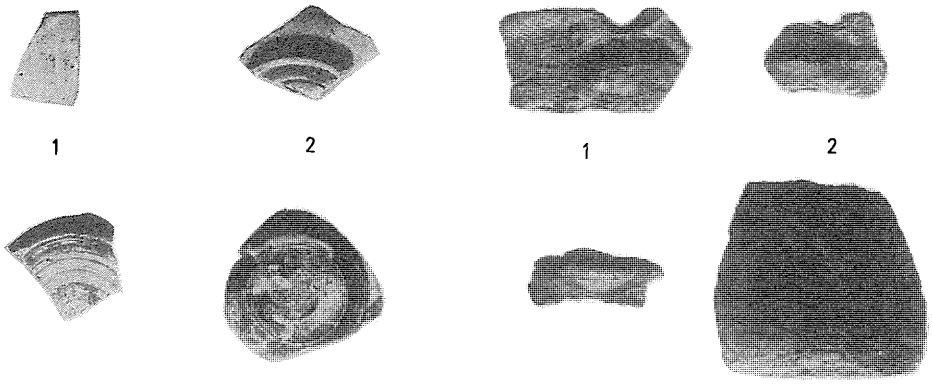
図19の1・2（写真19のCの1・2）は褐釉陶器の口縁部破片である。同図の1（写真19のCの1）は玉縁口縁を有するもので胎土に小石を多量に含み褐色を呈している。口縁部より下の外面が施釉され茶褐色でやや光沢がある。口縁上端に重ね跡がある。口径一四・二センチメートル。同図の2（写真19のCの2）は小石粒を含む精土を用い、ネズミ色を呈している。焼成は良好で釉調が暗灰褐色を呈し、鉄釉で鈍い光沢がある。

図19の5～7（写真19のEの1・写真19のFの1～3）は褐釉陶器の底部破片である。同図の6（写真19のEの1）の底径は一四．六センチメートルで、胎土に小石粒を含む精土を用い、内面は赤褐色を呈しているが外面はネズミ色である。同図の5の底径は一四・六センチメートルで、輪積か、もしくは巻き上げ法により成形し、その後轆轤で仕上げている。同図の7は胎土に小石を含み褐色を呈す。釉色は茶黒色で鉄釉、半透明で貫入がある。底部は凹状で灰色がかっている。

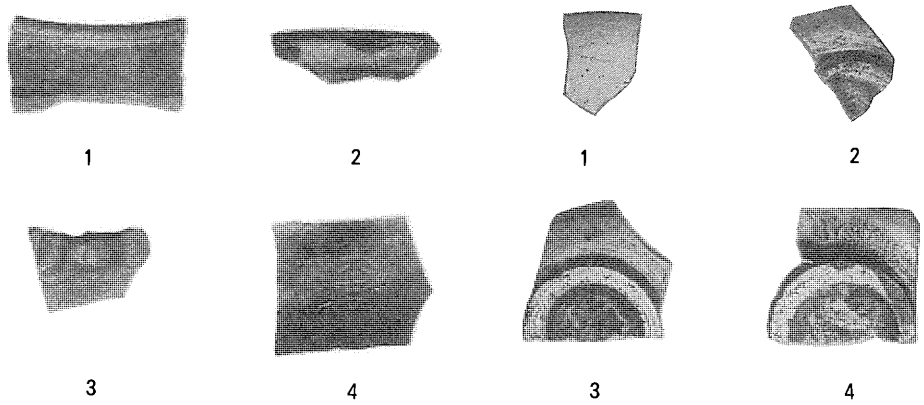
図19の3（写真19のCの3）は耳をもつ褐釉陶器片で胎土に精土を用い赤褐色を呈している。釉調は鉄釉で白い徴斑のあるチョコレート色である。内面は素地でネズミ色を呈している。

図19の4（写真19のCの4）は刻印を有する褐釉陶器の胴部片で、肩部に「大吉」の陽刻スタンプがある。胎土に小石を多く含み、芯部まで赤茶色に焼き上げる酸化炎焼成である。釉色は茶黒色、不透明で灰をかぶっている。この「大吉」陽刻スタンプの資料は、平得宇部御

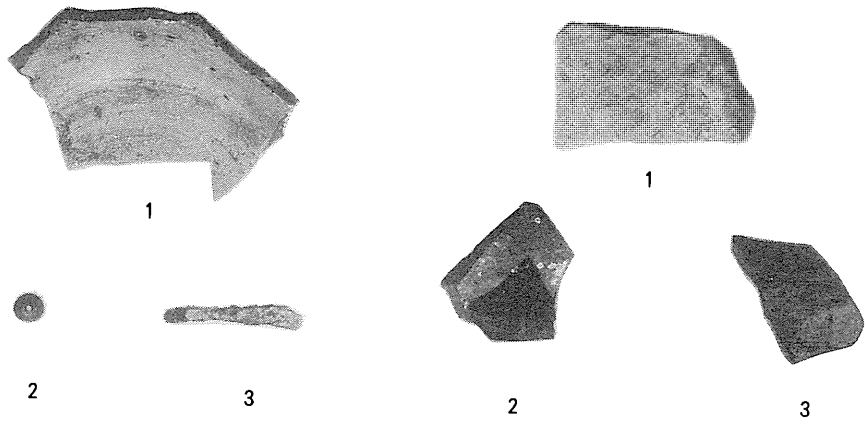
写真19　フルスト原遺跡出土の土器、中国製の青磁・白磁・褐釉陶器と丸玉、鉄釘



A　フルスト原遺跡出土の青磁　　B　フルスト原遺跡出土の土器



C　フルスト原遺跡出土の褐釉陶器（口縁・肩部）　　D　フルスト原遺跡出土の白磁



E　フルスト原遺跡出土の褐釉陶器（底部）と丸玉、鉄釘　　F　フルスト原遺跡出土の褐釉陶器（底部）

（石垣市教育委員会『フルスト原遺跡』1977年、注73より）

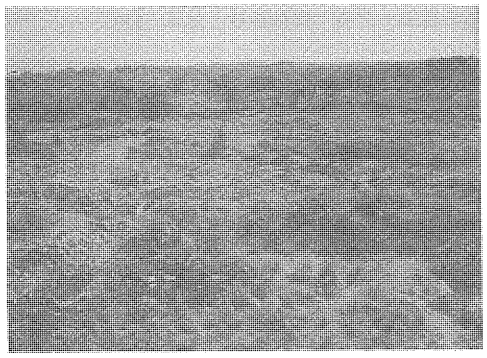
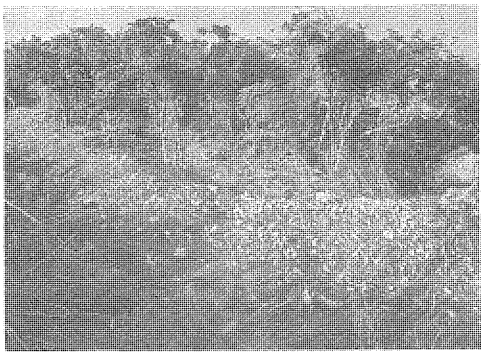
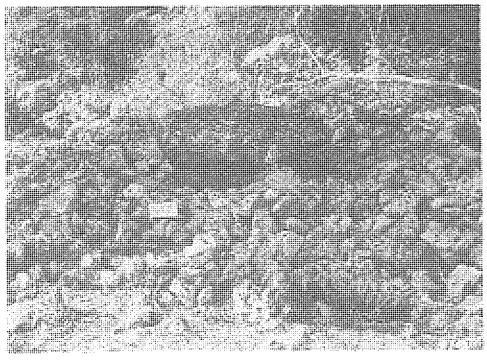
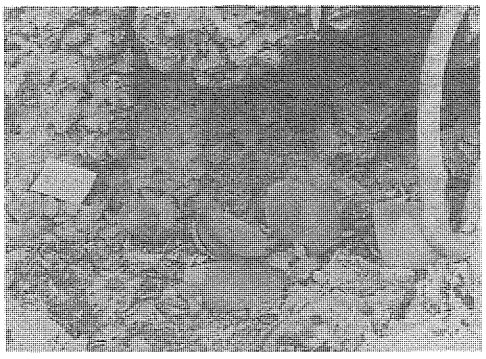



写真20　フルスト原遺跡内にある野面積み石垣屋敷遺構（方言では「武士の家」・「武士の山」）

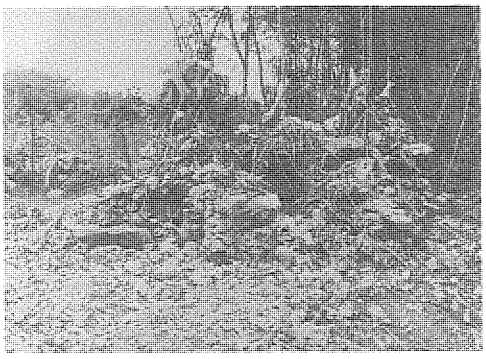
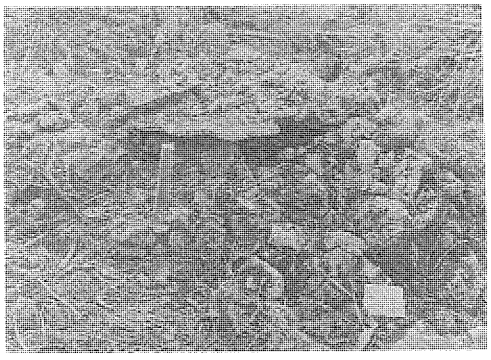
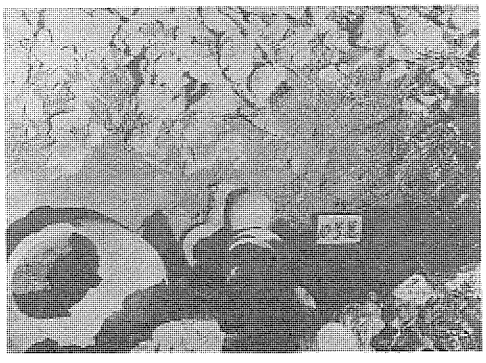




写真21　フルスト原遺跡内にある古墓群
（石垣市教育委員会『フルスト原遺跡』1977年、注73より）

嶽遺跡や平得仲本村遺跡からも報告されている。この資料は中国との密（私）貿易を解明していくための貴重な資料である。

③　丸玉（図19の8、写真19のEの2）

丸玉は直径八ミリメートル、厚さ三ミリメートル、口径二・五ミリメートルのガラス玉である。第Ⅱ層の地表下五〇センチメートルのところから出土し、色は明るい青色で不透明である。

④　鉄釘（図19の9、写真19のEの3）

この鉄器は角鉄釘であり錆化がすすんでいる。先の方が破損し長さは測れないが、幅〇・七センチメートルである。第Ⅱ層の黒色土層の四〇センチメートルの中より出土した。

むすび

以上、人工遺物についての概要を説明した。今回の試掘調査は半日のみの手弁当の調査で、時間と経費に大きな制約があり、試掘区域も一・五×三メートルの小範囲に限られた。八重山の歴史は乾隆三六年（一七七一年）の大津波で文献資料が紛失したこともあって、一六世紀以前の歴史はなかなか知りがたい状況にある。今後、原史・古代の八重山の歴史解明のため、規模の大きさで他に類例のないフルスト原遺跡を破壊から守り、国の文化財として指定し、総合的な学術調査を実施し、史跡公園として保護していきたいものである。

なお、出土遺物に関しては関口廣次氏のご教示を得た。末尾ながら厚く感謝を申し上げる次第である。

21．崎原御嶽遺跡[80]

大浜集落の東、標高五メートル前後の琉球石灰岩平地上の崎原御嶽を中心にして本遺跡は形成されている。一帯は古記録に記載されている崎原村であり、『八重山島由来記』には、兄の「ひるまくい」と弟「幸地玉金」の二人の兄弟が八重山で初めて鉄製の農具を薩摩の坊津（現在鹿児島県坊津町）から導入したと記されている[81]。この御嶽の境内からは鉄滓、石炭、中国製の青磁、染付、褐釉陶器、明の銭貨「洪武通寶」（一三六八年初鋳）一枚、土器などが採集されている。前方の海岸一帯の浜をガヤシキ浜と呼び、湾内には「海垣」がある。

23．南大浜村遺跡

大浜集落の西南、海岸寄りの南大浜原（ハイホーマバル）という標高五～八メートルの琉球石灰岩平地上に立地している。この遺跡は近世の集落「南大浜村」の跡で、土器や荒焼や壺屋系の陶器、日本の陶器などが採集される。現在でも屋敷の石垣の一部が残っている。

四．宮良村・白保村の発祥及び東海岸の村々に関わる遺跡

宮良村や白保村については『八重山島由来記』に「昔西かわら東かわらとて兄弟の者居けるか始は水嵩中頃はせつこま後はふたらまと云所に

移り家を構居けるに兄は宮良弟は白保と云所に差越し家を作居けり（略）」と記載され、西かわら（インナーラ）、東かわら（アンナーラ）の兄弟により宮良村や白保村が創建されたといわれている。[82] 宮良村の最初は水岳の山の裾野一帯、そしてセツコマ、フタラマ、フダと農耕地を求めて次々と移動し、その後マコースク、チビスクへ移動して、最後に現在地付近のクバントゥ、ナカバンナー、下ヌ家敷へと移動したといわれている。[83] 海岸低地砂丘の宮良川河口のハマンガー一帯（ハマンガー貝塚）や轟川河口の轟川川尻貝塚、嘉良嶽貝塚群一帯の無土器時代の人々が水岳付近に移住したものと思われる。水岳一帯にはスク時代のヤドゥムレー遺跡やダンダ山遺跡、そしてマシクナー（白保ではマニシキナ）遺物散布地、ウイズ遺跡などが点在している。[84]

24．ヤドゥムレー遺跡

水岳の西、轟川（トゥドゥルキカーラ）の上流には支流のウロン川があり、この一帯をヤドゥムレーと呼び、あたりの湿地帯は肥沃な水田地帯である。その一角の洪積台地のうえに独立したイシムリク（琉球石灰岩の岩山）が三ヵ所あり、その北側のイシムリクに本遺跡がある。類須恵器（徳之島のカムィヤキ系陶器）、中国製の白磁、青磁、褐釉陶器、地元の土器や敲石、牛の臼歯などが採集されている。『八重山島由来記』に登時する「ふたらま」という所の「フタ」とは、田んぼの意であることから、このヤドゥムレー遺跡（白保ではヤマレーと呼んでいる）やダンダ山遺跡などが伝承に登場する宮良と白保両村の発祥の地である（最初は水岳近くにいたと考えられている）セツコマなどを指している思われる。

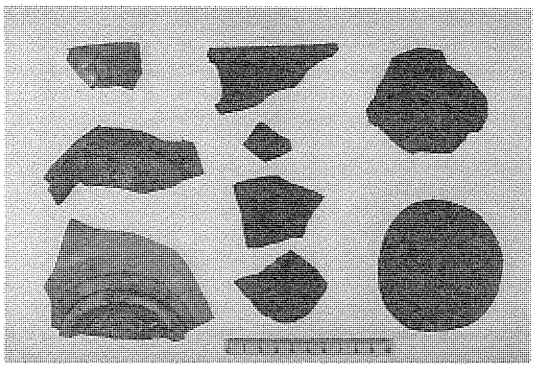


写真22　ヤドゥムレー遺跡採集の石器、類須恵器、土器、青磁、白磁

25．ダンダ山遺跡

ヤドゥムレー遺跡の南一〇〇メートルの場所に琉球石灰岩の岩山がある。この岩山がダンダ山で野面積みの石垣などがある。東にダンダ川が流れウロン川に合流している。この岩山の南側には包含層が露出して見え、食料残滓の貝殻や地元の土器、中国製の褐釉陶器などが採集される。

26．マシクナー遺物散布地[85]（白保ではマニシキナと呼んでいる。）

白保の北、轟川の上流の西側の支流をマニシキナ川と呼んでいる。この川の南側には川に沿って琉球石灰岩河岸段丘が連なっている。この河岸段丘の崖下一帯から局部磨製石斧一点と中国製の青磁、褐釉陶器などを数片採集した。

27．ウイズ遺跡

マシクナー遺物散布地の南側琉球石灰岩の河岸段丘の一角に立地して

いる。宮良牧中の東端で琉球石灰岩の崖に野面積みの石垣があり、単郭の居住空間からなる。ここら一帯をウイズと呼んでいる。そこから食料残滓の貝殻や地元の土器、中国製の褐釉陶器などの破片が採集される。東側の眼下には肥沃な水田があり、北方にヤドゥムレー遺跡、ダンダ山遺跡が見える。

28．チビスク遺跡

宮良川の川尻から東にかけて琉球石灰岩の海岸段丘が連なっている。その下層には新生代古第三紀始新世石灰岩（宮良層）が露出している。その西端をチビスクと呼んでいる。チビスクには高さ一メートル、幅五〇センチメートルの野面積みの石垣があった。地元出身の玉津博克氏によって石斧やシャコガイ製貝斧、土器、中国製の玉縁白磁碗、青磁、褐釉陶器などが採集されている。[86] 石斧、貝斧、中国製の玉縁白磁から推測してスク時代でも古い時期の遺跡と思われる。この遺跡も遺憾ながらバラス採取などによって完全に消滅した。

29．宮良クバントゥ遺跡[87]（宮良第一遺跡[88]）

宮良集落の西の入口に小浜御嶽があり、その御嶽の西側の標高一五〜二〇メートルの琉球石灰岩の海岸段丘の一角に位置する。地名を小波本と云い、その一帯から、中国製の白磁、青磁、褐釉陶器や類須恵器、地元の土器、小型石器、牛骨製のピン、ヘラ、大和製銅鏡、陶製キセルなどが採集されている。一九五〇年頃、琉球石灰岩の海岸段丘の南端が採石によりえぐりとられて中心部が破壊されている。この崖下の南側の砂丘一帯をアラガーと呼び、その一帯にも中国製の貿易陶磁器の白磁、青磁、褐釉陶器などが散乱している。玉津博克氏によってシャコガイ製貝斧も表採されている。

30．宮良下ヌ家敷（カク）遺跡[89]（宮良第四遺跡[90]）

宮良集落の南に外本御嶽（通称ナカヌオン）があり、そこを中心に標高二〜三メートルの琉球石灰岩平地上に位置している。一九九一年二月、造成工事で遺跡の一部が破壊された。[91]『八重山島年来記』によると、乾隆三六年（一七七一年）の大津波で大被害を被ったことから小浜村から三二〇人が移住してきた。[92] 当初は、元の宮良村の住民とはうまくいかなかったが、しばらくして津波当時の村跡に戻り、住むようになった。この一帯を宮良村の人々は「下ヌ家敷」と呼んでいる。[93] ここには、村の降り井戸のアダドゥナー（一九八〇年一〇月三一日、石垣市の「史跡[94]」に指定）や屋敷の石垣が残っている。その付近から類須恵器（徳之島のカムィヤキ系陶器）が数片、多くの中国製の白磁、青磁、染付、褐釉陶器や八重山焼（荒焼）などが採集されている。スク時代から明治時代の初頭にかけての集落跡である。

32．白保遺跡[95]（白保貝塚[96]）

多原御嶽の北側の採砂場を中心にして、西の三叉路付近の海岸低地の砂丘地（カニク）上に形成されている遺跡である。採砂によって大部分

が凹地になり破壊されている。白保村の東海岸の新期砂丘中の埋没腐植土の測定年代は、資料採集をした古川博恭琉大教授、測定をした木越邦彦学習院大学教授によると一千三百三〇±八五年BPである。[97] 白保遺跡人は、約一千三百年前頃の新期砂丘の形成後に定住し、集落を形成したものと思われる。すでに中心部は砂採取で破壊されているが、凹地になっている個所から多くの土器と数片の貿易陶磁器（中国製の白磁・青磁・褐釉陶器）、類須恵器（徳之島のカムィヤキ系陶器）片などが採集された。他の集落遺跡と異なり、近世の遺物はおろか、染付なども採集されないことから、一四世紀頃から一五世紀後半にかけての短期間に形成され消滅したスク時代の集落遺跡だと思われる。

33．真謝井戸周辺遺跡

真謝井戸付近から、真謝御嶽にかけての琉球石灰岩平地に形成されている。現在の集落内に立地しているため、採集される遺物は小破片である。数片の土器片、中国製の貿易陶磁器（青磁・染付・褐釉陶器）などの破片が採集された。また、日本陶器（有田系）、沖縄産陶器、地元産の荒焼きなどが比較的多く採集されている。青磁、染付などからすると、一六世紀前半から近世、そして現在に至るまでの集落遺跡である。

36．カラ岳遺跡

カラ岳頂上から貿易陶磁器である中国製の青磁、白磁、褐釉陶器などの破片が発見されている。一五世紀頃から一六世紀頃の遠見台跡と思われる。北は平久保半島の東海岸の海、南に裾礁（リーフ）の口が一望できる。

38．ペーフ山遺跡（桃里恩田遺跡[98]）

石垣島の東海岸、ペーフ山という新生代の古第三紀石灰岩の標高四五から五〇メートル前後の小高い丘陵に位置している。南側の裾野には、肥沃な水田があり、一帯の水田をウンダターと呼んでいる。ペーフ山からは東側の太平洋が一望出来る。一九七四年五月、この一帯は採石が行われ、三分一が破壊された。[99]

一九八一年に石垣市教育委員会の発掘調査によって極めて良好な包含層が確認され、中国製の貿易陶磁器の白磁、青磁、黒褐釉陶器と内面に青海波文押紋、内面に格子目叩紋をもつ須恵器などが出土した。また、鉄製品（鉄くぎ・鉄片）、鉄滓、土器（外耳付鍋形土器・壷形土器）、石器（砥石）、骨器（有茎の尖頭器）、中国の北宋銭貨「祥符通寶」（一〇〇九年初鋳）などが出土した。[100] また、炭化米、炭化麦なども検出されており、岩山一帯に住みながら稲作が行われたことが窺われる。一九八九年一一月二四日に「桃里恩田遺跡」として県の史跡[101]に指定された。遺跡の名称については地元の人々がペーフ山と呼び親しんでいるので、その名称で遺跡を呼びたい。ペーフ山には「屏風山の蛇（ペーブヤマのハブ）」の民間伝承が[102]残っている。

39．ブーマンゲー（マッケー）山遺跡（マンゲー山遺跡群）[103]

マンゲー山は、大・中・小マンゲーの三つの独立した岩山であり、大のことをブーということから、この大マンゲーをブーマンゲーと呼んでいる。このブーマンゲーの岩山は新生代の古第三紀の前期（今から五千五百万～六千五百年前）のもので海底に石灰質の殻を持つ生物や石灰岩が堆積した地層であり、これを宮良層群と呼んでいる。マンゲー山には、「ペラテスペラ」の最も典型的な化石が保存され、また「方解石」を有していることから、石垣島の地質研究において重要（中生代との関係、新生代第三紀以後との関係、土地の隆起、沈降、古生物等）であるので石垣市はブーマンゲー山を一九七二年五月八日に天然記念物に指定した。[104]

また、一帯から中国製の青磁や褐釉陶器などが採集された。この岩山の「マンゲーの岩窟」には、古い人骨や馬の鞍などもあったといわれることから、大和墓、又は八島墓、或は平家墓[105]と言われようになった。

40．中マンゲー遺跡[106]（伊野田遺跡[107]）

中マンゲーをキタスクマンゲーと呼び、この岩山の東側裾野の洪積台地から多数の中国製の貿易陶磁器（白磁・青磁・褐釉陶器）などに混じって、筆者が土製鞴の羽口、及び陶器製の坩堝を各一点ずつ採集した。[108]また数片の染付（青花）が採集されることから、一五〇〇年の「オヤケアカハチ・ホンカワラの乱」の年代に符合し、集落はなんらかの関わりで滅亡したと思われる。この遺跡も遺憾ながら大規模な土地改良事業などで破壊されてしまった。なお、中マンゲーの岩山の頂上から海が一望でき、かつてここは遠見台だったと思われる。この一帯には「ヌバレー村の人魚伝説」[109]の民間伝承などが残っているがこの中マンゲー遺跡との関係は不明である。

五．平久保半島のスク時代の遺跡

琉球王国時代には、平久保半島に半嵩村、船越村、伊原間村（ウチィヌ村）、久志真村、花城村、平久保村、安良村などがあった。[110]そのなかで花城村遺跡や元平久保村遺跡からはスク時代の中国製の貿易陶磁器などが発見される。半嵩村、元伊原間村（ウチィヌ村）は大規模な土地改良事業で地形が大変貌しているため出土遺物などは不明である。

また、平久保村は創立年代は不明であるが、元村は平野集落の後方、琉球石灰岩の海岸段丘の崖に沿って丘陵上に形成されている。群雄割拠時代の豪族平久保加那按司が住んでいた村だと言われている。『慶長検地記録』（一六一〇年）の六間切、二島、五八ヵ村には川平間切に「きやか村」[111]と、記されている。一六二九年の三間切に変わって「平久保村」となっている。また、一七〇二年、「キヤナ」（喜屋名）という所に移ったが、マラリアが猛烈な所であったために、さらに「プルカヌー」（堀川野）に移転した。

一方、花城村は一七一三年に新村として創立された。しかし、一七二四年には花城村が平久保村を吸収合併したので元平久保村は廃村になり花城村は親村の平久保村の名を名乗った。乾隆三六年の大津波当時（一七七一年）は七二五人居たが溺死者二五人、さらに安良村に五一人が強

制移住させられた。また、一八七四年には久志真村をも吸収している。[112]

48. 嘉良遺跡（吉野遺跡）[113]

嘉良川（カーラカーラ）の河岸で琉球石灰岩の段丘上に立地している。頂上には石灰岩の岩盤を囲むように野面積み石垣が残っている。中国製の青磁、褐釉陶器や地元の土器などが採集される。

49. カーラマタ岩窟遺跡（ヤマト墓）[114][115]

嘉良川（「八重山島由来記」には「瓦川原」とある）の橋を渡って海岸よりの琉球石灰岩海岸段丘の岩陰を利用した外葬墓がある。この外装墓は墓口が開けられ、中には頭骨などの人骨と共に副葬品として中国製の褐釉陶器や染付、木棺に使われたと思われる板切れがあった。染付などは一六世紀頃のものであった。

笹森儀助の『南島探験』によると「（略）伊原間村出起シ、西海岸ヲ通リ、三里ニシテ平久保村地内、字河原浜至ル。大和墓、八島墓共云フ（略）」と、記されている。[116]

50. 花城村遺跡（伝花城村跡遺跡）[117]

平久保集落内から平久保小学校、徳底御嶽（トクスクオン・別名ムトムラオン）にかけて琉球石灰岩平地に立地する。集落内から地元産の土器などに混じって中国製の青磁、褐釉陶器、染付などが採集された。

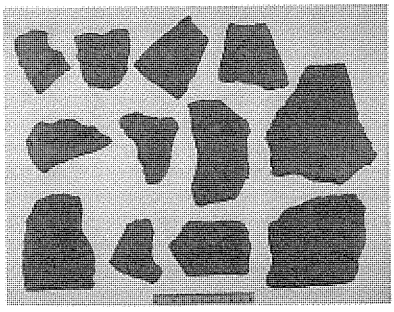
52. 平久保御嶽遺跡

平久保小学校から北側内陸部へ約一キロメートル行くと村の御嶽（オン）である平久保御嶽が小高い丘陵上に立地している。この丘陵は南西側が緩やかな傾斜になっていて御嶽の西側丘陵では遺物がかなり採集できる。土器、中国製の貿易陶磁器の白磁、青磁、褐釉陶器や染付などが採集されている。

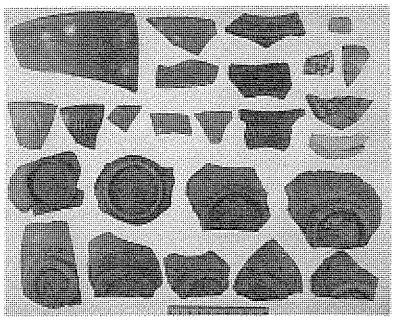
53. 元平久保村遺跡（平野後方第二遺跡）[118]

現在の平野集落の後方にあり、琉球石灰岩海岸段丘上に形成されている。一五世紀後半頃の平久保半島を統治していた豪族の平久保加那按司が住んでいたところだと思われる。[119] 筆者は一帯から類須恵器（徳之島のカムィヤキ系陶器）と玉縁白磁碗を一片ずつ採集した。また中国製の貿易陶磁器である白磁、青磁、褐釉陶器と染付が数点採集された。さらに、

写真23　元平久保村遺跡採集の土器、中国製陶磁器



A　土　器



B　白磁、青磁、染付、褐釉陶器

一帯から緑色片岩を素材にして局部磨製・半磨製石斧[120]が多数採集されている。先史時代（第一期）の赤色土器時代の遺跡[121]でもある。

六．西海岸地区のスク時代の遺跡

58．皆野宿岡遺跡

俗称オッパイヤマとして地域の人々に親しまれている円錐形の岡を皆野宿岡と呼んでいる。そこからは、白磁を一片だけ採集した。また、東側付近の丘陵のパイン畑からは中国製の青磁や褐釉陶器などを数片採集した。今では既に土地改良工事などで全壊している。この一帯はガバネーアジの居住地であったともいわれている。

ガバネーアジにまつわる伝承には、ウラタバル（浦田原）の女傑ブナジルと農作勝負（注：ムヌツクルシューブ。ガバネーアジが粟を作り、ブナジルは米を作った）を行ったことや[122]ここでガバネーアジが石底岡の武士と弓引き競争を行ったことや、また、名蔵湾を航行する船を一矢で射止めたという伝承が残されている。

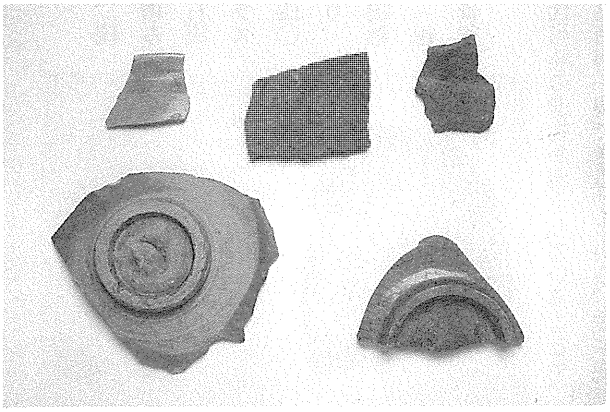


写真24　皆野宿岡遺跡採集の中国製の白磁、青磁、褐釉陶器

59．ミンナ岡遺跡

皆野宿岡の南側に小高い岩岡がある。この岡には野面積の石垣があり火番岡ともいわれている。中国製の青磁、褐釉陶器、敲石などを採集した。

60．名蔵シタダル海底遺跡（名蔵シタダル遺跡[123]・クードー遺跡[124]）

名蔵湾の南東側一帯に位置し、シタダル浜を中心にして、クマダ浜からクードー浜にかけての海岸や海底に広がる遺跡である。沈没船の舶載品と思われる多数の中国製の貿易陶磁器（舶載陶磁器）が出土している。大部分は、青磁の碗や白磁の小皿、褐釉陶器（南蛮陶器＝スビガミ）などの破片である。また、青磁の小皿、大皿（盤）、鉢、香炉、白磁の碗、染付（青花）、ほかに中国の銭貨「開元通寶」（六二一年初鋳）、「洪武通寶」（一三六八年初鋳）なども出土している。年代は、一五世紀の後半から一六世紀の前半の頃である。

大正三年（一九一四年）五月一七日から大正五年五月までシタダル浜の付近で御木本真珠が小湾を築き真珠養殖を行っていた[125]。

61．クードー貝塚（クードー遺跡[126]）

琉球石灰岩海岸段丘の西先端に野面積みの石垣がある。そこから土器や中国製の貿易陶磁器（白磁・青磁・褐釉陶器）などの破片がアラスジ

ケマンガイ（二枚貝）を中心にした包含層の中から採集された。一九八一年頃に野呂水の塵捨て場が埋め立てられて、そこに石垣市の緑化推進事業の一貫としてクードー貝塚のあった石灰岩一帯にガジマルが植えられた。そのときに遺跡一帯にブルが入り遺跡の一部が破壊された。

63．浦田原遺跡

ペンサンカーラの橋の東側、琉球石灰岩段丘の先端部に野面積みの石垣があった。また、琉球石灰岩の岩陰一帯には黒褐色のアラスジケマンガイを主とする厚さ四〇センチメートルの包含層があり、地元の土器、中国製の青磁、褐釉陶器（スビガミ）、類須恵器（徳之島のカムィヤキ系陶器）、骨斧などが採集された。

この浦田原遺跡からスク時代当時の遺物が出土していることや、ここから海岸や広大な名蔵平野の水田が一望できることから、先に述べたように、皆野宿岡のガバネーアジとウラタバルの女傑ブナジルが農作勝負を行ったという伝承のある女傑ブナジル[127]の館址がこの浦田原遺跡ではないかと考えられる。

本遺跡は海岸線から離れて内陸部にあり、また、口碑伝承の残る数少ない重要な遺跡であったが残念ながら一九八八年頃の採石などで全壊した。

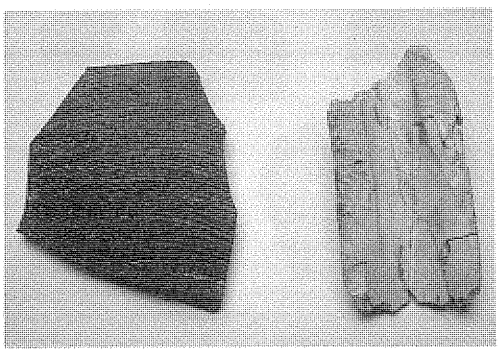


写真25　浦田原遺跡採集の須恵質土器と骨斧

64．名蔵村遺跡

名蔵の三つの御嶽[128]（名蔵御嶽・水瀬御嶽・白石御嶽）を中心に名蔵集落が形成されているが、集落跡や規模などは不明である。一六四七年『宮古八重山両島絵図帳』には那蔵村[129]とある。

68．シーラ原遺跡

シーラ原の洪積台地先端部に立地している。一見、赤色土器時代の遺跡ではないかと思われるが、そうではない。丘陵の先端部で海が一望で

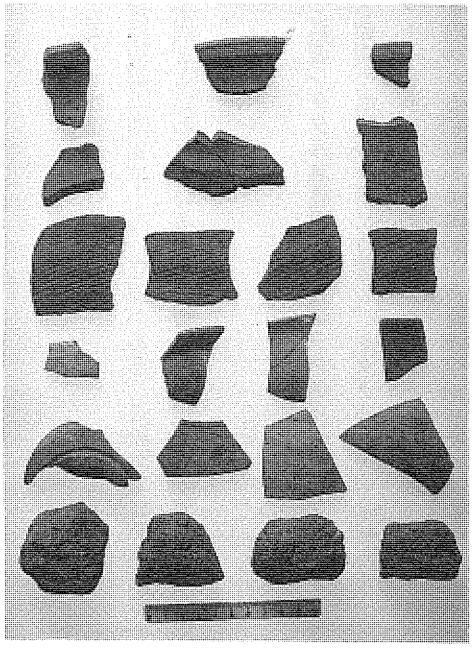


写真26　シーラ原遺跡採集の類須恵器、青磁、白釉磁、厚手の土器

きる。中国製の光沢のある青磁二～三片・白釉磁が数一〇片、類須恵器（徳之島のカムィヤキ系陶器）などが数一〇片、器形が不明だが分厚く石英粒などを混入した土器が採集された。これらのことから察してスク時代初期の一三世紀頃の祭祀遺跡だと思われる。

71．崎枝御嶽遺跡[130]

村のオタケ（崎枝御嶽）であるために遺跡の性格などは不明だが、御嶽境内から中国製の青磁、褐釉陶器や土器などが採集される。

72．崎枝カサザキィ遺跡[131]**（崎枝崎遺跡**[132]**）**

崎枝御嶽の北西二百メートルにある崎枝湾西側の琉球石灰岩海岸段丘の先端の岬がカサザキィである。この一帯には野面積み石垣があり、中国製の青磁、褐釉陶器や土器などが採集される。隣接して南側の砂丘には、無土器時代のサーカーラ河口貝塚があったが、一九九六年頃の砂採取などによって破壊された。西側には小川であるサーカーラが流れて崎枝湾に注いでいる。

七．北海岸地区のスク時代から近世の村建に関わる遺跡

石垣島の北海岸地区には、赤色土器時代、無土器時代、中国との私貿易で栄えたスク時代、そして琉球王国の支配に苦しんで近世に至るまでの様々な時代の遺跡がある。以下、スク時代から近世の村建てに関わる遺跡について略述[133]する。

73．川平貝塚（川平第一貝塚[134]**〈川平村獅子森貝塚〉、川平第二貝塚、川平第三貝塚）**

川平集落の郊外のお椀を伏せたような二つの岡は、俗称で乳岡または夫婦岡と呼ばれている。川平の人たちは集落から向って右を獅子岡、左を仲間岡と呼んでいる。川平貝塚はこの二つの岡を中心にして北側の半丈岡にかけての丘陵上に位置する。

この一帯は「仲間」と呼ばれており、一五世紀後半から一六世紀にかけて豪族の憲章姓元祖である仲間満慶山や嘉善姓大宗である永展らが住んでいた仲間村の村跡である。ここから、類須恵器（徳之島のカムィヤキ系陶器）、中国製の玉縁白磁が一片ずつ、白磁、青磁、染付、褐釉陶

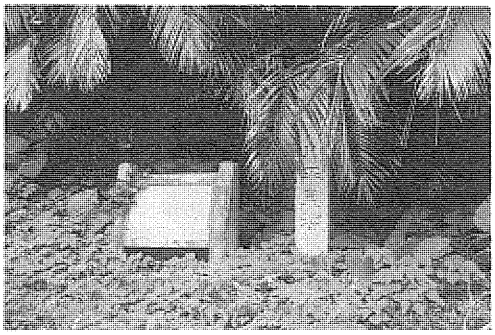


写真27　川平貝塚の近景

器や勾玉、石器（石斧・敲石・凹石）、土器などが採集された。遺跡の西側には村の御嶽である群星御嶽がある。

一九〇四（明治三七）年、この川平貝塚を沖縄考古学の先駆者鳥居龍蔵博士が発掘調査を行ない、「八重山の遺跡に就て」の論文の中で、「川平村字獅子森の遺跡」[135]と報告している。

一九七二年五月一五日に国の「史跡」[136]に指定された。

74．川平火番岡遺跡（スク時代から琉球王国時代）

川平獅子岡の北方、お椀を伏せたような小高い丘陵に位置する。この丘陵の頂上から南側斜面にかけては食料残滓の貝殻が散乱し、中国製の褐釉陶器、染付（明末から清初）や地元の荒焼、土器などが採集された。八重山では一六四四年に初めて烽火の制度が設けられたというが、この場所は烽火をあげたところである。[137]

75．底地深道遺跡

川平底地湾の海水浴場の手前にウラダカーラ（川）がある。この一帯を「ふかみち」と呼び、北側の琉球石灰岩の海岸段丘上や崖下に形成されている。中国製の青磁、褐釉陶器や地元の土器などが採集されている。

76．ザンドウ原洞穴遺跡[138]（ヤマト墓[139]）

ザンドウ原貝塚の海岸から石崎方面へ約二百メートル行くと、底地湾に面した琉球石灰岩の海岸段丘の崖下の岩陰を利用し、墓口を野面積みで塞いだ風葬墓があった。現在では墓口の野面積みの石垣は崩れ、墓の中にはパナリ焼の骨壷、数種類の褐釉陶器、染付などや木棺に使ったと思われる板片などが頭骨と共に散乱している。地元の人々は、この外葬墓を大和墓、または八島墓と呼んでいる。

77．ハコーザキィ遺跡[140]（仲筋キシパラ遺跡[141]・仲筋キシパラ遺物散布地[142]）

川平湾奥のブサマカーラの河口から東北には、琉球石灰岩の海岸段丘が約一キロメートル続くが、その先端のこんもりと茂った岬の岩山を「ハコーザキィ」と呼んでいる。その岩山と海岸の浜辺一帯から、中国製の白磁、青磁、褐釉陶器と類須恵器、地元の土器が採集された。海岸一帯の南側を俗称「キシパラ」という。中国との密貿易を行った港だったと思われる。五〇〇メートル後方の丘陵頂上には仲筋貝塚がある。

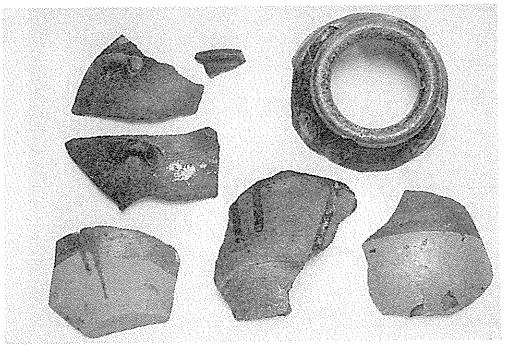


写真28　ザンドウ原洞穴遺跡採集の中国製の褐釉陶器

78．仲筋貝塚

吉原集落の入口、川平湾を望む標高四〇メートル前後の南から北へゆるやかに傾斜する丘陵上に位置する。オモト連峰の一角にブサマ山があ

り、そこからブサマカーラ（川）が流れて川平湾に注いでいる。この一帯から多くの中国製の白磁、青磁、褐釉陶器などと共に土器、鉄器（数点）が採集された。表土の数センチメートル下に埋もれている包含層の一部が耕作の際に、トラクターなどで掘り起こされる場合が多い。遺跡内には点々と貝層が見られる。破壊の危機にある遺跡である。

一九七九年一二月二六日から一月六日まで、筆者、陶磁研究家関口廣次氏、当時早稲田大学大学院生の谷川章雄氏、東洋陶磁研究者中沢富士雄氏、阿利直治氏（大学生）らで共同発掘調査を行なった。調査の結果、数多くの中国製の貿易陶磁器（白磁・青磁・褐釉陶器・数片の染付）のほか、土器、局部磨製石斧一点、叩石、磨石、凹石、勾玉、丸玉（青ガラス玉）、骨器（尖頭器）、銭貨「咸平元寶」（九九八年初鋳）、「元符通寶」（一〇九八年初鋳）、砂岩製の鞴羽口一点、砥石、刀子、釘、鉄滓、鉄片などが出土[143]した。一五世紀中葉から一五世紀後半代にかけての遺跡である。

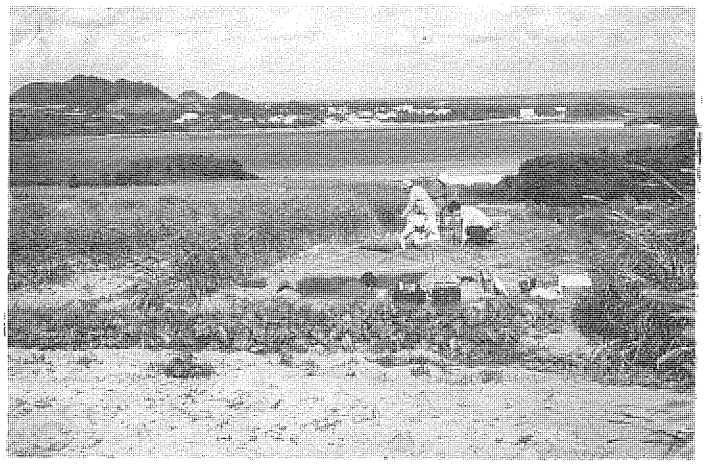


写真29　仲筋貝塚の発掘（1979年）

79．仲筋村遺跡[144]（伝仲筋村跡遺跡[145]）

現在の吉原集落の前方、川平集落の対岸に位置し、湾の水道口の南海岸より標高八～一〇メートル前後の琉球石灰岩上に位置する。この一帯を「仲筋」と呼び、井戸や屋敷跡の石垣が残っている。近世の壺屋陶器、日本陶器（有田系）、地元の荒焼などが採集される。東側にはジコー川が流れている。仲筋村には北海岸の貢納米の集積所があって、そこから琉球王国に向けて貢納米を積み出したと言われている。一九四四年残っていた人が川平村に移り廃村[146]となった。

80．元仲筋村遺跡[147]（仲筋遺跡[148]）

吉原小学校の東、天然記念物に県指定された根原御嶽の南を約三〇〇メートル行ったゆるやかな傾斜丘陵に本遺跡がある。『八重山島年来記』の一六二九年（崇禎二）の項の「ミやら間切」のなかに「中筋[149]」村の名前がある。また、『宮古八重山両島絵図帳[150]』にも記載されている。この一帯から中国製の貿易陶磁器などが採集されているが土地改良事業などで破壊された。かつてこの遺跡の前方には四方形の石積みの古墓群があった。筆者は墓口が開けられていた南側の一つの古墓から一六世記頃の中国製の緑釉水注を一点採集した[151]。また、当遺跡の北、海岸低地砂丘一帯

には無土器時代の仲筋ピューチィタ川河口貝塚や赤色土器時代のヒウツタ遺跡がある。

81．ヤマバレー村遺跡[152]（ヤマバレー第二遺跡[153]）

山原川の西方「ヤマバレー」という標高約四八メートルの琉球石灰岩海岸段丘の丘陵に位置している。古謡の「山原ユンタ[154]」にでてくる中世の集落跡である。この一帯から中国製の白磁、青磁、染付、褐釉陶器や地元の土器などが採集される。山原川沿いの琉球石灰岩の崖下は風葬墓になっている。対座して東側の丘陵には元桴海村があった。

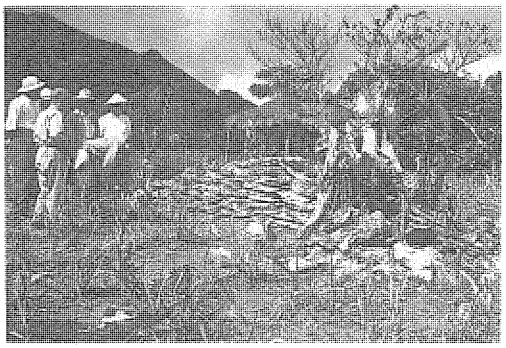


写真30　八重山民俗歴史資料調査会による墓地調査（1964年頃）

写真31　青山学院大学による発掘調査

82．元桴海村遺跡[155]（ヤマバレー遺跡[156]）

山原川と荒川との間の琉球石灰岩丘陵上に位置する。県道の北側に百二〇基の石積み墓群[157]があった。一九六四年四月一二日、八重山民俗歴史資料調査会によって一帯の墓地の調査が行われた[158]。

また、三上次男代表を中心とする青山学院大学の調査団により、一九七六年（昭和五一）一二月に第一次発掘調査[159]、翌年（昭和五二）三月に第二次発掘調査[160]が行なわれた。その際、「ヤマバレー遺跡」の名称で報告書が出ている。しかし、『八重山島年来記』万暦四七年（一六一九年）の項に、「桴海村之儀前代山原与荒川之間ふかい与申所江有之候処此年大田兼久江村替仕申候[161]」と、記されていて、一帯を地元の人は元桴海村

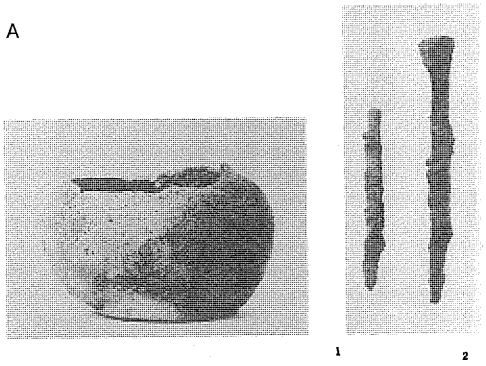


写真32　土器、鉄製品、釘

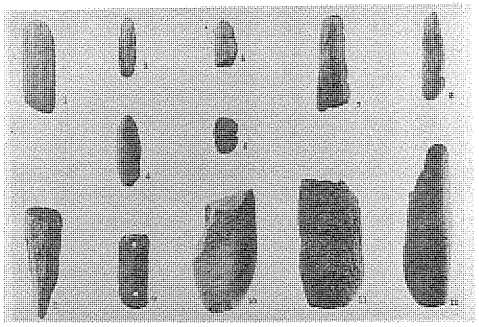


写真33　石製品（石製ナイフ、石錘、叩き石）（青山学院大学ヤマバレー遺跡調査団『ヤマバレー遺跡第２次発掘調査概報』1980年、注159より）

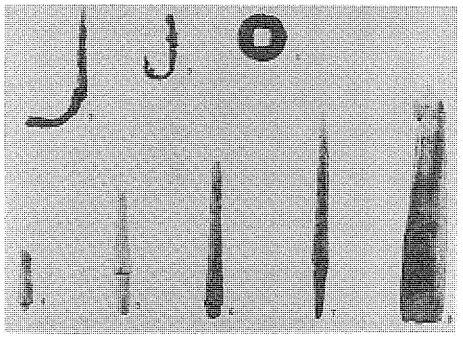


写真34　釣針・鳩目銭・骨製品（尖頭器・篦）

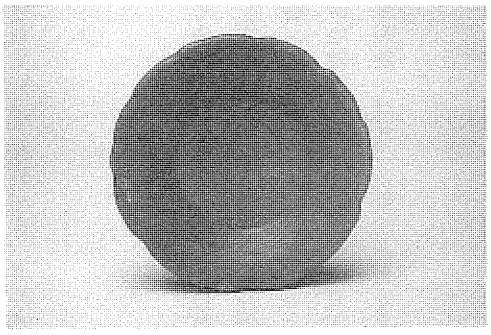


写真35　元桴海村遺跡採集の青磁皿

写真36　土器の出土状態
（青山学院大学ヤマバレー遺跡調査団「ヤマバレー遺跡第２次発掘調査概報」1980年、文献159より）

と呼んでいるので、ここでは元桴海村遺跡と呼びたい。

調査の結果、住居跡や鍛冶工房跡が検出された。多数の中国製の青磁や白磁、染付、鉄釉、緑釉、灰釉、赤絵や土器（深鍋・壷形土器・碗形土器）、砂岩製鞴の羽口（数点）や土製鞴の羽口の小片が一点、砥石、鉄滓、刀子、釣針、釘などの鉄製品、青銅製の煙管吸口、玉類、石錘、石製ナイフ、叩き石、ヒメシャコ貝製の貝錘、土製品、骨製品（尖頭器・篦）、鳩目銭などが出土した。[162]

また、一九七八年九月二六日から一〇月三日まで、石垣島一周道路の拡復工事に伴う緊急発掘調査を県教育庁文化課が行った。調査の結果、地元の土器、中国製の青磁、白磁、染付、赤絵、黒褐釉陶器、銭貨「萬暦通寶（一五七六年初鋳）などが出土した。[163] 一四世紀後半から一七世紀前半にかけての遺跡である。

なお、元桴海村一帯の小村には、次のような口碑伝説[164]がある。

「昔、フスデ（ウフスデ）村があった。ある夜、村人が寝静まったころ、眼光するどく三日月形にかがやいた大鰻が現れて、村人を食い殺すこと数度におよんだ。村人は戦々恐々として休まる気もしなかったが、その後、大鰻を退治防御する術策もなく、村は四散してしまった」

83. 桴海村遺跡

桴海御嶽を中心として集落が形成されていた。[165] その一帯を通称「大原」と呼び、土器や近世の壺屋陶器、日本陶器、荒焼などが採集される。『八重山島年来記』には、一六二五年に大田兼久へ大波が上り桴海村が

流失したので大原へ移転したと記されている。[166] 現在でも、井戸や屋敷の石垣が残っている。

84．野底村遺跡（野底遺跡）[167]

吹通川河口より東北五百メートル余り、海岸近くの野底御嶽[168]を中心にして琉球石灰岩平地上に野底村が形成されていた。現在でも井戸や屋敷跡の石垣などが残っている。古記録『八重山島年来記』によると、黒島からの強制移住によって一七三二年に村建てした近世集落跡[169]である。土器や近世にかけての壺屋陶器、日本陶器が地元の荒焼などとともに採集される。

85．野底崎遺跡

野底崎の一帯から中国製の青磁や褐釉陶器、土器などが採集される。この一帯はススキが生い茂っている。スク時代の遠見台の跡と思われる。

86．野底石崎遺跡

伊原間湾の野底寄りに突き出した琉球石灰岩の岩山を「野底石崎」と呼び、本遺跡はそこに形成されている。頂上南部から斜面にかけて、平らな石灰岩（サンゴ）を用いて野面積みの囲いをめぐらした石垣がある。西側は海に面して絶壁になっている。岩山の頂上は、約二〇坪位の広場で、中国製の青磁や褐釉陶器、土器などが採集されている。[170] 現在、南側の浅い谷や海岸線の丘陵などにはススキとアダンが生い茂っている。スク時代の遠見台の跡と思われる。

表2　石垣島のスク時代の遺跡一覧表

	遺跡名	調査有無	文献有無	伝承有無	須恵器類	中国製の貿易陶磁器	推定年代	備考
一	四ヵ村の発祥に関連する遺跡							
1	四ヵ村内遺跡（石垣貝塚）	有	無	無	不明	数十片	?無土器時代から現代	無土器時代終末期と複合?
2	石底山遺跡	有	有	有	1片	数片	前期	四ヵ村発祥地
3	ビロースク遺跡	有	有	有	多い	数十片	13～16世紀頃	※『山陽姓大宗長光家譜』の序文に登場する美良底首里大役子が統治した村跡。
4	川花第一遺跡	無	無	無	不明	数十片	14～16世紀頃	
5	川花第二遺跡	無	無	無	数片	数十片	14～16世紀頃	
6	川花第三遺跡	有	無	無	数片	数十片	14～16世紀頃	※川花第三遺跡は、先学者鳥居龍蔵博士が発掘した四ヶ村の西端の遺跡。
7	カニヌティーハカ遺跡	無	無	無	1片	数片	14～16世紀頃	
8	竿若東遺跡	有	無	無	数片	数十片	14～16世紀頃	
9	カフムリィ遺跡	無	無	無	不明	数十片	14～16世紀頃	
10	平川貝塚	有	無	無	不明	数十片	16～現代	
11	大石垣御嶽遺跡	無	有	有	不明	数片	15～現代	村の御嶽
12	山原貝塚	有	無	無	多い	数十片	13～16世紀頃	
二	平得村の発祥に関連する遺跡							
13	ペーギナー遺跡	無	無	有	不明	数片	前期	平得村発祥地
14	アラスク村遺跡	有	無	有	不明	数十片	14～16世紀頃	
15	ウイスズ村遺跡	有	無	有	不明	多数	14～16世紀頃	
16	仲本村遺跡	有	無	有	不明	多数	14～16世紀頃	
17	宇部御嶽遺跡	無	有	有	不明	多数	15～近世頃	村の御嶽

	遺跡名	調査有無	文献有無	伝承有無	須恵器類	中国製の貿易陶磁器	推定年代	備考
三　大浜村の発祥に関わる遺跡								
18	パイナーカー遺跡	無	無	有	不明	数片	16世紀以降	村の降り井戸
19	ウフスク（大城）村遺跡	有	有	有	数片	多数	13～18世紀頃	
20	フルスト原遺跡	有	無	有	数片	数十片	14～16世紀頃	
21	崎原御嶽遺跡	無	有	有	不明	数片	16世紀頃	鉄器の伝承地
22	ガヤシキパマ遺跡	無	無	有	不明	多数	15～近世頃	港（貿易）
四　宮良・白保村の発祥及び東海岸の村々と関連する遺跡								
24	ヤドゥムレー遺跡	無	有	有	数片	数片	前期	※インナーラ（西かわら）・アンナーラ（東かわら）の兄弟が住んでいたフタラマ、フダ・セツコマなどの村跡だと思われる
25	ダンダ山遺跡	無	有	有	不明	数片	不明	
26	マシクナー遺物散布地	無	無	有	不明	数片	前期	
27	ウイズ遺跡	無	無	有	不明	数片	不明	
28	チビスク遺跡	無	無	有	数片	数片	13～16世紀頃	
29	クバントゥ遺跡	無	無	有	多数	多数	14～近世頃	
30	下ヌ家敷遺跡	無	有	有	数片	多数	14～近世頃	大規模集落址
31	ムニンヤーパマ遺跡	無	無	有	不明	多数	14～近世頃	港（貿易）
32	白保遺跡	無	無	無	数片	多数	13～15世紀頃	砂丘に立地
33	真謝井戸周辺遺跡	無	無	有	不明	数片	16～現代	村の降り井戸
36	カラ岳遺跡	無	無	有	不明	数片	15世紀頃	遠見台
38	ペーフ山遺跡	有	無	有	数片	数十片	14世紀頃	一部破壊
39	ブーマンゲー山遺跡	無	無	無	不明	数片	15世紀頃	大和墓

	遺跡名	調査有無	文献有無	伝承有無	類須恵器	中国製の貿易陶磁器	推定年代	備考
40	中マンゲー遺跡	無	無	無	不明	多数	15～16世紀	大規模集落址
五	平久保半島のスク時代の遺跡							
43	船越貝塚	有	無	無	不明	玉縁白磁碗一片	?～12世紀頃?	無土器時代の終末期と複合?
46	水浜遺跡	無	無	無	不明	数片	不明	
48	嘉良遺跡	無	無	無	不明	数十片	15世紀頃	
49	カーラマタ岩窟遺跡	無	無	有	不明	数片	16世紀頃	大和墓
50	花城村遺跡	無	有	有	不明	数十片	16～現代	現在の平久保村
51	ジーバ川河口貝塚	無	無	無	二片	不明	?～12世紀頃?	無土器時代の終末期と複合?
52	平久保御嶽遺跡	無	有	有	不明	数十片	16～近世	村の御嶽
53	元平久保村遺跡	無	有	有	数片	多数	14～16世紀頃	平久保加那按司の館・赤色土器時代の遺跡と複合
55	安良崎西方の岩山遺跡	無	無	無	不明	数片	不明	遠見台?
六	西海岸のスク時代の遺跡							
57	舟路川河口遺跡	無	無	無	不明	数片	不明	
58	皆野宿岡遺跡	無	無	有	不明	数片	14世紀頃?	ガバネーアジの館
59	ミンナ岡遺跡	無	無	有	不明	数片	15世紀頃	火番岡といわれる
60	名蔵シタダル海底遺跡	有	無	無	不明	多数	16世紀頃	沈没船
61	クードー貝塚	無	無	無	不明	数十片	14～16世紀頃	一部破壊
62	名蔵貝塚群	有	無	無	一片	玉縁白磁碗一片	?～12世紀頃?	無土器時代の終末期と複合?
63	浦田原遺跡	無	無	有	数片	不明	前期	ブナジル（女傑）の館

	遺跡名	調査有無	文献有無	伝承有無	類須恵器	中国製の貿易陶磁器	推定年代	備考
64	名蔵村遺跡	無	有	有	不明	不明	不明	名蔵御嶽周辺
65	平地原遺跡	有	無	無	多い	不明	前期	祭祀遺跡・赤色土器時代の遺跡と複合
66	大田原遺跡	有	無	無	多い	数片	前期	
68	シーラ原遺跡	無	無	無	多数	数片	前期	祭祀遺跡
71	崎枝御嶽遺跡	無	有	有	不明	数片	16～現代	村の御嶽
72	崎枝カサザキィ遺跡	無	無	無	不明	数片	14～16世紀頃	
	七　北海岸のスク時代の遺跡について							
73	川平貝塚	有	有	有	数片	多数	14～16世紀頃	川平村字獅子森の遺跡
74	川平火番岡遺跡	無	有	有	不明	数十片	16～近世	
75	底地深道遺跡	無	無	無	不明	数片	15世紀頃	
76	ザンドウ原洞穴遺跡	無	無	有	不明	数片	16世紀頃	大和墓
77	ハコーザキィ遺跡	無	無	一片	一片	多数	14～16世紀頃	港（貿易）
78	仲筋貝塚	有	無	無	不明	多数	15～16世紀頃	大規模集落址
80	元仲筋村遺跡	無	有	無	不明	数片	16～17世紀頃	
81	ヤマバレー村遺跡	無	無	有	不明	数片	15～17世紀頃	
82	元桴海村遺跡	有	有	有	不明	多数	15～17世紀頃	大規模集落址
85	野底崎遺跡	無	無	無	不明	数片	不明	
86	野底石崎遺跡	無	無	無	不明	数片	不明	

Ⅲ　名蔵シタダル海底遺跡について

はじめに

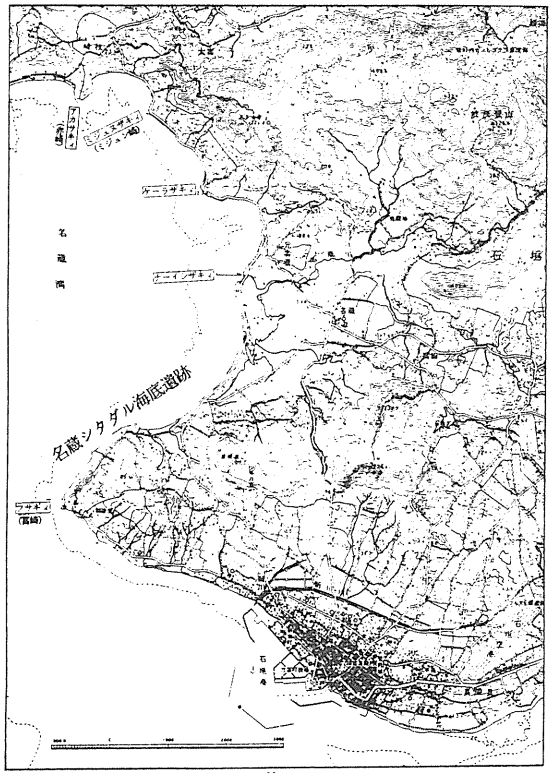
名蔵シタダル海底遺跡は[1]、石垣島の西海岸、名蔵湾の南東側一帯に位置するシタダル浜を中心としてクマダ浜からクードー浜にかけての海岸及び海底に広がる遺跡である[2]。「シタダル」とは、岩と岩の間から水がしたたり落ちる地形のようすから名づけられた地名である。かつて、この地で御木本幸吉が真珠の養殖をしていて[3]（大正三年五月に着手）、漁民はこの一帯をヒンクンヤー（真珠の家）とも呼んでいた。

このシタダル海底遺跡からは多数の中国製の舶載・貿易陶磁器が出土している。これらの大部分は、青磁の碗や白磁の小皿、褐釉陶器（南蛮陶器＝スビガミ）などの破片である。また、青磁の小皿、大皿（盤）、鉢や香炉、白磁の碗、染付（青花）、他に中国の銭貨「開元通寶」（六二一年初鋳）や「洪武通寶」（一三六八年初鋳）なども出土している。

八重山の歴史の中で一番にぎわった時代は盛んに交易を営んでいた中世のスク時代であるが、石垣島の遺跡、貝塚等の六～七割は中世のスク時代のものである。その当時は密（私）貿易が行われ中国の陶磁器文化が定着していた。そのことを裏付けるように八重山の中世のスク時代の遺跡からは膨大な中国製の貿易陶磁器（舶載陶磁器）が出土する。

ところで、名蔵シタダル海底遺跡から貿易陶磁器が出土することについては、大別して、港とする説[4]、沈没船とする説[5]、台風などのため荷がこぼれたとする説がある。陶磁研究家関口廣次氏や筆者などは、一九七八年まで当地を調査した結果から、沈没船とする説が妥当であると考えている。

ところが、一九八五年七月、日本水中考古学会（茂在寅夫団長）と朝日新聞社が共同で「沖縄・石垣島海中発掘調査[6]」を主催して名蔵シタダ



地図１　遺跡の位置図

ル海底遺跡を調査した結果、調査団はここを中世のスク時代の文化流入の玄関口と断定し、また、調査の際発見した石積みの遺構を中世のスク時代の船着場[7]（港）に比定した。

一．名蔵シタダル海底遺跡周辺の歴史環境

名蔵シタダル海底遺跡の周辺には、いくつかの時期の遺跡が数多く分布している。そこで各遺跡一覧表を作成した。

表１　名蔵シタダル遺跡周辺の各遺跡跡一覧表

	遺　跡　名	年　代
1	大田原遺跡	赤色土器時代
2	平地原遺跡	赤色土器時代
3	冨崎遺跡・冨崎貝塚	赤色土器・無土器時代
4	シーラ原石器材料地	赤色土器・無土器時代
5	名蔵貝塚群	無土器時代
6	神田貝塚	無土器時代
7	名蔵神田第二貝塚	無土器時代
8	冨和底貝塚	無土器時代
9	名蔵白水貝塚	無土器時代
10	シーラ原遺跡	スク時代
11	皆野宿岡遺跡	スク時代
12	ミンナ岡遺跡	スク時代
13	浦田原遺跡	スク時代
14	クードー貝塚	スク時代
15	白水洞窟遺跡	スク時代
16	元名蔵村遺跡	琉球王国時代
17	名蔵瓦窯跡	琉球王国時代
18	名蔵村跡	琉球王国時代
19	観音堂	琉球王国時代
20	唐人墓	琉球王国時代
21	クードー海垣	近世
22	大和宿舎又は倉庫跡	明治時代
23	クードー電信屋跡	明治時代
24	御木本真珠養殖場跡	近代（大正）

二、名蔵シタダル海底遺跡に関する調査結果や関係論文等

筆者が石垣島の西海岸、名蔵湾シタダルの浜辺から中国製の貿易陶磁器が出土することに注目したのは、今から三九年前の一九六〇年の六月頃であった。

1、一九六〇年六月

筆者は名蔵湾のシタダルの浜で、青磁の碗片、白磁の小皿片や中国の銭貨「開元通寶」（六二一年初鋳）や「洪武通寶」（一三六八年初鋳）などを採集した。何故このシタダル海岸から青磁の碗片、白磁の小皿片がたくさん拾えるのか不思議に思っていた。

写真1　クマダ海岸から多数の中国製の貿易陶磁器が採集された

2、一九六一年、ジョージ・H・カー博士を名蔵シタダルの浜に案内したら、この一帯から膨大な中国製の陶磁器が採集されるのに驚かれた。

3、一九六二年一二月二五日、ジョージ・H・カー博士がリチャード・ピアソン氏や歴史家大城精徳氏らとともに　再び来島されて名蔵シタダル海底遺跡を再調査し、「もしかしたら、沈没船ではないか？」との印象を筆者に語られた。

この点について、リチャード・ピアソン氏[8]は、『Archaeology of the Ryukyu Islands（琉球諸島の考古学）』の中で観音崎と名蔵湾の間にあるクードー（名蔵シタダル海底）遺跡から出土した中国製の陶磁器について次のように報告している。

「（中略）クードー（名蔵シタダル海底）遺跡の状況について、特に一言述べるに値する。遺物の散布する岩の後方は草木におおわれた岬に面しており、その麓には一つの湧泉がある。数度に亘って居住地として

写真2　調査中のW・I・O考古学研究グループのメンバー
撮影：ジョージ・H・カー博士（1962年）

利用しようと試みたとか、海岸にあった倉庫が倒壊したりしたような状況が考えられないとすれば、周辺環境から見る限りにおいて、クードー遺跡（名蔵シタダル海底遺跡）は難破船による結果としか考えられない。仮にそれが認められるならば、クードー遺跡から発見される陶片は全て一時期の所産と考えられる。従って、この（クードー遺跡検出陶片に対する）年代観は、長年にわたって放置され、またその中から金目のものを盗掘しようとする人々によって攪乱された（陶磁器の）窯跡からの（資料による）年代観よりも信憑性が高い」と、述べている。

さらに、大城精徳氏は「琉球の焼物の本質を歴史の中に探る」という論文を発表し、その中で、「八重山が中国と地理的に近いという有利な条件もあってか、独自の貿易を営んでいたようで、石垣、西表の主要な島だけにとどまらず、小さな島々に至るまで、至るところに青磁の破片が散らばっており、輸入陶磁器が上下の差別なく広範に使われたことを示している。もう、かれこれ十年余になるが、筆者は琉球歴史研究家のジョージ・Ｈ・カー博士と共に八重山の文化財調査に参加し、名蔵湾を始めとする各地から二百～三百キログラムに及ぶ青磁その他の破片を集めてきた。小山富士夫先生にお願いして、約一週間をかけてそれらの時代、及び窯の分類をしていただいたが、それによると殆どが明初期のもので、竜泉窯で焼かれたものであるとのことだった。わずかに南宋末から元初のものが混ざっていた。これは、沖縄本島の各古城址から蒐集された青磁片にもほぼ同じことがいえる[9]」と、報告している。

4、一九六九年三月中旬、石垣市在住のバービリー宣教師と大山盛保氏（ＯＫ給油所社長）らが名蔵湾から観音堂にかけての海底で青磁や白磁を採集している。

一九六九年一〇月一七日付の新聞に「印花青磁多量に出土－石垣島の名蔵湾の海底から」という見出しで「青磁に印花のほどこされたものが、一ヵ所から多量に出土することや鹿の模様に福の字のそえられたものや、金玉萬額の字の入ったものなどが出土した[10]」と、記載されている。

5、東京国立博物館の『特別展－日本出土の中国陶磁器』の中の「中国陶磁器出土の遺跡一覧表」の沖縄県の部には「出土地の遺物、員数－白磁小皿四枚、青磁三足香炉一口－時代は明－出土地八重山諸島石垣島名蔵湾海中－保管者沖縄県立博物館[11]」とあり、名蔵湾海中から出土した遺物は明時代のものだとされている。

6、一九七五年一二月下旬、筆者は青山学院大学の三上次男教授一行（他に吉田章一郎・佐久間重男・

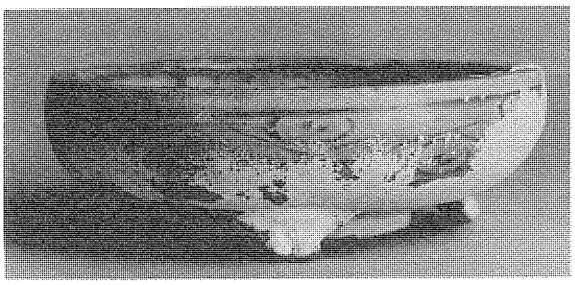


写真３　名蔵湾採集の青磁香炉
15～16世紀　高4.7（沖縄県立博物館所蔵）
（東京国立博物館編『日本出土の中国陶磁』1978年、注12より）

田村晃一教授）を名蔵シタダル海底遺跡に案内した。

その時、三上次男氏がクマダ浜の電信屋の跡地の地表の断面に露頭している青磁の一個の破片を見て、一帯には住居地があったようであり、「港ではないか」と、述べられた。

その点について、三上次男氏は「沖縄出土の中世中国陶磁について－中世沖縄と中国陶磁貿易の接点を求めて－」の中で、「さらに八重山群島の石垣島の名蔵海岸でも同様で、広い湾岸の水辺には波に洗われた中国陶磁片があちこちに散らばっている。海浜における散布の密度が高いので、難破船から打ち上げられた陶磁片ではないかとの説もあったようだが、実際に踏査してみると中国陶磁片は陸地の腐植土層が波に洗われてできた海浜の低い崖の断面にも姿を現わしているから、これらはその昔海岸の住居あるいは部落で使われていた可能性が大きい。このことは同じ遺跡から現地製の赤焼土器の破片が発見されることによっても傍證できる[13]」と、述べている。

7、一九七四年から一九七八年にかけて、陶磁研究家関口廣次氏と筆者らは、名蔵シタダル海底遺跡の共同調査や八重山の島々から出土した古陶磁について共同研究を行ない、その成果を『物質文化　31』の「八重山群島出土の古陶磁について」と、題する論文で発表した。名蔵シタダル海底遺跡関係資料はこの論文のなかの「一．出土古陶磁の紹介」及び「二．名蔵湾シタダル採取の遺物について[14]」に、報告した。

※．Ⅶ八重山諸島出土の古陶磁について（二六九～二八九頁）参照。

写真４　シタダルの浜にて、ジョージ・Ｈ・カー博士と（1980年８月）

青磁（915点）	
底部（821点）	
見込無文（597点）	
見込スタンプ文（224点）	
口縁（53点）	
胴部（41点）	
白磁（104点）内、４点完形品	
南蛮（220点）	
底部（27点）	
口縁（10点）	
肩部（13点）	
胴部（170点）	
染付（９点）	
総計（1,248点）	

表２　名蔵シタダル海底遺跡採集の中国製貿易陶磁器の内訳（1974年）

8、ジョージ・H・カー博士、ダイバーの乾桂二氏、加藤芳雅氏の三氏が来島し、一九八〇年九月二五日から一〇月二五日まで一ヵ月間、名蔵湾の通称シタダル海岸一帯を調査した。[15]

「八重山日報」一九八〇年一〇月二五日付記事「名蔵湾で中国沈没船調査、米国歴史学者カー博士グループ、二百点の中国陶磁器を採取約五〇〇年前の沈没船遺品?」の中で、カー博士は、「中国船がこの付近で沈没したことは、十分可能性があると思う。時代は明朝のころで、いまから四九〇～五〇〇年前の貿易船だろう」と「沈没船説」を主張した。

また、沖縄県立博物館の『沖縄出土の中国陶器（上）―ジョージ・H・カー氏調査収集資料―先島編』のなかで、ジョージ・H・カー博士は[16]「琉球における陶磁器物語」を発表し、そのなかの「特別な問題と重要な遺跡」の項で、「これらの陶磁器破片は、一隻の難破した一六世紀初期の船からきたものに違いないと思われる。その船が中国船だったか、琉球船だったかは、今のところ知ることはできないがこれは重要なことである。この船は、おそらく名蔵村の投錨地に入るか出る途中で暴風におそわれ浸水沈没したか、あるいは座礁したかして、波でシタダル浜に押し流されてきたものではないだろうか、それ以来潮流によってこれらの破片は散布されたものであろう。一九六二年、小山富士夫教授はクードー海岸を訪れ、後にそこから採集された二一四個の青磁片を分析し、その一片は宋代後期か元代のもの、五片は元代、一九六個の破片が明の初めか中期のものと鑑定された。一二片は不明であった。そしてここに一六世紀に島から島へと行商された貿易品の見本があるということになる」（訳＝大城精徳、校閲＝宮城悦二郎）として沈没船だとする説を強調した。

また、ジョージ・H・カー博士が先島諸島（八重山、宮古諸島）で採集した陶磁器類の内、中国製の陶磁器を、亀井明徳氏が分類・整理し、「先島諸島採集の輸入陶磁」と題する論文を発表した。その中の石垣島の名蔵クードー海岸の項で、「採集品の内訳は、青磁碗、皿、盤、白磁小皿と少数の青花である。青花は二点ある。口縁を外反する碗で、外面は雲文、内面は圏線内に卍文を配し、青料は明るい。これらの青花は明中期のものであろう。クードー海岸の採集品は、明代前（一四世紀後半）、中期（一五世紀前半期）と考えられる」[17]と、述べている。

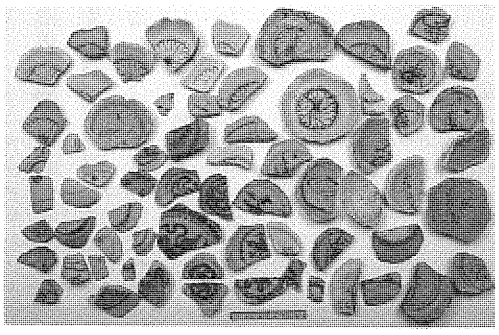
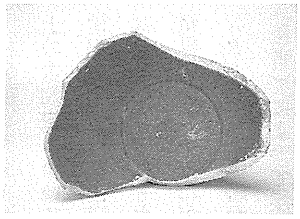
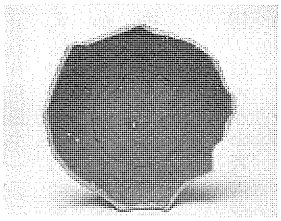


写真5　クマダ浜からまとまって採集された染付片

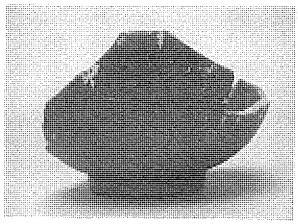
9、関口廣次・谷川章雄・中沢富士雄の各氏と筆者は共同研究で一九七九年一二月～翌年一月の冬休みを利用して仲筋貝塚の学術調査を実施した。この調査の結果は『沖縄、石垣島仲筋貝塚発掘調査報告』[18]（一九八一年）で報告してある。その註で名蔵シタダル海底遺跡を紹介したので、以下に引用する。



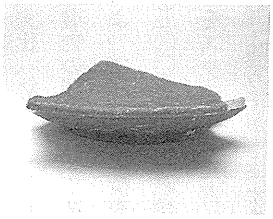
A．青磁の大鉢で顧氏のスタンプが押されている



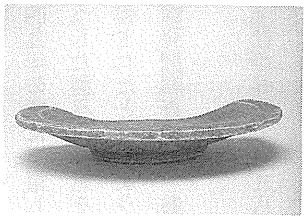
B．青磁の大鉢で顧氏のスタンプが押されている



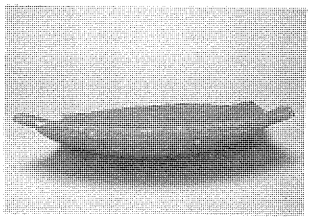
C．青磁の大鉢で顧氏のスタンプが押されている



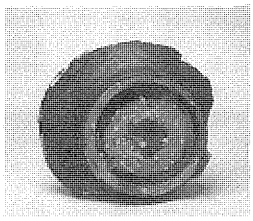
D．青磁の大皿



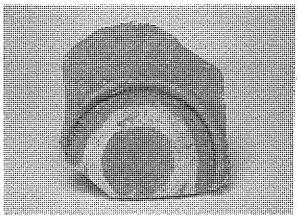
E．青磁の大皿



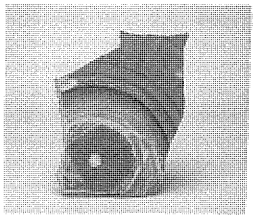
F．青磁の大皿



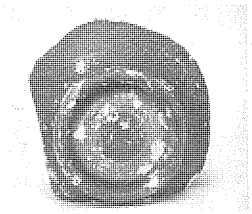
G．青磁の大皿



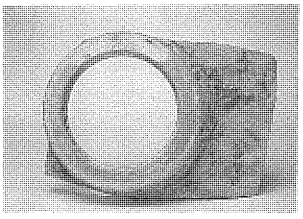
H．青磁の大皿



I．青磁の大皿

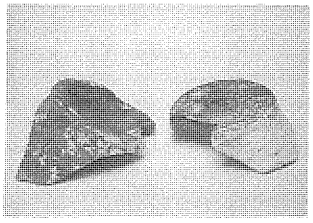


J．青磁の大皿



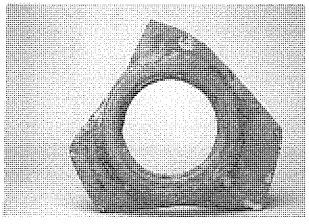
K．褐釉陶器（南蛮）

L．褐釉陶器（南蛮）



M．褐釉陶器（南蛮）

N．褐釉陶器（南蛮）



O．褐釉陶器（南蛮）

写真６　名蔵シタダル海底遺跡から採集された中国製の貿易陶磁器（青磁の鉢、大皿、褐釉陶器）

「名蔵シタダル海底遺跡については、かつて筆者らが「八重山群島出土の古陶磁について」（『物質文化　31』（一九七八年）のなかで一五世紀後半～一六世紀前半の一括遺物の好例として挙げた。一九八〇年にはジョージ・H・カー博士らによって沈没船の探査が行なわれ、船体は発見できなかったが、海中より五〇〇点程の青磁類が引き揚げられた。シタダル海底遺跡からは顧氏銘をスタンプした青磁碗も最近、大濱氏（筆者）によって採集されている。陳万里が指摘する様（『中国青瓷史略』一九七二年・『瓷器與浙江』一九七五年参照）に「顧氏」の年代が正統年間即ち一四三六年～一四四九年の間に活躍していた名工顧仕成の名に由来するのであるなら、こうした製品は当然それ以降のものとなり、かって私達の考えた年代観が補強されたと言えよう。」

※．付録『沖縄、石垣島仲筋貝塚発掘調査報告』参照

10、日本水中考古学会と朝日新聞社が共同で一九八五年七月五日から二〇日までの間、名蔵シタダル海底遺跡での「沖縄、石垣島海中発掘調査」（茂在寅夫団長）を行なった。[19]

海中発掘調査団はシタダル浜の前に二列のサンゴ石灰岩を組み合わせた護岸のような構造物を発見し、調査結果として中世の船着場（港）ではないかと発表した。

その点に関しては、『沖縄タイムス』一九八五年七月一四日付に「青磁、白磁などを発見、日本水中考古学会の石垣島沖海中発掘調査、船着場?、多数の遺物、中国と古いつながりの跡」の見出しで、「二列のサンゴ石灰岩の組みあわせた護岸のようなものも見つかり、関係者は〈港か、あるいは、船の仮宿泊地があったかもしれない〉とみている。大小片や完形品のいずれも中国、明初め以来一四世紀頃の物といわれ、この地が八重山と中国の古いつながりの跡だったことが明らかになりつつある」と書かれている。

また、七月二一日の『八重山日報』のなかで、茂在団長は今回の調査について次のように述べている。

「①遺物は、郷土の財産として永久に保存し石垣島の歴史解明の資料に利用してもらいたい。②遺構が発見されたことや諸般の事情からして名蔵湾シタダルは水を運ぶ船の接岸地であったのではないか。③名蔵湾は文化流入の玄関口であり、今回の調査が今後地元研究者の調査研究の糸口になれば幸いである。④調査は水中考古学として入門段階のもの。今回はダイバーの綿密な記録に感服」などと、述べた。

さらに、「採集した青磁、白磁、南蛮がめなどの破片、遺物二九一点は石垣市教育委員会で保管、今後永久保存のための脱塩処理、年代判定、実測などの歴史的調査を行ない、日本水中考古学会では、二年後（一九八七年）をメドに最終報告書をまとめあげようとしている。なお遺物は、最終的に八重山博物館に寄贈の計画でいる」旨発表した。最終報告書は現在までのところ未だにまとめられていない。

表３　名蔵シタダル海底遺跡から採集の中国製の貿易陶磁器一覧表

（1980年４月30日現在）

Ⅰ 青磁	碗	口縁	48点	A．無文、外ワン 5点 B．無文、直立もしくは内ワン 5点 C．１～３条の沈線 7点 D．整った雷文 1点 E．崩れたヘラ彫り雷文 15点 F．鎬蓮弁文 0点 G．線彫り蓮弁文 0点 H．やや退化した線彫り蓮弁文 10点 I．最も退化した線彫り蓮弁文 0点 J．立体感を残した蓮弁文 5点 K．その他・不明 0点
		底部	1,361点	(1) 無文 886点 (2) 見込無文 16点 (3) 花文スタンプ 209点 (4) その他 48点　イ．文字 32点　ロ．双魚文 3点　ハ．方字状文 13点 (5) 不明 202点
	1512点	胴部	103点	103点
	大皿	口縁	10点	A．円形 10点 B．稜形もしくは波形 0点
		底部	19点	19点
	29点	胴部	0点	0点
	小皿	口縁	24点	A．円形 13点 B．稜形もしくは波形 11点
		底部	0点	0点
	24点	胴部	0点	0点
	鉢 22点	口縁	8点	8点
1,587点		底部	14点	14点
Ⅱ 白磁	碗	口縁	1点	A．やや外ワン 0点 B．直立もしくは内ワン 1点
		底部	2点	(1) 無文 2点 (2) 蛇ノ目 0点 (3) 花文 0点
	3点	胴部	0点	0点
	小皿	口縁	4点	4点
		底部	199点	割高台（162） 199点
206点	203点	胴部	0点	0点
Ⅲ 南蛮	壺類	口縁	27点	A．玉縁口縁 1点 B．肥厚口縁 22点 C．逆Ｌ字形口縁 4点 D．ラッパ状口縁 0点 E．その他 0点
		底部	72点	72点
524点	524点	胴部	425点	425点
Ⅳ 染付他	碗	口縁	0点	・近世印版手を除外
		底部	24点	・嘉靖タイプのもののみ
25点	25点	胴部	1点	・見込文様は折技梅花文と捻り菊花文多し 25点

三　中世の船着場説に対する疑問

沖縄、石垣島海中発掘調査団（茂在寅夫団長）がシタダル浜の前方に二列のサンゴ石灰岩を組み合わせた石組の遺構を中世のスク時代の船着場の遺構[20]ではないかとしたことは疑問である。

御木本真珠養殖に長く携わった新川村在住の宮里亀吉氏や川平村在住の仲野源一氏等の話によると、「大正三年の五月、名蔵湾の観音崎の北側で真珠の養殖に着手したが、風の禍い（台風など）や魚介等の害により、大正五年の五月頃崎枝に、そして川平湾に移っていった[21]」と、いうことである。

また、新川村在住の漁民の高良勇吉氏は、「一九六〇年頃まではエークを漕ぎながら漁撈をしていてシタダルの浜は一時休憩する場所でもあった。シタダルの浜の付近では、ボラを捕るための刺し網をかけたり、カツオの餌をとっていた。漁民の先輩たちから、昔シタダル一帯で真珠を作っていたので、一帯を通称ヒンクンヤー（真珠家）と呼んでいたのを聞いた。沖のクソタレイシグヮ（岩）から板干瀬に沿ってサバニ（船）が往来できるように施されていたし、シタダルの高岩の北側のあだんの生い茂ったところにマーギーラー（シャコ貝）が山と積まれていた。真珠養殖と関係あるかどうかは専門家ではないから何んとも言えないが、二〇年前には無くなっていた。また、北側のクマダ浜の平坦な地は電信屋の跡だと言われ、崎枝に向かって海底線があった」と述べている。これらのことから、石組の船着遺構は、大正三年（一九一四）の御木本幸吉の真珠養殖場の船着場だったのである。

早速その件について、日本水中考古学会の「沖縄、石垣島海中発掘調査団」の方々にも連絡した。國分直一氏や金子エリカ氏からは一九八五年八月二四日付で、「ミキモトの真珠養殖施設があったことを茂在先生にお知らせしました。とんでもない想定をするところでした。御教示厚く御礼申し上げます」との手紙を受け取った。

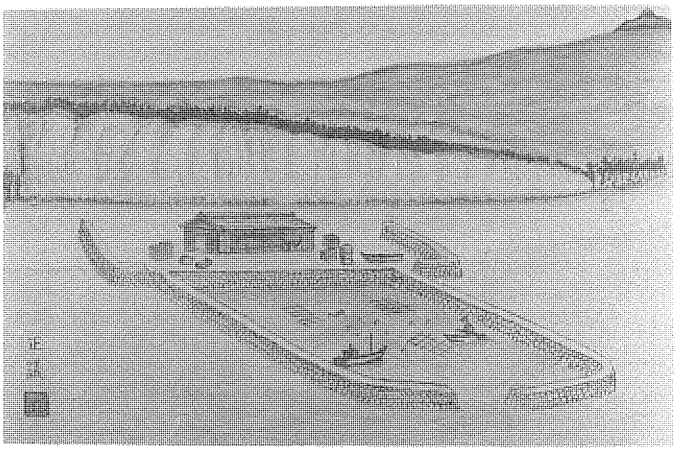


図1　大正3年頃の御木本真珠養殖場の全景画
（『絵で偲ぶ大田正議の我が島展』1987年、注22より）

一九八七年三月二六日から四月一二日まで「石垣市立八重山博物館」で『絵で偲ぶ大田正議の我が島展』が開かれた。展示画の中に名蔵湾にあった御木本真珠養殖場の全景画があり、その説明書きに「大正三年に名蔵湾クードウ電信屋の南のシタダル近くに石積みの小湾を築き養殖場とした[22]」と、記されてあった。

名蔵のシタダル浜にある船着場の石組遺構は大正三年につくられた御木本真珠養殖場の跡であった。

四．名蔵シタダル海底遺跡における貿易陶磁器散布状況

名蔵湾岸のフサキ浜、シタダル浜、クマダ浜、クードー浜にかけて、中国製の貿易陶磁器などの散布状況をみると、シタダル浜の板干瀬を境に南側のフサキの浜にかけて非常に少なく、北側のシタダル浜、クマダ浜にかけてもっとも多く、クードー浜にかけて次第に少なくなっている。特にクマダ浜の干潟の礫層の中から、膨大な青磁の破片が発見された。

シタダル浜は中生代のチャートによって岩礁海岸を呈し、沖の二〜三〇〇メートルのクソタレイシグヮ（岩）までの海触棚の海底はチャートの岩盤の緩やかな傾斜が続いて急に深みに変わっていく地形である。そのうえに枝サンゴなどが繁殖している。そのため、シタダルの浜の海触棚の海底の岩盤の上から船倉や陶磁器などの完品を発見することは並大抵のことではない。

一九七七年頃、韓国の新安海底[23]から、宋元時代の沈没船と完品の中国製の陶磁器などが数多く発見されている。新安の海底は部厚いヘドロ層なので、ヘドロ層の中から中国製の陶磁器などや船倉が発見された。シタダル浜の沖の海底とは地質上様相が異なるのである。

シタダル浜一帯の中国製の陶磁器の散布状況から判断して、シタダル浜の沖から二〜三〇〇メートルのクソタレイシグヮ（岩）に、交易船が衝突、または座礁して沈没し、その際に積荷が潮流に乗ってシタダル浜やクマダ浜、クードー浜に流れていったと考えられる。シタダル浜の沖は板干瀬が潮流を遮っているために、その北側には白磁小皿の完品や完品に近い形の青磁の碗などが多く発見された。

また、クマダ浜一帯の礫層から、多数の青磁の堅固な高台部分の破片や少数の染付（青花）などもまとまった形で発見されることから、船倉に梱包された陶磁器（青磁・白磁小皿など）が潮流に乗って浜辺一帯に打ち上げられたことが考えられる。

さて、シタダル浜の白磁の小皿や青磁の破片を拾いだしてから三九年間、筆者はたえず陶磁器以外のものが発見できないものかと現地に何度も足を運びながら踏査を続けてきた。

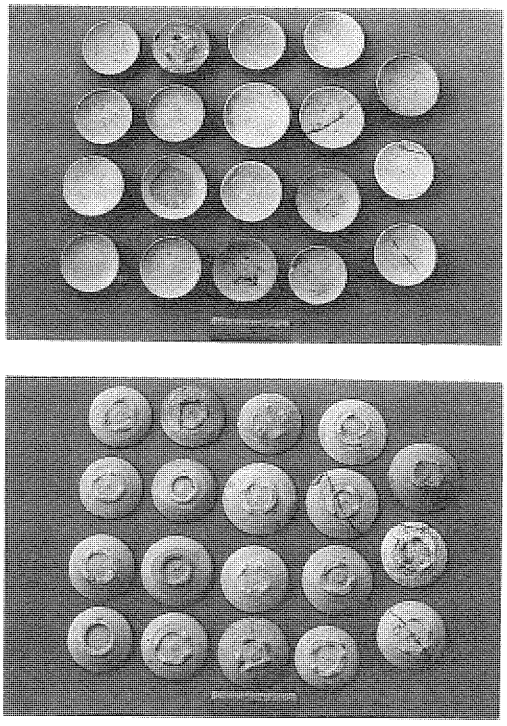


写真７　シタダル海底遺跡採集の白磁小皿（表・裏）

スク時代には八重山の島々を中継地として密貿易が営まれていたので、中国製の貿易陶磁器の見返りとして、地元の物産がここにまぎれてはいないか、あるいは琉球、日本の物産がないか、探査し続けたが、発見されたのは中国製の貿易陶磁器や、岩と岩の間から見つかる船鉄釘や中国の古銭のみであった。

そのことから、沈没船は琉球や大和の船ではなく、中国のジャンク船であったと考えられる。八重山の人々が日常品として使用していた中国製の陶磁器を満載し、八重山の人々と交易を行おうとして村々へ寄港し、沖のクソタレイシグヮ（岩）に座礁して沈没したと思われる。

まとめ

中世のスク時代の港（船着場）とするならば、飲料水補給のための流水や湧き水がなければならない。しかしシタダル浜には岩と岩の間から滴る水を溜めた溜り水があるだけで、一汲みするとすぐになくなってしまうほどであり、飲料水の補給は全くできない。また、西向きで潮流は早く、北から風をまともに受け、冬期は港に不向きである。

さらに、シタダル浜一帯が港であれば、ここを拠点として荷の積み出しが行われたり、休憩をとったり、多くの人々が出入りをするので、港一帯には食料残滓の貝殻、獣魚骨や地元の土器片が多く発見されるはずであり、また、港の近くや後背地には消費地である大規模なスク時代の中世集落跡があるはずである。

例えば、石垣島の東海岸の大浜海岸[24]（ガヤシキパマ、アーンヌパマ）の後背地として、フルスト原遺跡、ウフスク村（カンドウ原）遺跡などがある。また、宮良海岸[25]（ムニンヤーパマ）と下ヌ家敷（シィムヌカク）遺跡、小波本（クバントゥ）遺跡との関係。さらに、北海岸の川平湾奥の海岸（ハコーザキィパマ）と後方の仲筋貝塚[26]との関係がある。

しかし、名蔵シタダル海底遺跡からは、食料残滓の貝殻、獣魚骨や地元の土器片や中世の大規模な集落跡などは全く発見されない。故に、名蔵シタダル海底遺跡は中世のスク時代の船着場（港）ではなく、従って文化の玄関口でもない。

ところで、名蔵シタダル海底遺跡から顧氏銘をスタンプした青磁の碗や鉢が数点採集されている。前記『沖縄、石垣島仲筋貝塚発掘調査報告書』[27]に述べたように、陳万里が指摘するように「顧氏」の年代が正統年間（一四三六年から一四四九年）の間に活躍していた名工顧仕成の名に由来するものであるなら、その製品は当然それ以後のものとなり、名蔵シタダル海底遺跡の年代は一五世紀後半から一六世紀前半だと考えられる。

名蔵シタダル海底遺跡[28]から出土する膨大な中国製の貿易陶磁器（青磁・白磁小皿・褐釉陶器・数一〇点の染付＝春花）などは、沈没船によってもたらされたものであるから当然一括遺物として扱うことが可能であり、同時期に生産され、流通していたものだと考えられる。